

早稻田學報

大正十一年三月十四號 二十二月十日發行 每月一十日發行

古代史の分解と結晶

目次

研究

講師 西村 眞次

校報

故功勞者展墓表——史學科の學科目増設——維持員會——教授會——科外講義——高等師範部の臨時試驗施行——中等教育視察——法學部主催の訴訟演習——日高留學生の歸朝——評議員異動——教授講師の異動——職員異動——圖書館報告

附錄 本大學第三十九回學事報告

校友會報

幹事常務委員聯合會——市内各區の校友會——稻門艇友會秋季大會——稻保會秋季大會——阪神稻保會秋季例會——片上教授と天津校友會——秋季上海早稻田會

學會々合

盛大なりし廣告文化展覽會——雄辯會々報——英語會消息

雜錄

大隈侯爵の移轉——秋季溫交會——在京濱校友記者招待會——田中教授の逝去——坪内博士の家庭用兒童劇と講演會

記念事業記事

本部報告——該事業資金申込芳名

本會維持費釀出者名報告

東京牛込

早稻田大學校友會

電話番三〇〇五

東京八八九六番

研究

古代史の分解と結晶

講師 西村眞次

緒言

日本の學界がすべて新らしく、若々しく、エキゾチックな香氣があるのに反して、歴史の世界、殊に日本史の世界は何となく古めかしく、老人らしく、微臭いところがある。それは日本には日本の學問がなく、大抵は外國から輸入したものであるのに、歴史のみは輸入することが出来ないからだ。偶翻譯でもすれば、はき違へたものが多くて、日本人に受け入れられるにはあまりに幼稚であるからだ。何事もバタ臭いのが流行る現代のこととて、此頃は歴史の世界にも大分他の學界の波及が来て、いろ／＼直輸入式、逐語譯式の述作も現はれたやうであるが、それでは他の學問が日本の學問でないところの外國の學問であるやうに、歴史もまた日本人の歴史でないところの外國人の日本歴史であらねばならぬ譯である。今日、歴史の學問だけが可也に流行つて、歴史其物が一向流行らないのは、つまり現代が直輸入時代、逐語譯時代であるからだ。

日本史、殊に其古代史は改造の必要に迫られてゐる。どこの文化國の歴史を見て、日本の古代史ほど非科學的なごまかしの、島國的で、世界的でないものは多くあるまい。それは『腐い物に蓋』がしてあり、或人は其の蓋を除かうとしながら、色々の事情からそれを敢てしないといふ點もあるが、實はまだ研究が行き届いてゐないのだ。研究が行き届いたやうな顔をしてゐるものも少くないが、實はそれとても大したことはない、只だ机の上での議論に過ぎないのが多い。

古代史の特性は、それが文獻的でないことである。在來のやうに『古事記』と『日本書紀』とを繰り替けてゐるだけでは、いつまで経つても上記に出ることは出来ない。支那や朝鮮の書物も参考にはなるが、それとても多寡は知れてゐる。古代史の研究は、さうした文獻的態度を捨て、新手段を探らなければならぬ日が來てゐる。私の考へでは在來の日本古代史に最も缺けてゐるところは、

第一には人種的理解を缺いてゐることである。第二には考古學的詮索が足りないことである。第三には比較神話學的研究が行はれて居らぬことである。第四には土俗學的比較、第五には言語學的比較を試みられぬことである。第六には社會的發達を無視してゐることである。此外細かく個條を挙げれば、いく通りも／＼それを列べ立てることが出来るが、煩しいから略することにして、ひつくるめて云へば、概して人類學的研究が缺けてゐるといふことになる。私はこゝ十數年來、人類學的研究に没頭すると同時に、その古代史に於ける應用を試みてゐるが、主として材料の蒐集に力を盡して居り、自分でセオリーを組み立てるまでに至つてゐないが、それでもかうした態度でどし／＼と材料を集めてゆくと、浮雲が舞つて星が一つづ、現は來るやうに、今まで疑問にしてゐたことが一つづ、解決せられてゆく愉快に逢着する。今それらの數例を擧げて、在來の古代史といふものがどんなにあやふやなものであり、到底在來の組織では生命を保つことが出来ないといふこと、それ故に、それは悉く元素に還元して、再びそれを結晶しかへなくてはならぬといふことを證據立て、見たいと思ふ。

(一) 人種的理解
これは古代史に於いて最も重要な點である。どこの國の歴史であつても、其民族の人種的理解を缺いたやうなもの、それを真正な意味の歴史と觀ることは出来ない。在來の國史には、天孫民族だの、出雲民族だの、蝦夷だの、熊襲だのといふ語が用ひられてゐるが、それらは日本人だけに限らぬが、或理解を持たずことが出来るが、もつとインテリナショナルな、換言すれば人類學的用語で説明しなければ、其各々が何人種、何種族に出るかといふことは分らない。實は歴史家それ自身に、それが何人種だか分つてゐないのだ。人種が分れば、人種の移動も研められねばならない。日本群島のやうな生成の新しい島に、馴鹿と共生した舊石器時代の人類などが住んでゐた筈はない譯だ。しかもさうしたことを學者たちは平氣で主張するに驚かされる。科學も何もあつた世ではないといふ感じが起る。私の考へでは、日本人は單式な人種ではない。少くとも六種ぐらゐの血を混へた複式人種である。學者は屢々日本人をマライのやうに考へるが骨格から云つても、土俗から云つても、そんなことはあり得ないことだ。少人種學的な知見の眼を開いた人は、私達が北方系の人種であることに氣注かなければなるまい。私は日本人は蒙古人種であるところの、ツングース(Tungus)を基調とし、それに先

住民衆であるところの高加索人種の一派アイヌの血液を混へ、また若干のインドネジャ族(Indonesian)ネグリート族(Negrito)らの血が其血管の中に通つて居り、今日南部支那から佛領印度支那あたりに住んでゐる印度支那族(Indo-Chinese)殊に苗族(Miao)の血液も混り、また可也に濃厚な漢族(Han Race)の混血をも見てゐると解してゐる。それらの證明は一朝一夕では出来ることでない。しかしそれにしても、これら諸種族の群島への移動の路筋と大體の年代とは明らかになければならぬ。私の考へではアイヌの移住は遅くとも紀元前二千年位で、黒龍江邊から樺太を南下して群島に入り、最南端は琉球諸島にまで及んでゐると思はれる。ツングースの移動は少くとも三回あり、第一次は紀元前千八百年にアイヌと同一方面からアイヌを遼うて來り、第二次は紀元前千二百年に露領沿海洲から朝鮮半島の東海岸を経て、水陸兩方面から群島に來た。第三次は紀元前六百年頃で、對馬海峡を越えて九州方面に上陸したと考へる。これらが古志部族、出雲大和部族、日向部族となつたのだ。ネグリートは非常に古い時代に黒潮で運ばれて、群島の南海岸に上陸し、或は絶滅し、或は混血して其特性を失つてしまつた。インドネジャ族は陸隔地方或は上佐方面に上陸し、長く

華人として日本人から異種族扱ひを受けてゐた。漢族は紀元前六百年頃から朝鮮半島を通して九州、中國地方に移住した。印度支那族も矢張り紀元前に九州の西海岸へ上陸して、支那史の所謂「倭人」となつた。其故郷は支那の揚子江以南の平地であつたに相違ない。それらの中、最も強力で濃厚な血液を日本人に傳へたものは、云ふまでもなくツングースである。ツングースが適應性に富んで、經濟的に其生活を住地に應じて變へる能力は恐るべきことで、外人もそれには驚きの香を捲いてゐる。これら六種族の渾然たる混血を経て、それ／＼の故郷を忘れてしまつたものを、私達は今「日本人」と呼んでゐるのだ。こんなことは紀記にも支那書にも書いてない。

(二) 考古的論索

古代の遺物を檢査することは、我邦に於いても可也古くから行はれてゐたが、單純なチレットアンチイズムから一步を進めて、科學的にそれを始めたのは明治二十三年から起つたことで、それ以來それは引續き可也盛んに行はれてゐるが、最近四五年前までの研究は、手段を誤つて對物研究の範圍を出でなかつたのみか、人種を無視して、石器ならばそれを悉く先住民族のものとして断定するといふ風であつたので、此方面の研究もすつかりやり直さなければならぬ状態にある。たとへば陸奥、兩羽地方の大形石器の如きは、それらを一樣からうか。私は其中に多數の第一次移住のツングース族のものが混つてゐると思ふ。畿内地方の石器中には、第二次移住のツングースのものが少なからざるに相違ない。石器にしても、彌生式と舊アイヌ式と區別のつかぬものが澤山ある。今夏私が陸奥の戸から得た褐色土器の如きは、原始的な彌生式土器であらうし、また同大外澤の舊アイヌ式土器に混つて出た直線文様の土器の如きも、別様の觀察を下さなくてはならない。今春山形縣で發見した土器の中には、アイヌ・ツングース式のものがあつて、それらの文化系統の大陸への繋がり方が極めて面白いのを私は感ぜずに居られなかつた。更に金屬器の中でも、銅鐸の如きは今尙未解決の問題であり、石器時代の遺跡から多數に鐵鏃(iron stage)が出ることも、北東アジヤ人が早くから製鐵を知つてゐる證據となるであらうし、しかも其鐵は單に砂鐵から造られたものばかりでなく、岩鐵からも造られたものがあることなどが、定量分析の結果、滿俺(manganese)の存在によつて知られたりして來た。かうなつて來ては考古學的研究も在來の儘では駄目だ。一面更に科學的研究を試みる必要があると同時に、他面文化的系統

を調査する必要がある。机上の研究は既に過去に投げられた、實地の踏査と實物の研究とによらなければ、日本の古代があつたやうにそれをさながらに知ることは出来ないのだ。私の數年間の研究だけでも、日本の固有文化——それを私の『太陽崇拜複合文化』(Sun-cult Culture Complex)と名づけるもの、系統が分つて來て、それが主として世界文化移動線の所謂「北線」を通つて日本群島に移動して來たことが餘程明らかになつて來た。最早今日は、考古學の對物研究に没頭してゐる時節ではないのだ。

(三) 比較神話學的研究

日本神話は他の民族神話と異なる。それは素よりいふまでもないことだが、それと他の民族神話との比較を怠ることによつて、日本神話の本當の價值、傳統、といふものが分らない。朝鮮や支那には比較されてゐるが、そんな狭い比較で、此複雑な血液を持つた日本人の神話が解決出来るものではない。早い話が、ヒコホホデミとホノスツリとの山幸海幸交換神話の如きは、餘程すぐれた批評を持つてゐられる私達の先輩、久米博士ですら錯誤に陥られた。博士はこれを憑據として山海分派の古代習俗の存在を主張せられたが、此神話と同一形式、同一プロットの神話がインドネジャ神話の中に發見せられ

只だ名前がバルバラとヒヤンとに變つてゐるだけだ。比較神話學者は往々にしてアマテラスとスサノヲとの神話を、太陽神對暴風神形式で説かうとするけれど、世界神話中太陽神を女性とするのは、私達日本人と現アイヌ(Holani)とのみであることには氣注かぬらしい。かうした事は、單に科學としての比較神話學だけでは分らない、そこに史學的檢討の必要があるのだ。私はかうした日本神話の特性を、その構成せられた時代の社會相——詳言すればmatriarchal societyの痕跡であると觀てゐる。しかもさう觀るのには、それ相當の證據がなくてはならない。さうした證據は史學でなくては立つて來ないのだ。

(四) 土俗的比較

幼稚な土俗學的比較は従前とても先進の間に試みられないことはなかつたが、根據あり、理由あるそれはまだ十分に試みられてゐない。一體日本内地の土俗學的研究がどれほど進んでゐるのだ。近周諸國のそれはどれ丈進んでゐるのだ。私達の邦に近しいところすら、否日本の勢圍内ですら、外人の研究の糟粕を嘗めなければならぬ状態にあるではないか。こんなことで日本歴史の曙が分らう筈はない。たつた三箇月の朝鮮旅行ですら、私は少からぬ土俗學的材料を手に入れることが出来、しかもそ

れは我邦古代の太陽崇拜や、樹木崇拜や、色々な宗教的狀態の疑問を解くのに手蔓を得て來た。一箇年も二箇年もやつたら、或は一切の疑問が解けるかも知れない。早い話が日本の家族制度の歴史を説いたものを見ると、まるで科學としての人類學的原則を應用してゐるだけで、差異を研究するところの史學的原則を應用したやうなものは見られない。だから、アフリカの家族制度も日本の家族制度も、其發達が同じやうに見えるのだ。私はちよつと北東アジヤ民族の家族制度の比較研究をやつて見たいけれども、日本のそれが他のそれからどう異つてゐるかを分つた。もう日本も眞剣に研究をしなくてはならぬ。西洋人の造つたセオリイへ無理矢理に事實を當て嵌めてゐるだけでは駄目だ。そんな日はもう疾くの昔に暮れてしまつてゐる筈だ。國家の起原などに於いては、此感が一層深い。早く豊かな研究費に後押されて、かうした調査に従事して見たい。私が過去十數年間の船舶の土俗學的檢討でも、どれだけ「不明」が「明確」に早變りしたか知れやしない。古代史研究には遺物(evidence)をあさる考古學的研究が必要であると同じく、殘物(remains)にあさるところの土俗學的研究が必要だ。

(五) 言語學的比較

言語學者は必ずしも我邦に少くあ

るまい。それらの人々によつて、可也多くの新発見も提供せられ、中には極めて篤學で、世界に一人か二人と云はれる、少壯研究家もあるが、しかし古代史の疑問を闡明するやうな研究——言語學の應用的方面は此頃いくらか忽諾に附せられてゐる。

私達日本の古代史に於ける民族相逐の史實は、どんな文献にも、どんな考古學的遺物にも現はれてゐないが、ツングース語族の言語の比較研究をやればそれが直ぐ星のやうにひらめいて来る。多くの中から一例を挙げれば、日本語の『後』を意味するアトはオロツコ(Orokko)語の『後』を意味するアツタと同原で、昔はアツと呼んでゐるが、後方から他種族が追跡して来るから『後方』といふ語が一轉して、『敵』を意味するアタとなり、更に再轉してアダとなつたのだ。民族移動の消筋も言語學的研究で分る、琉球語ニシは『北』を意味し、それは日本語イニシ(往)と同原で、彼等が北から移動したことを表はし、日本語の『東方』を意味するヒムガシは、『日向ひ』と同語で、私達の祖先が西から来たことを現はしてゐる。『戦』を意味するタタカヒは、私達の祖先の戦鬪法が叩き合ひであつたことを示してゐる。陸奥、出羽はアイヌの巢窟のやうに一般歴史家は考へてゐるけれど、それが古いツングース語であることを思へば、私の假定であ

せられて来る。ムツはオロツコ語で、正に『古事記』に現はれてゐる『美智』と一致し、これは海獺のことを意味してゐる。デフは『鮭』を意味するオロツコ語 Gamde で、鮭川の名が出羽地方に少らず残つて居り、古代ツングースの食料さへもそれで證明されて来る。『米』を意味するウルチが、サンスクリットの *Uthi* (अनुचित) — 『阿闍婆吠陀』から来たことが分れば、出雲や高千穂に米の原産地があるといふ説の亂暴極まるものであること、植物學者の米の原産地はデツカン半島であるといふ説を聞かないでも直ぐ分る。かうした風に言語學的比較が、古代史研究には極めて重要なことである。古代日本人の精神生活の如きは、此研究によることなしには、殆ど闡明せられる望みがない。

在來の古代史の缺陷の一つは、民族の社會的發達を無視してゐたことだ。それは紀記など後代の記述に基づいて、それよりも以前の社會生活を再現しようと試みたからだ。さりとて社會學などの一般記述を持つて來て、それを日本史に當て嵌めようとしたつて駄目だ。さうすることは却つて害になる。社會學は類同を發見するところの學問であるが故に、共通點の上に學説が立てられて來る

が、歴史は差異の上に再現の構造が築かれなくてはならない。早い話が、人類は一般に群から個に其社會組織が進んで來たといふので、日本の家族制度の如きも、さうして進んで來たものと思つたら大きな間違ひだ、歴史に於いては、西洋人の立てたセオリイを其儘應用するなどは以ての外禁物である。例へば氏族制度が崩壊して大家族制度が出来たなどいふのは、どうした根據の上に立つてゐるのであらう。詮じつめたら誰々の説に據つたとしても答へようとするのであらう。そんなことで歴史は證明されはしない。

氣焔のやうな形式で、以上、私は在來の古代史に於ける六つの缺陷を指摘し、今後これらは填補されなければならぬことを主張したい。かうした見地から古代史を改造することは容易でない。

又思ふに、在來の歴史の缺陷は、修史家の態度があまりに帝國主義的であり、人種的要素と文化的要素とを別々に視る獨立起源説 (Theory of Independent origin) に累はされてゐるといふ弊もあるやうだ。私は文化接觸説 (theory of culture contact) に同感を寄する一人でありながらも、人種には常に文化が伴ひ、文化には常に人種が伴ふことを信じないで居れない。最早帝國主義の史觀は捨てられねばならぬ。分國史も世界史

の一部分であるといふ見地の上に立たなければならぬ時が來てゐる。日本が日本だけ、支那、朝鮮を參考するだけで解けた日は去つた。これは江戸時代までのことだ。日本史は東洋史の一部分であるのでなく、世界史の一部分であることが分つて來た。古代史に於いては殊に其感が深い。どんな愛國者も、科學の前には頭を下げなければならぬ。廣い、大きい、正しい眼で日本の古代史を観る必要がある。在來の古代史は此際原の元素にまで分解して、Freudの所謂 "Reincarnation" を企てなければならぬ。要するに歴史家は事實を取扱ふ任務を帯んでゐる。彼れは歴史を哲學するところの哲學者ではない。彼れは議論をする前に、先づ彼れの歴史を書かなければならない。それが彼れの史觀の具現である。さうした意氣を以て、私は最近數年間に於ける古代史研究の結果の或部分を『知識の目録』といふ積りで、輪郭だけ書いて見た。それが出版部から

出た『國民の日本史』の第一編である、『大和時代』である。これを詳しく書くことは、私の一生の願ひであるが、今回ののはほんの輪郭だけであり、また古代生活の再現を目的とした爲めに、表現を描寫の形式、しかも螺旋式描寫法に據ることにしたから、此上の混亂と重複とを避ける爲めに、こまかい證明や、議論やは大方省くことにした。私はかうした著述を、現在の私が書き得べき至上のものとは思つてゐないが、いくつもの大膽な假定の連續であるところの此小著を公にしたことについては若干の自信を持つてゐる。それは曾て何人にも説かれなかつたことを私が此書の中にくらかでも描いてゐるからである。私は此書の出版を機として、先輩並びに學校諸君の親切な指導と公正な批評とを得て、これから先き永く續けらるべき私の研究が、正しく且つ出来るだけ近い道を辿るやうにしたいのである。

十月二十日の本大學創立四十年記念當日は、前號所報の如く、當局並に校友等は夫れぞれ故本大學功勞者に各位の墓參を爲し、該記念式執行の

校 報

故功勞者展墓表

旨を是等神靈に告げたるを以て、記念のために茲に其の展墓表を掲記すること、す。

故人

菩提寺又ハ墓地

代表展墓者

故人

菩提寺又ハ墓地

代表展墓者

聯盟の實際の效果及び將來の歸趨等を知るに裨補する所多かりき。

『國際聯盟表裏觀』

法學博士 林毅 陸氏

『國際關係の趨勢』

法學博士 山田三良氏

十一月一日午後三時講堂に於て、左の科外講演を請ひたるが、同博士は戦争の原因として、人性の研究より社會的經濟的諸事由の考察に及び教育的的方法及び、實際的の制度を以て世界の平和を確保し得べしとして、其の蘊蓄と信念とを披瀝せられ聽衆に多大の感動を與へたる。

『如何にして戦争を終熄せしむべきか』
ゾルダン博士

十一月二日午後三時、左の科外講演ありたるが、同博士はハワイが大平洋上の要衝の地にあると俱に日米の親善に如何に重大なる關係を有する所以を説く、大平洋上の樂園は一日米の諒解ある提携に依りてのみ實現せらるるとして講演を結ばれたり。

『太平洋の樂園』

ハワイ大學總長デーン博士

十一月六日より八日まで三日間、高等師範部國語漢文科及英語科各第一學年の臨時試験を施行したり、

中等教育視察

本大學教授の中等教育視察は、兩三年来實現せられざりしが爾今之を勵行すること、なり、教授松平康國

- 南部英麿氏
- 男爵前島密氏
- 中野武營氏
- 鳩山和夫氏
- 小野梓氏
- 田原榮氏
- 秀島家良氏
- 岡山兼吉氏
- 吉田東伍氏
- 山田一郎氏
- 牧野啓吾氏
- 田中唯一郎氏
- 大西祝氏
- 永田碩次郎氏
- 金子昌明氏
- 佐藤善長氏
- 川口潔氏

- 岩手縣岩手郡米内村 聖壽寺
- 神奈川縣三浦郡西下浦村 芦名淨樂寺
- 下谷區池の端七軒町 妙極院
- 府下 谷中墓地
- 府下 谷中墓地
- 府下 谷中墓地
- 府下 雜司ヶ谷墓地
- 麻布區一本松 賢崇寺
- 本郷區 吉祥寺
- 新潟縣中浦原郡小合村 大鹿墓
- 廣島縣安藝郡府中村 新宮墓
- 埼玉縣北埼玉郡持田村 共同墓
- 埼玉縣比企郡吉見村 息障寺
- 府下 雜司ヶ谷墓地
- 小石川區 善仁寺(移轉)
- 本郷區 吉祥寺
- 下谷區谷中 願心院

- 盛岡 高橋嘉次郎氏
- 相洲西浦 住職土川淨高氏
- 鹽澤學長
- 中村教務課主任
- 同
- 同
- 前田幹事
- 淺野理事
- 鹽澤學長
- 新潟 旗野美乃里氏
- 廣島 森田卓爾氏
- 埼玉、忍 牧野正賀氏
- 埼玉、比企、北吉見 原巖氏
- 岡山、下石井 岡宗利氏
- 前田幹事
- 鹽澤學長
- 同

- 吉川義次氏
- 阪田貞一氏
- 宮川鏡次郎氏
- 男爵 森村市左衛門氏
- 三宅恒德氏
- 諸葛小彌太氏
- 豐川良平氏

- 牛込區原町 成寺
- 赤坂區青山 德寺
- 府下 雜司ヶ谷墓地
- 赤坂區 青山墓地
- 下谷區谷中上三崎町 長安寺
- 府下 染井墓地

- 淺野理事
- 同
- 前田幹事
- 淺野理事
- 土屋工手學校主事
- 金澤、一番町 松岡恒太郎氏
- 鹽澤學長
- 前田幹事

史學科の學科目増設

文學部史學科に於ては、今次聚落地理學科目を新設したるが、小田内通敏氏該講座を擔任して、其の研鑽を結晶を講述せらる。

維持員會

十一月八日午後二時定時維持員會を開設す。當日、市島、渡邊、金子、田中、昆田、寺尾、阪本、淺野、鹽澤の各維持員參列の上、左の報告事項を聴取し、且つ早稻田新聞發刊の件其の他に就き審議したり。

教授會

一、學事報告に關する件
十月十四日午後三時政治經濟學部教授會を開催し、次學年教科書選定の件其の他に就き協議したり。

科外講義

十月十七日午後三時 商業部教授會を開き、來學年度學科課程に關する件其の他に就き協議を爲す。

衆議員島田三郎氏の特別講義は、前回に引續き、十一月三日(第五回)十日、十七日、二十四日に互り開講せられたるが、多年我が政界に重きを爲し、我が憲政の發達のために奮闘せられたる氏が、其の獨自の實觀より『明治政史』を論述さる、こと、講堂は常に聽衆に溢れ、斯學研究者に深き感銘と興味とを與ふ。

十月十七日午後三時講堂に於て國際聯盟協會主催にかゝる左の特別講演ありたるが、何れも、大戰後の緊張せる國際關係の現状を學び、國際

氏は十一月五日より十二日まで福島山形の兩縣下へ、教授岸本能武太氏は十一月十二日より十九日まで滋賀福井の兩縣へ、夫れぞれ中學校及び高等女學校等の中等教育を巡視せらる。

法學部主催訴訟演習

灼爛たる紅葉が早稲田の森を包んで、美しい秋の光に輝いて居た十一月十一日に、期待された我が法學部主催の刑事訴訟演習は開かれた。

事件の内容は火尾放吉なる無教育なる一ブリキ職人が牛込區神樂坂町の或るカフェーで一日飲食したが、其際其カフェーの女給伊東蓮子なる者に酒の機嫌から醜行を申込んだのに拒絶されたので憤激して放火するに至つたのであつた。

定刻午後一時に至らない中に當日の訟廷たる第廿番教室は早くも滿員のとなり、時に婦人傍聽席には三十餘名の女學生の一團が、つ、まじやか

に聽いて居たのは現代に於ける目醒めたる婦人の眞率なる欲求を表象せるもの、如くであつた。一時半被告人火尾放吉(松山翠)巡查に護送されつ、被告席に着くや、辯護人十三名、田中孫盛、尾形一

次は裁判長戸澤時典、判事池口治郎飯山禮有何れも嚴めしき法冠法服に著席、いよゝ公判は開かれた。嚴肅なる気分は自ら法廷の外内に溢れ

先づ最初の裁判長の姓名の訊問に對して被告人は「へい...。手前いでございやすか。氏名つては知ンネいでございやすが...。世間の野郎共が馬鹿ッ正直の放吉でい、申しやすんで

被告人は徹頭徹尾無學にして諄朴なる職人と成り切つて裁判長の訊問に對して時々突飛な供述をして滿廷を笑殺せしめた。審理は進み判官諸公の

の涙は之を掬すべしとして懲役五年を求刑した。滿廷其の峻烈當るなき堂々たる論告に自らその氣を新にし

た。次いで辯護人の辯論に入る。辯護人は交々立つて被告人に放火の犯意なかりし點を論じて検事が刑法第一〇八條の既遂を以て論告したる不當も甚しと駁する者あり。早稲田地方

裁判所検事局の検事には今迄期待して居たが今の論告でスツカリ當がはづれたとて極力検事の店卸しをする者あり。人間愛の本質に立脚し判例を引用して被告人の純一性に及び無罪を主張する者あり。犯罪病理學、

犯罪生理學より立論して男女の生殖細胞の分化的作用に及び滿廷を失笑せしむる者あり。刑法學上の危險性の問題より論評して本件が刑法第一

一〇條にも該當せざる旨を痛論し第一二六一條より検事の起訴手續の違法を難じて公訴不受理の申立を爲す者ある等辯護人の論旨又正然として甚だ鋭きものがあつた。辯論終結して

判官は判決文作成の爲退廷するや當日の指導者たる今村恭太郎先生は時間を利用されて懇切なる講評を給はつた。先生は公務御多忙の所をよく

數時間の長き間、親切熱心に指導下された事は吾等の最も感銘する處である。講評終つて判決は遂に言渡された。被告人放吉を懲役一年六月に處す、但三ヶ年刑の執行豫猶すと。蓋し相當の判決と云ふべきであらう。時に六時、日は既に没し暮色蒼然として早稲田の森を覆ふて居た。

評議員異動

本野博章氏

早瀬太郎三郎氏

大阪校友會に於ては、今回同會選出の評議員補缺選舉を行ひたるが、其の結果、前記の兩氏其の選に入ら

香川縣校友會選出評議員

中村祐吉氏

右は、豫て任期満了の處、同校友會は再び同氏を推すこと、なれり。

秋田縣校友會選出評議員

井上廣吉氏

右任期満了たるを以て、同校友會に於て改選の處、重ねて選任せられたり。

教授講師の異動

高等學院の物理學擔任

理學士 弓場重泰氏

文學部及高等師範部英語擔任
トレバ・ジョンス
猶ほ、臨時にミス・ケナード氏を聘して、高等學院英語會語の教授を依頼せり。

職員異動

副幹事兼會計課主任

土屋啓造氏

右都合に依り辭任せらる。同氏は滿五ヶ年に互り兩職に恪勵せられたるが、今般、日英醸造株式會社總支配人として就任すること、なれり。

會計課主任代理擔任

鈴木治三郎氏

右記念事業部主事擔任

松岡匡一氏

圖書館報告

本館九月份閱覽統計左の如し

開館日數 三十日

種別 人員 冊數

學生貸出 八、四一八 一四、一六二

特別貸出 四四 一〇六

館外貸出 一三八 四、九八八

公衆貸出 〇

計 八、五九三 一九、二五六

圖書新加月報

本館九月份新加圖書史總計三百六十四部九百十七冊にして内洋書二百五十五部三百三十二冊和漢書百九部五百八十五冊あり其細別左の如し

校友會報

幹事常務委員聯合會

十一月一日午後五時、本會幹事並に紀念事業常務委員會を永樂俱樂部に於て開く。當日紀念事業の難波幹事より該事業の経過報告ありて、協議に入り、左の諸件を決定したり。

- 一、會議より實行に入るの意味を以て、爾後本會議を毎月第一水曜に限る事
- 一、各區校友會の紀念事業資金募集を熱援し且つ有效ならしむるために、本會幹事が分任して各區に出張し、各區の委員並に紀念事業主事と協力して、資金募集の實を擧ぐる事

市内各區の校友會

十月中旬より市内各區は順次に在住校友會を開き、各區内の紀念事業資金募集方法を協議し、委員を擧げ學生委員等と提携して直ちに活動を開始すること、なれり。

稻門艇友會秋季大會

大會と言つても京濱在住の母校端艇部の先輩だけが集つて、過ぎた十月廿一日の隅田川の日本漕艇協會の十大學對抗大競漕に強敵にして眞撃なる漕艇道の覇者而大帝大を一蹴して三年目に漸く勝利の榮冠を得た母校の選手及び選手監督十五名を招待し祝勝の小宴を張つた。

宴後母校端艇部長として約十五年間お苦勞を願ひし鹽澤前部長に謝恩紀念品を會員一同を代表して深澤先輩より贈呈し、前部長鹽澤博士の懇篤なる謝辭あり、喜多幹事より會務報告あり、上村鐵雄氏浦本前幹事の補缺として、會報發行の件を實現すべく、二宮敬氏入會の件其他日本漕艇協會常任理事として宮本先輩より詳細の報告あり、歡談に自慢話に苦言に時を過ぎして十時散會、出席會員左の如し。

母校端艇部選手及び監督 (拾五名)

- 鹽澤學長、坂本三郎端艇部長、上村鐵雄、片山利久、高田軍三、深澤政介、竹本宇吉、宮木昌常、喜多壯一郎、朝賀忠勝、高木武夫、水野信安、杉本光治、大井派太郎、八田喜三、二階堂行善、石井英祐、三輪吉太郎、二宮知定、近藤勝彦、藤田忍、盛山智利、三浦友三郎、(順序不同)、(艇友會常務幹事報告)

稻保會秋季大會

學園出身者にして京濱に於て火災海上の損害保險業に従事するものよりなる同會は、十一月三日午後五時より丸の内永樂俱樂部に於て本年度

秋季大會を開けり。定刻先づ食堂を開きデザートコースに入るや、森副會長起つて開會の挨拶を爲したる後、食堂を閉ぢ別室會場に於て左の諸件を附議萬場一致承認を得。

- 一、大正十一年度會計報告ノ件
- 二、本會ヨリ故大隈總長紀念事業資金へ金壹百圓寄附ノ件

轉居

今般左記の場所に轉居致候間此段御通知申上候

大正拾壹年拾貳月拾日

東京市牛込區鶴卷町貳八六番地

(早稻田郵便局ノ角ヲマガリ、北へ大隈侯母堂新邸ノ門前ヲ過ギ眞直ニツキアタリ、元相良邸)

平沼淑郎

三、本會維持基金募集ノ件
四、幹事改選ノ件
更に、幹事の改選を行ひ、別項の五氏を副會長より指名して大會を終り、夫より母校教授五來欣造氏は「社會問題の歸結」と題し歐洲近時の學說を比較論評し「社會問題の歸結は特權階級——階級專制を打破して資本と教育とが公平に分配せられ兩者

- | | |
|-------|--------|
| 武田信敏 | 小澤増太郎 |
| 林泰造 | 立花要一 |
| 野中一廉 | 安藤作重 |
| 鯉淵啓 | 三田村甚十郎 |
| 石井佐仲 | 増田四一 |
| 川口準太郎 | 翁玄旨 |
| 諏訪部顯 | 大崎喜八郎 |
| 久保義美 | 田島一 |
| 豐田章 | 筒井常丸 |
| 吉澤清藏 | 高松常市 |

- 森盛一郎 小柳寛治
- 西村晴雄 鳥山貞治

- 松村源藏 伊藤十郎
- 關根富雄 星野徳太郎
- 飯田藤三郎 岡本融
- 長谷川直次郎 松本辰夫
- 次回幹事

阪神稻保會秋季例會

大正十一年十一月七日夕阪神稻保會秋季例會を大阪市大川端新館風月の樓上に於て開催す。來會者は共同日海の宿老廣瀬右近兩氏の外左の諸員にして本會稀に見る盛會なりき

- 八杉・平山(日海) 中島(豐國)
- 寺田・原田(共同) 井手(日清)
- 伊原(動産) 橋本・佐々木
- 小野(太平) 酒井・山内(帝海)
- 宮田(第一) (次第不順)
- 次會幹事 伊藤孫作君 橋本 關君 宮田繁治君

因に稻保會は、早稻田學園關係者にて損害保險に従事せる人々により成り立ち、阪神在住者の會合は未だ數年前來の企に過ぎざるも會を重ねる毎に盛況を告ぐ。不參加諸彦の來會を求む。

片上教授と天津校友會

去る拾月拾九日兼ねて南支那より青島北京を経て來津せる片上教授は、當地東站停車場に三四の校友並に當地青年會の幹部諸君に迎へられ、大

和ホテルに入つた。晝食後、校友佐々木氏の東道にて總領事館に吉田總領事を訪ね、暫時懇談の後午後三時半青年會主催の片上先生歡迎文藝茶話會出席の爲め、日本俱樂部食堂に到り、來會せる當地の新聞記者、及各方面の文藝同好の人多數と語らる。午後六時三不晉陽樓にて催せる天津早稻田校友會の同教授歡迎會の席に向ふ、中村幹事の開會の挨拶に次いで、片上教授は母校の近況を詳細に述べられ、故總長紀念事業の談に及び、校友諸氏の賛同を述べらる。校友一同大に其の意に同じ、和氣の裡に母校を偲んで校歌を支那街にと大唱しつ、十一時散會。

當日は中國校友も二三見えた。散會後矢澤共立學堂長及佐々木華兩校友に導かれて支那芝居見物に出掛けられた。翌朝早々より校友太田氏並に青年會參事島田氏の案内にて梁啓超氏を伊租界に訪ね、種々なる懇談をなし、正午當地各方面の識者有志の招待にかゝる露西亞料理の午餐會に到る、來會者二十有餘名、總領事館より浦川書記生及天津日報社長、西村博氏等來會せらる。これより南開大學に到り、大學の學生を引見して種々語られ、旅館に歸り、午後七時よりの青年會主催當地校友會後援の講演會に臨み左の講話を爲し聽衆に深き印象を與ふ。來會者數百名。
「文藝の社會的價値」
翌廿一日、石川青年會參事及校友太

田氏の案内にて同文書院に至り支那人教育を視る、それより市中を見物して同夜午後十一時發の奉天行京奉鐵路により内地歸還の途に着く、見位は日支和親の爲めにも望ましいも



徳島市に於ける校友學生大會

早大發展の爲めにも不尠好影響ありしことを茲に特筆せざるを得ない。我々校友は年一回位早大幹部の來支位は日支和親の爲めにも望ましいも

送校友並に青年會幹部多數、今回久振りに我學園の教授たる片上先生が當地方に來りたることは日支校友の爲め唯に意を強ふするのみならず、

武吉氏並に折柄社務の爲來滬中の日清汽船會社專務森辨次郎兩氏の歡迎會を支那料亭一品香に開く。集まるもの二十餘名、宴酣にして清水幹事の歡迎の辭あり尙附加して曰く、右兩氏の如き吾々の目的とすべき各方面に於ける成功者の實驗談に將來に對する希望を聞くは、兎角新知識に遅れ勝の海外生活者としても將た又校友としても好箇參考の資料たれば、胸襟を開て其所信を披瀝されたしと述ぶるや、先づ三木代議士口を切つて實に今回の支那旅行は所期以上の成果を得たり、而も物價の低廉なるに驚けり、如斯き地に於て自由に活動さる、諸兄は至幸なり迺、種々快活なる談片に一同を魅せらる。亞で森專務は慈父の如き溫容に笑を湛へて、在支十七年の經驗を基として、諄々其抱負を説かる。裨益する所寔に多大なり。終つて一同乾杯し都の西北を高唱して割愛をせず、時に十時近かりき、折しも弦月雪よりも白く四馬路情調愈深し。

目下校友會員名簿印刷整理に付校友動靜を掲記し得ず、この旨御諒了を請ふ (編輯部)

學會々々合

盛大なりし廣告文化展覽會

廣告研究會最近の狀況として、特記すべきは、本會主催にて廣告文化展覽會を開催した事である。本年は學校の四十年記念の年であると同時に本會の十週年記念に相當するので、これを記念する爲めに催したのが、前記廣告文化展覽會である。展覽會の期日は、秋季休業中の十月十七日の陸上運動會の日に初まり、二十日の四十年記念式典の日に閉會せり。これを催す爲めに、九月早々より會員は準備に着手し、全國樞要都市に出品勸誘状を出し、出品者數は、九十一名、其の出品點數は約二千點、加之、十年前よりの本會の所藏品を出品したる爲めに、會場に充てたる銅像裏二棟の建物も狭き位ひであつた。陳列室は、第一室、大型外國ホスター、第二室、歐洲ホスター。主として佛蘭

西ポスター。

第三室、統計表及會員研究發表

第四室、包装紙

第五室、型録、ポスタースタンプ、チラシ、レツテル。

第六室、日本ポスター

第七室、實物見本、廣告ノペリテイ。

第八室、本會所藏品及千社札

他に第一、第二の休憩室を設けて、

會期中、一般參觀人に心理的質問を

出し、心理統計を取る。

尙別動隊として、恩賜館階段教室に

て、呼びものの活動寫眞の映寫があ

つた、

陳列の方法に關しては、各室に陳列

の主任を置き、研究的に陳列して貫

らふ事にしたから、陳列は總て面白

く、且つ新らしかつた。

會期中の様子を見ると、

第一日は、大祭と運動會とで入場者

は非常に多く、一例を言へば。ウオル

サム時計會社寄贈の小冊子、答へら

れますか」の六千部が朝の九時より

僅か一時間半後には盡きて了つたの

を見ても想像する事が出来る。

第二日は、夜來の降雨の爲めに入場

者は約四百人位で、此の日の午后に

は記念講演會が開かれた。講師及演

題は、左の通り。

物價と廣告 本大學教授小林行昌氏

表現主義は完全なる自家廣告なり。

美術學校講師 齋藤佳三氏

世界大戰と宣傳戰

陸軍少將 河野恒吉氏

第三日は土曜日の事として、午后より

の入場者が多く、約千七八百人位で

あつた。豫定とすると、昨日で閉會

の筈であつたが連日入場者の多い爲

め特に一日延期して第四日を以て閉

會とした。此の日學校には四十年記

念式典があり、式後、澁澤子爵高田

名譽學長、鹽澤學長、沖教授其の他

多數教授の方々が時間をさいて御出

で下さつた事を深く感謝します。

入場者二千人。

附記 洋行の爲め永らく休講中の

上野陽一氏の心理學は今月より開講

する事となれり。(十一月中村生)

雄辯會々報

十月五日(木)午後三時より廿番教室

に於て露西亞飢饉救濟會第一回講演

會を開催す。

一、開會之辭

石塚 一雄君

一、人類の一員として

吉田 實君

一、救濟運動の經過報告

安達正太郎君

一、此の脅威

專修大學 若松 福造君

一、壯嚴なる死

中央大學 佐藤 又造君

一、婦人有志會より挨拶

河崎なつ子女士

一、内心の病

國民編輯長 馬場 恒吾氏

一、長春會議を中心として

代議士 中野 正剛氏

一、閉會之辭

安達正太郎君

未曾有の大盛會裡に五時半閉會す

機界均等と新時代の暗示

大政一 牛田 正憲君

十月一日 國民公論社主催青年大演說

會へ

哲人政治と民衆政治の一致

別政三 石塚 一雄君

十月七日 日蓮宗大學へ

現代文明の背面を彩る一大事實

專政三 飯塚 康夫君

十月十四日 拓殖大學へ

太陽を凝視せんとして

大政三 木村 皓一君

十月十七日 日本大學へ

社會革命と青年

大政三 淺沼稻次郎君

十月廿二日 專修大學へ

ニヒルの丘を降りて

大政三 吉田 實君

十月廿五日 大阪齒科醫專へ

或る日の審判

大政三 西村吉太郎君

十月廿八日 大阪高工へ

反逆の文化的價值

大政三 吉田 實君

十月廿九日 愛知醫科大學へ

New National Movementの一考察

大政三 西村吉太郎君

十月卅日 雄辯聯盟の大阪遠征へ

創造の聖炎に燃ゆる社會群

大政三 吉田 實君

十一月四日 外國語學校へ

物慾に花咲いた物質文明に反抗して

專政一 橋本源二郎君

十一月五日 宗教大學へ

祝ふ其口に橄欖の若葉あり

大商一 重永 昇君

十一月十一日 立教大學へ

行憐める我國人口問題の將來を思ひ

て

別政三 奥平 稔君

十一月十一日 明治大學へ

唯物史觀の立場から

大政三 淺沼稻次郎君

十一月十二日 松戸高等園藝學校へ

ゴルゴタの悲劇より永遠の國へ

專政三 飯塚 康夫君

十一月四日早稲田大學 同志社大學聯

合文化問題批判大演說會を同志大學

公會堂に開催す、プログラム左の如

し。

一、謀反人の生活態度

同大 澤田 正雄君

一、地に賤ける現代人の憤み

早大 西村吉太郎君

一、社會運動の目的論的歴史的認識

同大 村井藤十郎君

一、階級の對立

早大 淺沼稻次郎君

一、「目的王國」の建設を目指して

同大 茂 義太郎君

一、協同戦線を凝視して

早大 吉田 實君

一、現代國家本質の批判的研究

同大 高橋 信司君

一、歴史的創造としての新社會建設

早大 安達正太郎君

一、獨斷論的偏見に囚はれたる近代社

會思想の兩極

同大 木村孫八郎君

一、創造への波曲

早大 石塚 一雄君

米國名士が續々來朝したが、其の中

にかの在米邦人の父と呼ばれてゐる

大佐アイリッシュ翁も交じつてゐた。

來朝以來各方面の歡迎を受け、

翁も亦老軀自ら壇上の人となつて、

頻りに彼我の親善を高唱しつ、あつ

た折から、我が英語會は一日大學二

十番教室に於て、翁の講演を聴くの

機會を得たのを喜ぶ。十月十一日午

后三時會場は會員並に一般學生諸君

で滿され、窓外廊下に迄溢れる程の

聴衆に迎へられて、翁は導かれるま

に登壇する。白髮緒顔の翁は、底

力のある聲音、慈愛に滿てる溫容も

て、一切のお世辭ぬきに、日本へ來た

歡びを述べ、日本國民が益々世界的

活動舞臺に立つ様になつたとを稱揚

した。嘗て彼地のハイスクールの首

席卒業生となつたミスフルタの實例

を挙げ、更に翁が最初に會つた日本

人に就いて語つた。「彼は僅か十三

歳の少年であつたが、實に稀に見る

人格者であつた。彼は自分達と妻を

兩親と思ひ、自分達も彼を實の我が

兒同様に世話をした。」實に此の真情

こそ、『翁が今日日本人の父』と呼ば

れるに到つた所以であらう。拍手の

裡に翁は降壇し、代つて高杉先生の

謝辭あり、會員一同から紀念として、

WEISSのペンナント、會員章の襟飾

並に美麗なる花瓶を贈呈した。かく

て一同『都の西北』を合唱し、高杉先

生の發聲でア翁の萬歳を三唱して會

を閉じた。翁は幾度かサンクチューを

繰返した。會後一同紀念撮影をなし、

大學を代表して痛惜の至情を其の靈へて子弟を化育せられしが、茲に其の発展に力を致され、學徳共策ね具なり。

校外教育部記事

坪内博士の家庭用兒童劇と講演會

(早稻田高等女學講義編輯局主編)
童謡若しくは童話劇によつて子供の藝術的教養に資せしめようとする傾向が最近著しい勢力となりつゝ、あるが、若し正しい指導を缺く時は純眞な子供の頭腦に舞臺上の種々な悪い感化を及ぼすといふ意味で、從來の童話劇に對する一種の反對的議論が一部教育家間に稱へらるるなど子供劇が現社會に重要な一地位を占るに至つたなどは囑目すべきである。坪内博士はさきにペーチェントの發案によつて民衆の文藝化に一新紀元を劃せんとしたが、今回更に家庭内に育つべき眞面目なる兒童劇を考案せられ、次いで「家庭用兒童劇」一冊を早大出版部より出版した。右は家庭教育的の見地に立つて純藝術的の教化を普及するといふ意味から從來の童話劇、童話劇とは全く選を異にせるもので、右に關する趣旨を普及するために、同博士を講師とする早稻田高等女學講義編輯局は十一月廿四日より三日間を同講義録校外生、市内各小女學校教職員及本大學文學

科學生のために公開講演を開催し、更に同二十六日午後一時より有樂座に於て右講演の見本ともいふべき兒童劇七種を帝劇女優をして上演せしめたが、講演會は聽講者六百名以上に達し、殊に多數の婦人聽講生を集め得た點に於て非常の成功であつた。尙兒童劇は満員のため當日入場することを得なかつた人々のために有樂座側に於て十二月三日晝夜二回に互り再演する由である。

謹告!!

時下各位いよ／＼御清祥何よりに存じ申上げます。扱て先頃本誌上で廣告致し、又はがきで御願ひ致しました如く改大正十一年度維持費集金郵便を差上げましたところ、早速御拂込み下さいまして深謝致します。

然し多數會員の爲め中には行違を生じ、既に御拂込みの御方に對し重ねて御請求致せし事なきかを案じて居ります。萬一其様な事がありました節は不惡御寬恕願ひます。尙其際は御注意下されば好都合で又重複御拂込みの時は入金次第其處理法を御伺ひ致しまして(御差支なき限りは次年度分に繰越すやう御願ひ出来れば結構です)御指圖通りに御取斗ひ致します。

又其の中で、拒絶、不在、期間經過、區域外、轉居先不明等の符箋附で返送になりますものも可成御座いますから、其の分に對しては、直に振替用紙を封入いたしまして其の旨御申送り致しますから惡からず御含み下さい。

□學報發送に就きて

これに就きましては、銳意注意を怠りませんが、未だ月々に返送されるものが、二百に余り、其の御方々に對しては、前と同じ御住所宛に念の爲め御移動の有無を御問合せ致します。若し其はがきが、返送されました節は、御勤先、或は該役場に對して御動靜を照會いたしまして尙判明いたしません分は、不明會員の部に加へて居りますが、若し御移動の節又は學報が届きません場合には御手数ですが御一報を御願ひ致します。

御移動御通知の様式は、次の様にして頂きますれば最も好都合です。

轉居(或は職)

- 一、前住所
- 一、現住所
- 一、轉勤先
- 一、氏名
- 一、卒業年月及學科
- 一、配達郵便局名

早稻田大學

校友會事務所

本會維持費釀出者氏名報告

大正十一年度第一次分(前號報告後納入分)

金參園拾錢也

飯島郁三氏

兼松園也

能勢正巳氏 田島一義氏

楠田政二氏 中村豐次郎氏

諸岡藤藏氏 岩倉文祐氏

小松崎清氏 本橋宗次郎氏

小西清雄氏 清水覺夫氏

山田賢治氏 小倉庫之助氏

加藤成一氏 土屋啓三氏

川崎彌三郎氏 田畑爲彦氏

白崎銚三郎氏 武田藤十郎氏

諸橋元三郎氏 大森義一氏

關根清二氏 山中鐵三郎氏

谷口巖氏 小島五男也氏

磯田恭隆氏 小竹浩氏

伏屋秀夫氏 鬼木尙文氏

小西養助氏 田部井愛三郎氏

小谷重三氏 中泉新氏

工藤啓策氏 鈴木爲次郎氏

加藤榮三氏 細谷鏡三氏

杉原喜佐五郎氏 小池正雄氏

渡邊欽二氏 神谷陽氏

重藤無者勝氏 中山藤吉氏

西濱廣太郎氏 宇佐美胖氏

谷口忠次氏 山本八龍氏

梅鉢安重氏 寺田忠夫氏

奈其乙次郎氏 寺田忠夫氏

小田斗志雄氏 弓削重治氏

土方民撫氏 清水通三氏

德山眞次郎氏 明石一夫氏

有子山夏次郎氏 細梅武雄氏

富藤朝士氏 海老塚嘉右衛門氏

鎮目一朗氏 石津美基氏

大立目勇氏 小松重次郎氏

手塚半十郎氏 村田榮太郎氏

吉田國二氏 小林達四郎氏

柳田大吉氏 吉本曉三郎氏

香山仲安氏 江野島正雄氏

吉川義種氏 大竹祐三郎氏

上田鈴一氏 辰巳正直氏

渡邊龍聖氏 田村隆一氏

渡邊勉氏 秋山仁平氏

佐藤夏三郎氏 伊藤治三郎氏

太田秀雄氏 大場貞一氏

岡崎綱五郎氏 相馬信正氏

藤原忠一氏 熊內瀧五郎氏

渡邊尙氏 石橋勝己氏

谷村一太郎氏 倉富堅吾氏

下村正太郎氏 青木益太郎氏

內田卯三郎氏 松井清治氏

佐藤與一氏 筒井壽太氏

笠井仁三郎氏 甘樂濱治氏

下村熊三郎氏 難波宗一氏

植木信一氏 佐々木八郎氏

下日田實氏 山崎福太郎氏

佐藤孝三郎氏 高柳二郎氏

陸川薰氏 宮城正明氏

今井鏡一氏 杉本時三郎氏

脇本米司氏 川又誠之進氏

幸田厚隆氏 丹吳康平氏

森田得二郎氏 佐藤恒四郎氏

二宮庄司氏 小出喜八郎氏

松原常盤氏 和泉久三氏

肥田景光氏 二宮信芳氏

多羅尾浩三郎氏 丹後幹治氏

漆畑元吉氏 朝倉文治氏

中原詮次郎氏 三田村信之助氏

內藤捨太郎氏 杉村吉之助氏

松井美氏 原慧德氏

若松久米吉氏 吉川大助氏

松井軍治氏 上山貞亮氏

中野龍彦氏 小野榮助氏

柿本榮氏 大植萬次郎氏

典澤治輔氏 吉田德三郎氏

石崎武氏 白井耕次郎氏

安達敬直氏 安藤文祐氏

岡山太郎氏 木村豐次郎氏

柿本由太郎氏 吉村隆寬氏

水谷哲四郎氏 坂井幸平氏

安藤俊三氏 山崎保氏

南方常太郎氏 織田義信氏

千草久吉氏 秋谷隆清氏

大竹利彦氏 山中仁太郎氏

高橋龜太郎氏 坂入久雄氏

中島勝喜氏 向後順一郎氏

敷下夏平氏 泉田節愛氏

鈴木長英氏 須藤鏡一氏

深川隆氏 中村正司氏

綾部義一氏 金山常雄氏

森六郎氏 柳川守男氏

紅貞雄氏

木下虎之助氏 大橋俊治氏

大藤豐氏 深川谷助氏

溝口智雄氏 吉田誠嘉氏

荒川勇雄氏

新野伊三郎氏 西尾謙吉氏

小川隆三氏 神田靜治氏

內田純一氏 船木輛之助氏

吉岡長四郎氏 山崎英吾氏

宇田川清兵衛氏 增田正三氏

川瀨傳藏氏 城島實夫氏

鎮目謙吉氏 伊草盛一氏

波部任氏 齋藤眞三郎氏

清水忠次郎氏 波多江令繁氏

西一郎氏 貝原揆一氏

芳村忠明氏 森源作氏

桑田透一氏 小松崎清氏

矢野義夫氏 須藤隆治氏

八尋丹三氏 波多野林一氏

工藤徹氏 新井半之助氏

宮野數一氏 田中安太郎氏

獅子內謹一郎氏 保科陽治氏

鹽田彌壽次氏 橫木喜兵衛氏

關芳治郎氏 笠井保氏

阪本公德氏 橫尾米作氏

韓圭復氏 岡田惣一郎氏

鈴木正峻氏 牛場清治郎氏

水谷研孝氏 今逸郎氏

青木榮吉氏 服部盛氏

山本仁吉氏 豐田隣太郎氏

山口襲平氏 小野俊三氏

金子智氏 田村方郎氏

花田勝四郎氏 田島一郎氏

勝又敬之丞氏 山田俊雄氏

小林啓邦氏 小崎文治氏

加藤諒氏 小松普助氏

辻村真衛氏 清水平氏

山本敏德氏 生駒晴吉氏

磯目運喜氏 山口堅吉氏

泉茂家氏 藤田欣哉氏

原木吉太郎氏 飯田英二氏

竹村廉平氏 川上繁治氏

福代覺三郎氏 能美輝一氏

內田忠則氏 守安善二郎氏

瀨古守藏氏 橋本善一氏

永田嘉市氏 高木來喜氏

村瀨知彰氏 島田仁三氏

青木郁三氏 山本信一郎氏

佐藤明治郎氏 藤井恕亮氏

飯島正一氏 杵淵信四郎氏

宮下友雄氏 平澤景勝氏

百瀨計馬氏 榛葉嘉作氏

井阪千二郎氏 川島門治氏

池田常道氏 高橋清太郎氏

綱谷一太郎氏 荊木誠三氏

大橋敏郎氏 笹雄三氏

神田正雄氏 馬場小太郎氏

吉川仙藏氏 本多庫之助氏

杉山破寛男氏 大日方篤氏

楊井二郎氏 芳賀重之助氏

固武諒一氏 田所繁治氏

秋野敬治氏 小林董次郎氏

小村新右衛門氏 秋山一三氏

木村辭達氏 清家界氏

三浦盛年氏	白井忠三郎氏	小松原房太郎氏	川村武人氏	太田富士松氏	山内重次郎氏	武富禮太郎氏	池上仙三郎氏	廣神定五郎氏
紫安新九郎氏	藤生隆司氏	桑島三郎氏	上田久雄氏	井上壽三氏	木島光治氏	武田鼎一氏	東作兵衛氏	森治作氏
佐藤齋三氏	塚越又四郎氏	水野芳二郎氏	橋本敏男氏	馬場努氏	澁谷貞次郎氏	柴田愛藏氏	井出義作氏	永田精一氏
篠塚濟氏	中村忠道氏	村田直一氏	吉田足穗氏	廣海四郎氏	藤岡勤治氏	家富重尙氏	野口勤三郎氏	丸岡茂吉氏
地引武氏	小谷一善氏	鶴飼鏡三氏	橫山一平氏	奧田直文氏	今井幸吉氏	福島琢郎氏	近藤基喜氏	齋藤幸之助氏
大橋孫三郎氏	高橋永治氏	野田八平氏	奧村義輔氏	菅井大作氏	高下才助氏	溝口伴六氏	橫尾信一郎氏	宮崎小八郎氏
橫尾清氏	井上次郎氏	木村金吉氏	小林榮夫氏	菅井大文氏	福地福松氏	松川駒次郎氏	關口直太郎氏	渡邊治之助氏
田中與四郎氏	小野得一郎氏	峰島夏太郎氏	喜多龍二郎氏	植田詰男氏	山田芳三郎氏	佐藤理吉氏	野溝傳一郎氏	林綱次郎氏
吉川種正氏	石房吉氏	北村喜重郎氏	袋野猛氏	大矢理之助氏	長崎進氏	小泉潤一郎氏	板垣友次郎氏	橋爪作太郎氏
若生五郎治氏	河原綱一郎氏	小柳觀一氏	黑井亮一氏	鶴見三郎氏	加藤泰次郎氏	島田雅雄氏	新野米太郎氏	田代泰一氏
柴田榮作氏	小林幹氏	小暮丞之助氏	池田廣氏	宮下孝仁氏	高田逸藏氏	平田照夫氏	木村主一郎氏	古城龜之助氏
橫田清松氏	大塚達郎氏	山本忠彦氏	虎丘覺之助氏	宮森作市氏	田島好氏	南浮智成氏	齋藤久吉氏	上田確郎氏
渡邊藤十郎氏	丸山岩吉氏	村上萬次郎氏	高森有吉氏	河合孝止氏	正田松三郎氏	細梅三郎氏	木下賢太郎氏	林庸太郎氏
小笠原重逸氏	萬保俊一氏	八木信三氏	成川四郎氏	飯田憲造氏	大野宇一氏	桂金彌氏	坂田弟吉氏	矢島明之丞氏
伊藤忠夫氏	野口重男氏	鈴木修吾氏	星野甚右衛門氏	今里三平氏	那須野義勝氏	小高真作氏	奧村千太郎氏	渡邊清次郎氏
宮重嘉一氏	中澤謙治氏	永島七郎氏	奧田武夫氏	朝本信次氏	竹下賢侶氏	新庄浩氏	石原又三郎氏	木村貫一氏
二木達平氏	栗山茂太郎氏	小松弘道氏	篠崎正三氏	相子基次氏	榎本文雄氏	山田義左衛門氏	市川善右衛門氏	入江悅造氏
原田珍治氏	磯貞夫氏	山本保氏	寶田健夫氏	伊藤隆彦氏	小松一夫氏	中田一真氏	雲井憲二郎氏	瀬戸介爾氏
岩勢治氏	山内東隆氏	野澤五郎氏	川越庸之助氏	加藤榮二氏	木佐信真氏	佐藤勇造氏	真船泰介氏	北村太郎氏
早川精太郎氏	平城好身氏	小菅順藏氏	太田清十郎氏	加藤榮二氏	田浦繁男氏	前田收氏	中瀬精一氏	高橋鈞吾氏
竹腰久三郎氏	吉岡正夫氏	小島俊雄氏	加賀美周藏氏	大西健一氏	依田孟氏	佐古口辨藏氏	江森角三郎氏	板野壽作氏
江口真知氏	齋藤重次郎氏	生川慶五郎氏	小笠原軍兵衛氏	大島榮次氏	工藤直一氏	西村榮次郎氏	杉田米吉氏	早瀬太郎三郎氏
橋本泰賢氏	佐藤贊太氏	小西金次郎氏	牧野明道氏	愛澤五郎氏	大松谷孝平氏	師岡昌德氏	川手龜之助氏	楠田斧三郎氏
佐藤英信氏	佐藤鼎氏	阿部敏夫氏	越野鍊一氏	大原重雄氏	野田兵一氏	柴田雄太郎氏	上田晴雄氏	岩永祝三氏
品川喜義氏	安藤達氏	小坂四郎氏	內田龜之助氏	岡本五郎氏	有吉一夫氏	菅定爾氏	鹽津猪十太氏	西岡靜一氏
外松龜太郎氏	瀬尾俊三氏	平井英雄氏	吉永慶次郎氏	網野芳秀氏	石田芳春氏	山本利譽氏	平井志朗氏	久米川靜一氏
神谷一郎氏	藤井武夫氏	向場勇三郎氏	小野成彦氏	左近允尙德氏	唐澤四郎氏	佐藤環氏	竹村房吉氏	手塚歌之助氏
木下虎之助氏	小澤米夫氏	眞山峻德氏	栗田溫雄氏	肥田茂夫氏	榑間清見氏	宮崎萬臣氏	堀吉次郎氏	守永利三郎氏
山本鍵造氏	下竹房敬氏	藤田政久氏	田端一真氏	宮脇益三氏	西祐雄氏	鄉間宗平氏	赤尾茂三郎氏	加藤福太郎氏
澁谷實氏	牧野繁造氏	井面喜千松氏	志方惠太郎氏	橋田東次郎氏	橫山光雄氏	清水覺夫氏	星村又作氏	西脇房次郎氏
遠藤壽氏	安永義久氏	岩田宗雄氏	志方惠太郎氏	橋田東次郎氏	井間一雄氏	津守雄介氏	小川親篤氏	星野富士之助氏
藤田清次氏	本林善作氏	金田國雄氏	香川禎三氏	塚越鶴松氏	佐々木洋氏	野村吉造氏	田部信秀氏	稻田元昌氏
松村英夫氏	本林善作氏	寺西輝義氏	大谷順作氏	原田忠雄氏	若松新二郎氏	岡田敏彥氏	脇坂真慶氏	石井泰一氏
下田藤吉氏	梅戸夏夫氏	大谷真吉氏	能島通明氏	長谷川孝太郎氏	久保周次氏	中臺慎吉氏	寺田英三氏	綿田久吾氏
福島貞夫氏	根本新一氏	西田利三郎氏	上野素氏	井上久太郎氏	下斗米潔氏	北山一郎氏	石谷傳兵衛氏	渡邊汀一氏

遠藤麟太郎氏	川上正喜氏	猪瀬誠意氏	畑田源輔氏	今岡誠一氏	飯島六郎氏	石川虎三氏	渡邊承策氏	加藤千代鶴氏	荒井千代作氏	大木房男氏	平野平助氏	宮坂邦彦氏	島田六平氏	中上庄次郎氏	昌子亮一氏	並河正氏	後藤五郎右衛門氏	宮崎廉氏	村上廷太氏	寺田長三郎氏	大木榮治郎氏	山口長七氏	若槻直樹氏	神尾一惠氏	松岡敬三氏	横山琢衛氏	久野直苗氏	加藤陽康氏	杉浦仲太郎氏	大西虎雄氏	矢田部三四氏	石井宗次氏	中島一耶氏	殿村稀三郎氏	平野恒三氏		
伴良太郎氏	高須三雄氏	笠原國雄氏	近寅一耶氏	栗山顯次氏	土井和一氏	伊藤孫作氏	安藝元忠氏	江指盛一氏	笹野鐵太郎氏	井上亮助氏	堀貫次氏	西村忠一氏	池内俊治氏	本間勇氏	龜田鶴夫氏	鬼澤三重郎氏	小西友次郎氏	大江新氏	林清吉氏	山中勝之助氏	山添幸右工門氏	中島喜八氏	市野博氏	山口繁一氏	岡田兼雄氏	田村順三氏	神奈川基一氏	戸塚英之輔氏	栗原雅信氏	中山榮一氏	加納義之氏	高崎太平氏	八木豪氏	宮本眞月氏	枝本幹太氏		
野津高策氏	服部二三氏	和田虎十郎氏	遠藤廉氏	坂内顯龍氏	川名洋次氏	清水富久治氏	三好寛吾氏	岡村義男氏	田中真雄氏	小川海門氏	都通元弑氏	角田治雄氏	鹽見隆之助氏	下田進氏	奥村幸一氏	戸田和氏	木下明氏	足立一耶氏	丹野茂平氏	野村聖彌氏	山田美喜之助氏	花田金作氏	財前九洲翁氏	太田榮次郎氏	難波倭氏	野村完六氏	伊藤忠謙氏	工藤郷輔氏	堀江芳一氏	下條治恒氏	皆川重義氏	森安綱二耶氏	牧浦熊治郎氏	龜山廣惠氏	田部井愛三郎氏		
原重義氏	井戸達夫氏	村松光檢氏	北村五郎氏	一杉秀治氏	原田幸一耶氏	棚澤吉雄氏	椎木順一氏	篠藤清一氏	土屋哲二耶氏	北村三郎氏	丸山真一氏	深山元繼氏	大川正禮氏	市野二十八氏	岩崎準清氏	小野崎一耶氏	高橋武之助氏	郷田義憲氏	井上青太郎氏	秋本統一氏	堤庄三氏	植田實氏	宮副辰次郎氏	日笠斐夫氏	山本平吉氏	瀧美重雄氏	石川石次郎氏	柄津政雄氏	小笠原悟氏	夏秋源次氏	川村敏治氏	森繁哉氏	本村文一氏	北脇秀治氏	奈真秀治氏		
桂多美夫氏	伊藤達二氏	西田源次郎氏	太田八郎氏	足立彦五郎氏	石間英太郎氏	牧田二耶氏	味方利造氏	鹽間健次郎氏	高木要之助氏	高田榮三氏	安積勝三氏	稻葉市郎右衛門氏	間世田實登氏	檜崎幸一耶氏	渡部芳五郎氏	小林寅治氏	上井龜雄氏	佐藤真三氏	森永誠氏	谷典利吉氏	奥谷爲治氏	小寺順吉氏	松代安太郎氏	佐藤勝三郎氏	廣重二耶氏	川原金造氏	菅生半次郎氏	太田桓氏	早水藤太氏	伊藤定七氏	守田民徳氏	葛其文策氏	横山保氏	吉田丈夫氏	野田龍三郎氏		
宮下春一耶氏	坂本幸太郎氏	竹内行男氏	吉川慶氏	西岡重義氏	加納鶴次郎氏	若松茂太郎氏	新井純一氏	原真吉氏	八幡輝一氏	小林洋吉氏	若林忠武氏	村田重治郎氏	須藤善太郎氏	手島諒一耶氏	奥田四郎氏	安井馨氏	山内政耶氏	山地寅太郎氏	越原和氏	島津義忠氏	伊藤豐次氏	古岩井善太郎氏	原田甚四郎氏	竹尾新治郎氏	北村正俊氏	井上藤三郎氏	廣海渡源之助氏	神谷陽氏	山内勝吉氏	赤穂昌次氏	小室季敏氏	市川誠一氏	水野游氏	有吉甚吉郎氏	安藤金三郎氏		
田中秀穂氏	増田所之進氏	内田忠次郎氏	岡田三郎氏	田中勇雄氏	杉田虎獅狼氏	大松藤吉氏	兼坂中氏	世古松耶氏	陳國權氏	水谷房次郎氏	五十嵐建吉氏	別所節三氏	風間忠任氏	吉中永建氏	佐々木章三氏	長谷川榮一耶氏	生方甚作氏	篠原福壽氏	今西忠知氏	宮田末八氏	宮田津昌房氏	竹田直喜氏	水民直喜氏	中川醇氏	後藤有三氏	大島長重耶氏	矢内清次氏	池田三十耶氏	石田梅吉氏	吉村禎三氏	芹津進太氏	鷲尾廓寶氏	小竹浩氏	松岡佐之輔氏	福島熊吉氏	木下静馬氏	
石津直茂氏	伊東英保氏	伏屋秀夫氏	坂清之助氏	服部次郎氏	黒川伸雄氏	鈴木鎌太郎氏	吉岡齋治氏	白野甲峯松氏	大瀧林之助氏	服部保氏	兵藤榮作氏	種田徳太郎氏	内藤鷲耶氏	細田房太郎氏	南部正寛氏	松原淳太郎氏	杉本昇氏	高橋茂雄氏	池島誠三氏	丸山肇氏	田中英信氏	島田豐松氏	櫻井省三氏	淺野謙次郎氏	小泉二耶氏	石月久太郎氏	辻井眞氏	岡崎順二耶氏	原辻松氏	吉田敬二氏	稻田信次氏	川島憲治氏	玉置英三氏	松田谷三氏			
岡本美根夫氏	鬼木高之氏	町田千城氏	川井榮一氏	江幡達五氏	黒川清右衛門氏	串戸直佐樹氏	山下芳三氏	本間友治耶氏	鬼塚綱彦氏	川副芳松氏	古賀權六氏	依田逸太郎氏	大野邦道氏	太田茂雄氏	阿部惠一氏	三好糾氏	西本竹吉氏	荒木英次郎氏	中島喜悅氏	島田治七郎氏	林原憲貞氏	楠成文氏	廣瀬博氏	寺田茂照氏	杉原市藏氏	栗原喜一氏	三谷讓氏	大石馨一氏	岡直一氏	草刈征治氏	渡邊顯辰氏	林厚實氏	橋本宇平氏	大村正英氏	大林茂夫氏		
近藤直吉氏	遠藤喜太郎氏	栗村實氏	隅野喜四郎氏	東野脩氏	辻岡榮三氏	上代續氏	杉浦不二氏	川上清助氏	氣比新二耶氏	吉川周吉氏	柳下實氏	古林正隆氏	福岡雄一氏	田部種之助氏	河崎宗夏氏	中泉新氏	品川秀規氏	古川洋氏	藤野春海氏	秋谷敬一耶氏	佐藤智晃氏	大野篤二氏	小笠原由松氏	長專藏氏	柴田吉治氏	座間英吉氏	高倉忍氏	木島源義氏	今井森雄氏	庄司清三氏	戸田保美氏	飯田千代吉氏	加藤富松氏	岡田清延氏	藤藏氏		

有馬勝三郎氏 福永 勝氏
 藤田貞造氏 古川源次郎氏
 井上源太郎氏 岡崎才次氏
 山田房吉氏 唐澤 整氏
 湯澤作之助氏 高橋源一郎氏
 渡邊藤次郎氏 岡庄 五氏
 湯地定敏氏 杉山總太郎氏
 加藤謙二氏 木口市之助氏
 小川 巴氏 五十嵐清藏氏
 小川 博氏 鈴木保治氏
 澤田兵衛氏 石見良幸氏
 曾野作太郎氏 石堂竹彦氏
 辻生一氏 早瀬文造氏
 齋藤喜兵衛氏 宮川四郎氏
 城內清太郎氏 扇浦義一氏
 小川佳輔氏 矢萩道助氏
 千葉 章氏 多々良省三氏
 關内正一氏 高倉 胖氏
 菊池慶次郎氏 齋藤 功氏
 山村政也氏 今井壽雄氏
 笠原 献夫氏 竹村幸男氏
 長谷川 鏡氏 戶島義男氏
 岩下富藏氏 那須時夫氏
 野中一鹿氏 山内 濟氏
 齋藤卯太郎氏 永益義明氏
 藤澤義夫氏 野田英夫氏
 毛利八郎氏 中村英男氏
 箕輪馬之助氏 白升新次郎氏
 北住元治郎氏 矢島元七氏
 長谷川明藏氏 關 東 一氏
 飯田慶次郎氏 大橋俊一氏
 福田 耕氏 若林幹雄氏
 朝倉三郎氏 巢取常一氏
 松下四郎氏 青木郁二郎氏
 山本倍夫氏 清水博一氏
 堀功森之助氏 小崎鎮雄氏

小林孝一氏 清水金五郎氏 磯島茂美氏 古財德夫氏
 原 正 康氏 小菅正文氏 野井憲樹氏 岡 恭 介氏

名簿校了後の異動

氏名	異動事項	丁數	學科	卒業年度	氏名	異動事項	丁數	學科
鶴岡恒雄	大連市吉野町日滿商會	一一七	英政	四三	和田巖	大分縣宇佐郡横山村	二七	英政
竹内喜三郎	府下中蓋谷二二三	一一二	英政	四三	内藤三介	府下中野千光前三〇一六	三五	英政
津田慎治	府下上落合五一九柳川方	一二六	英政	四三	伊集院勝吉	門司市十五銀行支店	三七	英政
松江房次	府下瀧の川町田端四五五	一三四	大政	四	鈴木治三郎	下谷區車坂町一一二	三九	大政
村尾一雄	府下瀧の川町田端四五五	一四二	大政	四	中村鶴	大分郡長・大分市宿揚町	四三	大政
神館盛男	舊姓名増田順一	一四八	大政	五	今泉寛橘	東京證券株式會社取締役	二	大政
多賀谷芳三	樺太東海岸泊岸茶突	一五〇	大政	七	岩崎平造	京都府船井郡須知町	三	大政
近藤 晶	大分市西區築港二條通四ノ三七	一五〇	大政	七	水野虎之助	府下集鴨町二ノ一一	三	大政
福岡 正	大分市西區新町通四ノ四四	一六四	大政	八	和田種生	大分市外東成郡天王寺村天王寺五一〇	八	大政
三浦末吉	大分市西區新町通四ノ四四	一六四	大政	八	川上 嵩	大分市東區今橋二丁目日本信託銀行市電氣局經理課・府下岩淵町赤羽一六八	八	大政
上田 亮	金澤市森町二番町三ノ二	一六六	大政	九	平田專太郎	小石川區青柳町二三	八	大政
朝原吾郎	牛込區築土八幡町六小林方	一七〇	大政	九	古澤 茂	府下上戸塚六〇九	九	大政
長岡健作	長崎市外長與四〇三	一七三	大政	九	杉江勝直	本所區相生町四ノ二三	一〇	大政
松原松之丞	牛込區加賀町二ノ八兒島方	一九八	專法	一〇	岡本仙平	大分府豐能郡豐中新屋敷高砂通一四四	四二	專法
大熊大吉	本郷區東片町一四五宮國館	二〇五	專法	一〇	風間力衛	本郷區眞砂町三三	三	專法
貝原宇平	府下代々幡町南笹塚一〇八	二〇五	專法	一〇	小林完雄	本郷區眞砂町三三	三	專法
土屋時次郎	牛込區若松町七七	二〇七	專法	一〇	河田隆平	神戶市平野山王町一ノ四ノ一九	五	專法
柴田正雄	字郡宮歩兵六六聯隊第十一中隊	二一六	專法	一〇	岡部尙三	大阪府玉出町八〇三	九	專法
山本宗太郎	神戶市兵庫大井通附屬七ノ二	二一九	專法	一〇	根本嘉市郎	府下西巢町庚申塚四一二	九	專法
北莊三郎	府下大森澤田五〇五	二四七	獨法	一〇	飯星忠雄	茨城縣眞壁郡長藤村	八	獨法
		二四八	英法	一〇	遠藤秀雄	横濱市山下町一八一臺灣銀行	八	英法
						長岡市東坂之上町		

安田秋次氏 船越幸四郎氏 杉山 博氏 池田幾太郎氏
 渡邊 壽氏 柴田正雄氏

記念事業記事

◎滋澤後援會長、高田委員長等の阪神行

十月二十三日記念事業資金募集の爲後援會長及高田委員長田中理事難波幹事の一行の來阪を機とし廿六日神戸商業會議所主催の招待會あり來會者三百名以上、何れも同地一流の實業家にして、席上子爵は世界の經濟狀態に就き講話あり、次で高田委員長の世界教育の勢より早大の現狀に就て詳細なる講話あり、子爵の講演と共に會衆に多大の好感を與へたり。尙高田委員長は同日神戸第二高等女學校の乞により同校生徒に對し一場の講演をなし、是亦盛會を極めたり、越えて廿八日名古屋市中に於て同地實業家を網羅せる會合に臨まる、子爵及委員長の記念事業に對する懇篤なる依頼ありたる後伊藤守松氏一同を代表しての丁寧にして了解ある答辭あり一般に期待すべき好感を與へられしは子爵に對し深く感謝せざるべからず。

當日出席者

- 伊藤 守松氏
- 後藤安太郎氏
- 恒川小三郎氏
- 兼松寅之助氏
- 中野 半六氏
- 青山幸太郎氏
- 池田 正信氏
- 川崎 卓吉氏
- 岡本 松造氏
- 大矢 忠助氏
- 深田三太夫氏
- 加藤 甫氏

- 山本權十郎氏
- 江口彌一郎氏
- 紅村清之助氏
- 武藤鉦八郎氏
- 淺野 甚七氏
- 瀧 信四郎氏
- 生駒 重彦氏
- 竹内 兼吉氏
- 春日井丈右衛門氏
- 熊谷幸之輔氏

◎高田委員長の九州及福島行

阪、神、名よりの御歸京後席暖まるの暇なく、十一月三日委員長は更に別府に赴かる、蓋し同地方富豪に對し記念事業資金募集に對する、遊説に外ならず、此地に於ても相當の收獲を得可き見込なり。同月十日御歸京の上越えて十二日維持員増田義一氏同伴、福島郡山町に於ける後援會に御出席十四日御歸京ありたり。

◎田中理事の名古屋行

先月末滋澤子爵御訪問の後を取纏めの爲め田中穂積博士十一月九日名古屋地方に出張十二日歸京せらる。

◎東京市内各區校友會

- ▲本郷區 十月末末帝大赤門前大津屋旅館に校友會事務所を置き小山谷藏氏委員長となり吉田秀人、大橋薫、中岡實、東清重、笠原道太郎

外諸氏の熱烈なる誠意は遂に同區在住學生諸君の活動となり、本區内在住校友並に學生父兄の戸別訪問の如きは五區に分れたる受持を多きは十回尠きも四五回に及び殆んど完全に足を運びたる結果、非常の成績を得其最後の活動として廿七日午後六時より中央會堂に「音樂と映畫の會」を催ふし殆んど立錫の餘地なき盛會なりしと、因に同區は前記校友學生父兄方面一段落を告げたるを以て更に同區有力者の後援會を組織して大々的活動に移る事に決定せり。

▲麴町區 昆田文次郎氏を會頭とせる同町校友會は去月廿五日以來毎土曜日本部とせる永樂俱樂部に集合大槻主事連日各方面に互り戸別的に訪問し昆田氏及大橋誠一大島正一氏等の先輩協力一致收獲に努力しつゝあり、同町校友委員は約六十名なり。

▲神田區 は前記各區同様先づ校友及學生父兄の戸別訪問をなし、事務所を元柳町八中川政重氏方に置き氏自身大車輪にて活動なしつゝあり。

▲小石川區 十一月十六日第二同校友會を午後七時西川洋食部に開催上原廉造名取夏司、大島正一、鈴木佐平次、相馬由也、三島良藏氏外同區受持區域の決定をなし同區在住學生諸君と共に大に活動する事となし事業部より深澤上村兩主事本區擔任とせり。

▲牛込區 本區在住校友會を十八日午後四時より牛込クラブにて開催出席者三十四名三木武吉氏を委員長となし、坪谷、小久江、宮田、菊地等の先輩各委員となり區内を八部に分割し各部に町内委員を設け十二月月初旬より大々的活動を開始する事にせり。

▲下谷區 同區校友會は全區を四分して一部は小澤辰雄氏小川兼四郎氏二部は藤田和吉氏木内義太郎氏三部は齋藤幾太郎氏四部は今川清治氏石川藤一郎氏、永井彌彦氏等擔任校友其他各方面に勧誘をなす事と決定せり。

▲本所區 區長齋藤幸次郎氏自ら指揮し各區同様の歩調を以て極力勧誘に着手すべき準備中なり。

▲戸塚町後援會 同町名譽職其他より成る後援會は同町即ち下戸塚、諏訪、源兵衛、上戸塚の四區に分ち荒井助役委員長となつて各戸別に募集しつゝあり。

◎學園附近の情況

▲下宿業組合は豫て各幹部の盡力により大體の寄附申込決定し目下約壹萬五千圓以上に達せり

▲洋服業組合も同様本月上旬より度々集合を重ね同業者の寄附を勧誘し近く取纏め中なり。

▲其他、理髮業、飲食店、書籍業、文房具業、質屋組合等々學校と深

▲鶴巻町方面同町は去る廿五日各會有志集合十二月二日より各會及會員以外にも戸別訪問に着手する事に決定せり。

◎野球部の西下 野球部員諸君は記念事業の爲め大に活動され十月中国、九州に互て大遠征の爲め去る十九日飛田監督引卒の下に東京驛を出發せり當局一同深く其行を感謝す。

▲音樂會の同情 去る二十三日母校音樂會は其大會を神田青年會館に催ふし純益は舉げて事業部に寄附せらる、苦同夜は非常の盛會なりしを喜ぶ。

▲寺尾教授は十一月十五日出發鹿兒島縣下に出張二十六日歸京

◎横濱校友會

十一月二十二日午後五時半横濱市銀行集會所に於て開催、高田委員長田中穂積博士臨席す。校友出席五十四名なり頗る盛會、出席校友全部委員となり近く決定すべき新幹事二十名と共に事業のため大奮闘すべく幹事決定の上更に實行方針を熟議すべし等種々懇談ありたり(上村報)

故總長大隈侯爵記念事業
資金申込芳名

第七回(自大正十一年十一月二十一日)

各府縣累計

東京府	六六五、四六五、五二
大阪府	四二、八一八、七五
愛知縣	三〇、六二九、九四
兵庫縣	二九、三〇四、八〇
京都府	二〇、九八七、〇〇
福岡縣	一八、六〇四、三〇
新潟縣	一三、七二四、八二
長野縣	一三、〇五九、一六
香川縣	一一、一四二、〇〇
大分縣	一〇、八九七、〇〇
山形縣	一〇、四五一、〇〇
鳥取縣	一〇、四三八、〇〇
千葉縣	九、四一九、七〇
和歌山縣	九、二二二、五〇
栃木縣	九、一九二、八〇
靜岡縣	九、一二八、〇一
三重縣	八、八五四、四三
廣島縣	八、六二九、五〇
富山縣	七、七一六、〇〇
愛媛縣	七、五八一、八五
佐賀縣	七、五二一、九〇
福岡縣	七、四八〇、〇九
岡山縣	七、二八〇、〇〇
山梨縣	七、〇九八、〇〇

群馬縣	六、二八四、八〇
埼玉縣	五、六〇〇、五〇
宮崎縣	五、四三七、四〇
北海道	五、一九九、五〇
岐阜縣	五、一一三、五〇
石川縣	四、九一六、六三
校外生	三、八五五、三七
工手學校卒業生	三、六一〇、〇〇
青森縣	三、二三〇、〇〇
朝鮮	三、〇四七、四〇
神奈川縣	二、六三七、五〇
秋田縣	二、五九三、二〇
滿洲	二、五八二、三五
山口縣	二、四七一、九〇
支那	二、三八四、〇〇
德島縣	一、九九七、〇〇
滋賀縣	一、七九三、二〇
鹿兒島縣	一、五七二、〇〇
茨城縣	一、四七五、〇〇
宮城縣	一、一三二、〇〇
奈良縣	九八〇、五〇
島根縣	六四七、〇〇
熊本縣	五七八、〇〇
臺灣	五七五、〇〇
沖繩縣	五五五、〇〇
福井縣	一九五、〇〇
高知縣	一六二、三八
海外	一三六、二一
岩手縣	一三三、〇〇
青島	一二、〇〇
總累計	一、〇五九、六一一、四九

東京府	五、〇〇〇、〇〇	男爵中島久萬吉殿
	一、〇〇〇、〇〇	田中 傳太殿
	一、〇〇〇、〇〇	瀧田 捷彦殿
	一、〇〇〇、〇〇	東京印刷同志會殿
	一、〇〇〇、〇〇	三木 武吉殿
	五〇〇、〇〇	小山 谷藏殿
	五〇〇、〇〇	寺尾 元彦殿
	五〇〇、〇〇	小林 正勝殿
	五〇〇、〇〇	星野 治作殿
	三六〇、〇〇	片山 廣斗殿
	三〇〇、〇〇	宮井 安吉殿
	三〇〇、〇〇	中野禮四郎殿
	三〇〇、〇〇	深田次郎殿
	三〇〇、〇〇	八木 勤作殿
	二五〇、〇〇	藤野 了祐殿
	二五〇、〇〇	富田逸二郎殿
	二五〇、〇〇	民野 雄平殿
	二五〇、〇〇	中村 萬吉殿
	二四〇、〇〇	丸田喜一郎殿
	二〇〇、〇〇	松永 材殿
	二〇〇、〇〇	錦 織 幹殿
	二〇〇、〇〇	矢口 達殿
	二〇〇、〇〇	古楠 顯理殿
	二〇〇、〇〇	釘宮 極殿
	二〇〇、〇〇	笠井寛太郎殿
	二〇〇、〇〇	鈴木治三郎殿
	二〇〇、〇〇	片山 勝藏殿
	二〇〇、〇〇	松島鉦四郎殿
	二〇〇、〇〇	尾越 張次殿
	二〇〇、〇〇	尾越 竹人殿
	二〇〇、〇〇	有江金太郎殿
	二〇〇、〇〇	錢谷清一郎殿

師岡 昌德殿	二〇〇、〇〇
加賀美治兵衛殿	二〇〇、〇〇
小林 剛策殿	二〇〇、〇〇
北山 啓助殿	一五〇、〇〇
久能木宇兵衛殿	一五〇、〇〇
伊夫伎準一殿	一五〇、〇〇
田中 秀穂殿	一五〇、〇〇
光井武八郎殿	一五〇、〇〇
桐山 均一殿	一五〇、〇〇
崎田喜太郎殿	一五〇、〇〇
川趣 嘉義殿	一五〇、〇〇
眞野 官一殿	一五〇、〇〇
鈴木 浩之殿	一五〇、〇〇
德永 庸殿	一五〇、〇〇
本多淺治郎殿	一五〇、〇〇
杉野 金市殿	一五〇、〇〇
湯淺益三郎殿	一五〇、〇〇
山内不二雄殿	一五〇、〇〇
渡邊 安雄殿	一五〇、〇〇
大岡 胖殿	一五〇、〇〇
人見 修藏殿	一五〇、〇〇
下村清三郎殿	一五〇、〇〇
稻光 謙三殿	一五〇、〇〇
木村幸一郎殿	一五〇、〇〇
今井 兼次殿	一五〇、〇〇
井出 久一殿	一五〇、〇〇
渡邊 海旭殿	一五〇、〇〇
大久保常正殿	一五〇、〇〇
鈴木 音次殿	一五〇、〇〇
風間 新助殿	一五〇、〇〇
尾關 光藏殿	一五〇、〇〇

一〇〇、〇〇〇	關口 達三殿	五〇、〇〇〇	簡井 常丸殿	三五、〇〇〇	近藤 爲材殿	二〇、〇〇〇	山田政四郎殿	一〇、〇〇〇	中村 清雄殿
一〇〇、〇〇〇	前田定之介殿	五〇、〇〇〇	廣本 義章殿	三〇、〇〇〇	金城 紀典殿	二〇、〇〇〇	鈴木 芳樹殿	一〇、〇〇〇	服部保次郎殿
一〇〇、〇〇〇	前原 重秋殿	五〇、〇〇〇	野村 秀雄殿	三〇、〇〇〇	杉本金太郎殿	二〇、〇〇〇	長江 正一殿	一〇、〇〇〇	松岡 林平殿
一〇〇、〇〇〇	秋山 廣省殿	五〇、〇〇〇	川野 夾殿	三〇、〇〇〇	島崎庄太郎殿	二〇、〇〇〇	堀越 貞彦殿	一〇、〇〇〇	井阪千二郎殿
一〇〇、〇〇〇	森山 四郎殿	五〇、〇〇〇	高木 潔殿	三〇、〇〇〇	永田 辛一殿	二〇、〇〇〇	照沼哲之介殿	一〇、〇〇〇	芥川 逸三殿
一〇〇、〇〇〇	吉松 駒造殿	五〇、〇〇〇	小笠原義之殿	於長野縣下活動寫真利益金		二〇、〇〇〇	吉田榮三郎殿	一〇、〇〇〇	矢島 斧吉殿
一〇〇、〇〇〇	毛利 八郎殿	五〇、〇〇〇	竹林磯次郎殿	神谷 助男殿	布山兵三郎殿	二〇、〇〇〇	府川文次郎殿	一〇、〇〇〇	佐藤 鼎殿
一〇〇、〇〇〇	松居松三郎殿	五〇、〇〇〇	善野孝一郎殿	手塚 晚三殿	岡本駒之助殿	二〇、〇〇〇	森矢 露譽殿	一〇、〇〇〇	中島 毅一殿
一〇〇、〇〇〇	吉川 收殿	五〇、〇〇〇	北川 博殿	上田 英房殿	橋本 清吉殿	二〇、〇〇〇	河村由三郎殿	一〇、〇〇〇	中村彦次郎殿
一〇〇、〇〇〇	侯爵 伊達 宗陳殿	五〇、〇〇〇	谷川光太郎殿	宮城 正順殿	島崎 源八殿	二〇、〇〇〇	磯貝 靜昇殿	一〇、〇〇〇	奥山恒五郎殿
一〇〇、〇〇〇	平尾 贊平殿	五〇、〇〇〇	須永 敦平殿	船場 保殿	針谷 貞良殿	二〇、〇〇〇	田代名兵衛殿	一〇、〇〇〇	松元 稻穗殿
一〇〇、〇〇〇	大橋 永萬殿	五〇、〇〇〇	上原才一郎殿	新川 長藏殿	加藤 清作殿	二〇、〇〇〇	依田辨三郎殿	一〇、〇〇〇	川部 殖造殿
一〇〇、〇〇〇	江口駒之助殿	五〇、〇〇〇	多良 寬殿	渡邊 修三殿	天海兵四郎殿	二〇、〇〇〇	島崎 源八殿	一〇、〇〇〇	松原久滿造殿
一〇〇、〇〇〇	谷口 守雄殿	五〇、〇〇〇	今野 助藏殿	市川 末松殿	市川 末松殿	二〇、〇〇〇	依田辨三郎殿	一〇、〇〇〇	栗屋 薰殿
一〇〇、〇〇〇	石田鐵之助殿	五〇、〇〇〇	星野 ソヨ殿	渡邊 修三殿	渡邊 修三殿	二〇、〇〇〇	針谷 貞良殿	一〇、〇〇〇	小林 善八殿
一〇〇、〇〇〇	淡近 趕夫殿	五〇、〇〇〇	商學部三年舊愛會	加藤 清作殿	加藤 清作殿	二〇、〇〇〇	島村 成一殿	一〇、〇〇〇	內田 彌吉殿
一〇〇、〇〇〇	香村 小錄殿	五〇、〇〇〇	杉山 謙治殿	天海兵四郎殿	天海兵四郎殿	二〇、〇〇〇	福井 久作殿	五、〇〇〇	平江 正夫殿
一〇〇、〇〇〇	溝口 信殿	五〇、〇〇〇	淺岡 如司殿	渡邊 修三殿	渡邊 修三殿	二〇、〇〇〇	村瀬 勉殿	五、〇〇〇	岸 勝利殿
一〇〇、〇〇〇	湯淺 泉殿	五〇、〇〇〇	不島 勝彦殿	市川 末松殿	市川 末松殿	二〇、〇〇〇	小島 七郎殿	五、〇〇〇	前田 儀作殿
一〇〇、〇〇〇	高須 安一殿	五〇、〇〇〇	田中 篤美殿	菅沼龍太郎殿	菅沼龍太郎殿	二〇、〇〇〇	和田 貞吉殿	五、〇〇〇	土屋時次郎殿
八〇、〇〇〇	吉川 四郎殿	五〇、〇〇〇	岩永 俊一殿	宇佐美次郎殿	宇佐美次郎殿	二〇、〇〇〇	岩川捷三郎殿	五、〇〇〇	森井嘉十郎殿
六〇、〇〇〇	立花 隆藏殿	五〇、〇〇〇	熊谷 貞治殿	猪野 威大殿	猪野 威大殿	一五、〇〇〇	小出範治郎殿	五、〇〇〇	小瀧喜七郎殿
六〇、〇〇〇	坂井 大輔殿	五〇、〇〇〇	奥川藏太郎殿	飯山 七郎殿	飯山 七郎殿	一五、〇〇〇	株式會社大澤商會東京支店長	五、〇〇〇	淺野 浩殿
六〇、〇〇〇	丸山 信子殿	五〇、〇〇〇	鈴木 兼司殿	平井 秀男殿	平井 秀男殿	一五、〇〇〇	山田 昌興殿	五、〇〇〇	山口 充殿
六〇、〇〇〇	石館 久三殿	五〇、〇〇〇	栗田 讓一殿	大隅 義雄殿	大隅 義雄殿	一五、〇〇〇	宇多 良溫殿	五、〇〇〇	吉松波智子殿
六〇、〇〇〇	武内 達郎殿	四〇、〇〇〇	大濱龜太郎殿	大濱龜太郎殿	大濱龜太郎殿	一〇、〇〇〇	津田 禮三殿	五、〇〇〇	田中 保男殿
五〇、〇〇〇	松宮春一郎殿	四〇、〇〇〇	石井 忠治殿	安藤作重郎殿	安藤作重郎殿	一〇、〇〇〇	中里 均殿	五、〇〇〇	
五〇、〇〇〇	中田仁三郎殿	四〇、〇〇〇	長谷川謙一郎殿	早大理工學部應用化學部	早大理工學部應用化學部	一〇、〇〇〇	鷹羽 愛德殿	三圓宛	
五〇、〇〇〇	郵澤 二郎殿	四〇、〇〇〇	弓削 勇次殿	二年有志殿	二年有志殿	一〇、〇〇〇	能 順吉殿	外山榮藏殿○押川公一殿○無名氏殿	
五〇、〇〇〇	金田清之助殿	四〇、〇〇〇	熊谷 孝章殿	宇賀神爲吉殿	宇賀神爲吉殿	一〇、〇〇〇	高城 哲殿	○齋藤智介殿	
五〇、〇〇〇	百瀬 唯一殿	四〇、〇〇〇	佐藤 是康殿	清水金五郎殿	清水金五郎殿	一〇、〇〇〇	林 守茂殿	二圓宛	
五〇、〇〇〇	黑岩 哲治殿	三六、〇〇〇	熊谷梅太郎殿	高野 知貴殿	高野 知貴殿	一〇、〇〇〇	松井 鐵留殿	遠藤貞作殿○高橋健壽殿○遊佐武信殿○齋藤淳藏殿○兵藤高三郎殿○倉	
五〇、〇〇〇	河内 信久殿	三五、〇〇〇	細井 亨殿	時間 公行殿	時間 公行殿	一〇、〇〇〇	西田 孝一殿		

田市造殿○片山武雄殿○長野良雄殿

一、五〇

早大英獨クラス會殿

一圓宛

永富正人殿○酒井廉殿○谷澤勇造殿

○武井富太郎殿○高井信作殿○岩藤

治衛門殿○上野直殿○川井益雄殿○

渡倉マキ殿○豊見山きく子殿○安元

光子殿○仲村とし子殿○久保寛治殿

○良徳四郎殿○油井壽殿○櫻井清造

殿○川崎藤太郎殿

五十錢宛

野々村千年殿○富岡親殿

正誤

前號 早大經濟學會ニ油木兵吉郎殿

ヲ加フ

前號七〇、〇〇 植野良吉殿トアルヲ

同 植野包吉殿ニ訂正

前號三〇、〇〇 澤木孟彦殿トアルヲ

同 澤木孟彦殿ニ訂正

前號一〇〇、〇〇 壺河貞爾殿トアルヲ

同 壺河卓爾殿ニ訂正

神奈川縣

三〇〇、〇〇 相川謙一郎殿

一〇〇、〇〇 高野 正殿

五〇、〇〇 寺田 一郎殿

三〇、〇〇 塚水 繁殿

二一、五〇 中津村青年團

柳川佐久外二九名殿

二〇、〇〇 長谷川彌三郎殿

一〇、〇〇 德永 眞鑑殿

一〇、〇〇 德江 定吉殿

一〇、〇〇 義島 亞富殿

五、〇〇 井上多二郎殿

五、〇〇 大塚 薫殿

五、〇〇 内藤 ユウ殿

五、〇〇 山本 傳吉殿

五、〇〇 小室 國吉殿

五、〇〇 佐藤 政吉殿

五、〇〇 協心小學校職員一同殿

五、〇〇 清水 太重殿

五、〇〇 鈴木 勇藏殿

三圓宛

角田福三殿○柏木彌六殿

二圓宛

大島重次郎殿○梶野一郎殿

千葉縣

六〇〇、〇〇

二〇〇、〇〇

二〇〇、〇〇

一〇〇、〇〇

一〇〇、〇〇

五〇、〇〇

三〇、〇〇

三〇、〇〇

一〇、〇〇

一〇、〇〇

一〇、〇〇

一〇、〇〇

一〇、〇〇

七、〇〇

安房高等女學

豐澤藤一郎殿

五、〇〇 小泉謙三郎殿

五、〇〇 秋山彌三郎殿

五、〇〇 久貝 源一殿

五、〇〇 吉野佐二郎殿

五、〇〇 齊藤 團次殿

五、〇〇 座間 策郎殿

五、〇〇 淺野 孝祐殿

五、〇〇 片貝小學校職

員有志代表

古川 哲三殿

狩野 仲平殿

狩野 良振殿

廣瀬殿

三圓宛

淺野源藏殿○庄司藤次郎殿○山中初

太郎殿

二圓宛

小高俊海殿○最首竹之助殿○三上兼

雄殿○水上六郎殿○鈴木徳藏殿○市

原彌三郎殿○井上雄輔殿○井上磐雄

殿○市原金五殿○石井八四郎殿○中

島禮殿○松本市太郎殿○東文哉殿○

平野豊造殿○松本政之助殿

一圓宛

濱藤源太郎殿○麻生彌六殿○佐藤

健次殿○飯島榮殿○大竹重彦殿○大

竹信次殿○岡田莊七殿○田邊重徳殿

○染谷光之助殿○中村陽殿○淺野豊

殿○常世田平助殿○常世田はつ子殿

○常世田虎松殿○伊藤實衛殿○小倉

五郎殿○大須賀角松殿○淺野弘雄殿

○石井徳太郎殿○吉田榮吉殿

五十錢宛

久我信殿○久我伊太郎殿

正誤 前號 三〇、〇〇 保科國造殿トアルハ

同 保科國造殿ニ訂正

埼玉縣

一、〇〇〇、〇〇

一〇〇、〇〇

五〇、〇〇

五〇、〇〇

五〇、〇〇

五〇、〇〇

五〇、〇〇

五〇、〇〇

三〇、〇〇

三〇、〇〇

二五、〇〇

二五、〇〇

二〇、〇〇

二〇、〇〇

二〇、〇〇

二〇、〇〇

二〇、〇〇

二〇、〇〇

二〇、〇〇

二〇、〇〇

二〇、〇〇

二〇、〇〇

一五、〇〇

一五、〇〇

一〇、〇〇

一〇、〇〇

一〇、〇〇

一〇、〇〇

一〇、〇〇 中村角三郎殿

一〇、〇〇 根岸 禮一殿

一〇、〇〇 鈴木 春藏殿

一〇、〇〇 坂本與惣治郎殿

一〇、〇〇 小口 清一殿

一〇、〇〇 小林 榮吉殿

一〇、〇〇 大川 勇殿

一〇、〇〇 關口武二郎殿

五、〇〇 細谷孝十郎殿

五、〇〇 有瀧 七藏殿

五、〇〇 野村 敏殿

五、〇〇 江黒 忠芳殿

五、〇〇 植竹 隆之殿

五、〇〇 古郡蓮八郎殿

五、〇〇 尾崎定四郎殿

五、〇〇 岩田寅四郎殿

五、〇〇 柴崎 幹殿

五、〇〇 小林 茂一殿

五、〇〇 田口嘉吉郎殿

五、〇〇 石塚 耕一殿

五、〇〇 石塚次郎平殿

三圓宛

室岡九十郎殿○内田龜造殿○大澤勝

次良殿○深田金太郎殿

二圓宛

小暮直彦殿○武政子之藏殿○遠藤幸

五郎殿○山崎平内殿○羽鳥東作殿○

飯塚泰殿

一圓宛

高橋縫之介殿○高橋要藏殿○知久千

代吉殿○金子勝三郎殿○小島喜太郎

殿○飯島俊久殿○關本貞藏殿○齋藤

持田永三郎殿

周道殿○澁澤伊三郎殿○染谷常五郎

殿○板倉原治殿○星野治郎兵衛殿○金子和一郎殿

茨城縣

二〇〇〇〇

久保田義三殿
久保田信之殿

三〇〇〇〇

川田 久喜殿

二〇〇〇〇

野口喜與治殿

二〇〇〇〇

久保田 昌殿

二〇〇〇〇

小倉庫之助殿

一五〇〇〇

西野喜志之助殿

一〇〇〇〇

黑澤 駒吉殿

五〇〇〇〇

高須德次郎殿

五〇〇〇〇

内田彌右衛門殿

五〇〇〇〇

金田 直七殿

三圓宛

楢形尋常高等小學校殿○藤崎常雄殿

二〇〇〇〇

○愛木健之助殿○内山市太郎殿

一圓宛

鬼澤 要藏殿

佐々木文一殿○久保巳之次郎殿○久保藏殿○上原金次郎殿○生井澤東助殿○谷口鶴松殿○羽生定之助殿○棚谷文雄殿○荒張伊代之助殿○鬼澤喜内殿

栃木縣

一〇〇〇〇〇

川上 騰吉殿

五〇〇〇〇

卷島忠兵衛殿

三〇〇〇〇

人見 マツ殿

三〇〇〇〇

加藤 歡作殿

二〇〇〇〇

柳 佐吉殿

二〇〇〇〇

加藤秋三郎殿

二〇〇〇〇

福地 則榮殿

一五〇〇〇

川田 藤吉殿

一〇〇〇〇

福田 義雄殿

一〇〇〇〇

神山豐太郎殿

一〇〇〇〇

神山庄一郎殿

一〇〇〇〇

和久井平三郎殿

一〇〇〇〇

澤村榮太郎殿

一〇〇〇〇

小曾戸兼吉殿

一〇〇〇〇

青木 政殿

一〇〇〇〇

山中茂三郎殿

一〇〇〇〇

永島 基治殿

一〇〇〇〇

小林 新六殿

一〇〇〇〇

萩原 松彌殿

五〇〇〇〇

岸本 健一殿

五〇〇〇〇

石川彌一郎殿

五〇〇〇〇

柿沼 熊藏殿

五〇〇〇〇

大橋 英次殿

五〇〇〇〇

關 角之助殿

五〇〇〇〇

宮本喜三郎殿

五〇〇〇〇

小川 善平殿

五〇〇〇〇

岡 春二殿

五〇〇〇〇

淺野 磯吉殿

五〇〇〇〇

小倉 平吉殿

五月女清次郎殿

松本 淺次殿

渡邊 正德殿

徳原 其平殿

國分國之丞殿

赤羽 宥松殿

鈴木德三郎殿

齋藤菊三郎殿

小島 清吉殿

三圓宛

福地 則榮殿
川田 藤吉殿
福田 義雄殿
神山豐太郎殿
神山庄一郎殿
和久井平三郎殿
澤村榮太郎殿
小曾戸兼吉殿
青木 政殿
山中茂三郎殿
永島 基治殿
小林 新六殿
萩原 松彌殿
岸本 健一殿
石川彌一郎殿
柿沼 熊藏殿
大橋 英次殿
關 角之助殿
宮本喜三郎殿
小川 善平殿
岡 春二殿
淺野 磯吉殿
小倉 平吉殿
五月女清次郎殿
松本 淺次殿
渡邊 正德殿
徳原 其平殿
國分國之丞殿
赤羽 宥松殿
鈴木德三郎殿
齋藤菊三郎殿
小島 清吉殿
小杉仁三郎殿

二〇〇〇〇

椎名莊三郎殿○高際勸治殿○松島平次郎殿○高橋代吉殿○若林五十次殿○小野惣平殿○徳原哲堂殿○羽山長十郎殿○小林佐太殿○小杉春次殿

二〇〇〇〇

中村茂重郎殿○青木與惠門殿○川田誠殿○河西一造殿○石川庄作殿○石川角治殿○平本平藏殿○福田瀧三郎殿○落合大市郎殿○石川徳三郎殿○今泉慶殿○稗田清造殿○清水水三郎殿○青木多忠殿○中野淺吉殿○小祝鶴吉殿

一〇〇〇〇

富田岩次殿○富田藤作殿○日高岩吉殿○海老沼唯五郎殿○近藤福一郎殿○毛塚房次郎殿○富田峰太郎殿○富田百一殿○富田庄作殿○渡邊左五郎殿○三井憲一殿○吉原寅次郎殿○若林彌三郎殿○落合源十郎殿○石川長次郎殿○狐塚駒一郎殿○唐橋述吉殿○星榮久殿○菊地敏次郎殿

一〇〇〇〇

大久保佐二殿
福島 元助殿
大島 金吾殿
山口 芳雄殿
矢島 元七殿
大塚久右衛門殿
眞下利藤殿
生方 甚作殿
福島 博殿

一〇〇〇〇

磯田與次郎殿
奈良原與惣八殿
梅山 龜吉殿
田村榮五郎殿
牧 震太郎殿
大島 戸一殿
濱田 雄彦殿
濱澤 直一殿
株式會社
濫川銀行殿
江利川明助殿
齋藤政之助殿
木暮 欣咲殿
木暮 播一殿
橫山五郎八殿
大竹直四郎殿
峰岸六郎平殿
加藤 清作殿
中島和久平殿
大澤 曉一殿
桑原武一郎殿
佐藤 徳藏殿
小菅虎之助殿
黒田熊之助殿
宮澤常五郎殿
横山 林藏殿
東野余清司殿
竹腰 徳藏殿
小谷野千太郎殿
青木房治殿
下田 恭介殿
齋藤鶴三郎殿
大塚富士良殿

一〇〇〇〇

石坂 庫殿
石坂 源二殿
金井 幸吉殿
阿部 定平殿
阿部 準三殿
大谷祥太郎殿
高橋諄三郎殿
新井 歎二殿
濫川倉庫株式會社殿
中村 國吉殿
内山 眞材殿
石坂文太郎殿
宮下 友雄殿
藤井紋三郎殿
川崎幸三郎殿
大山禎十郎殿
都丸 高親殿
山賀瀬次郎殿
本間善太郎殿
高橋 由平殿
小山重三郎殿
淺見 音吉殿
栗原陽太郎殿
永田 涉殿
正田 盛作殿
川島信三郎殿
大島 喜傳殿
岡部駒次郎殿
岡部幸一郎殿
伊井利一郎殿

一〇〇〇〇

三圓宛

二〇〇〇〇

佐藤源十郎殿○吉田政治殿○金井芳五郎殿○重田重貞殿○佐々木潔殿

二〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

坂井辰三郎殿○田中兵一郎殿○狩野晉衛殿○神谷周吉殿○加藤和平太殿○大島堅作殿

二圓宛

佐藤泰吉殿○唐澤安司殿○大塚丈七殿○岸佐金吾殿○岸仲吉殿○宮口二郎殿○石北源十郎殿○新井公之亮殿○中澤菊次郎殿○平方武雄殿○小野澤信滋殿○岸仲二殿○林康太郎殿○山岸安太郎殿○石塚龍海殿○橋本澤治殿○栗田傳四郎殿○岡田玉吉殿○濱野通太郎殿○關根源八郎殿○金子重平殿○勅使河原一嘉殿○阿部政壽殿

一、五〇 小關 玄録 外 二 名殿

福島縣

神保岩吉殿○木暮龍太郎殿○齋藤軍八殿○飯塚常五郎殿○飯塚安治殿○佐藤雄八殿○佐藤安久郎殿○一場與市殿○福原鶴雄殿○佐藤やゑ殿○村上照吉殿○三枝朝能殿○佐藤榮作殿○佐藤與市殿○佐藤定次郎殿○生方佐平殿○小池邦一殿○佐藤甲三殿○佐藤與平殿○佐藤佐平殿○佐藤わくり殿○佐藤猪太郎殿○園部久八郎殿○佐藤馬造殿○大塚清十郎殿○島山佐十郎殿○大塚定助殿○佐々木仙重郎殿○鹽野豐作殿○福田伊勢松殿○神邊茂利殿○黑澤督太郎殿○富澤巖殿○金井ヨシヨ殿○小池鐵次郎殿○石北繁里殿○黒岩佐五七殿○栗原諄太郎殿○町田久太郎殿○吉田爲次殿○川崎熊藏殿○木暮米三郎殿○西田

耕作殿	〇平形陳兵殿	〇小野澤太喜松殿	〇青木勘右衛門殿	〇岸松次郎殿	〇金井馬殿	〇高田卯平殿	〇長沼茂七殿	〇安藤東太郎殿	〇淺見安次郎殿	〇小林鶴松殿	〇岩崎金作殿	〇川田庄平殿	〇岡部寛治殿	〇西村久太郎殿	〇北澤一殿	〇櫻井文作殿	〇金子春吉殿	〇傳田彦七殿	〇佐々木市次殿	五拾錢宛	唐澤彌之吉殿	〇橋爪杖二殿	〇酒井惠作殿	〇塚田清作殿	〇大塚辨吉殿	〇岩崎邦平殿	〇奥木壽作殿	〇齋藤幸作殿	〇崎野平殿	〇奥木壽作殿	〇齋藤幸作殿	〇三枝瀨市殿	〇佐藤賢藏殿	〇佐藤彌之吉殿	〇岸甲殿	〇外山宮司殿	〇楢原忠一殿	〇佐藤助吉殿					
五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇
渡邊末次郎殿	小松午之介殿	阿部於菟彌殿	渡邊藤四郎殿	遠藤 正三殿	山崎辰三郎殿	大内惣太郎殿	齋藤 磯治殿	國分 平介殿	渡邊 萩藏殿	阿部 佐七殿	渡邊 進殿	田中 金治殿	佐藤源四郎殿	岩崎直次郎殿	荒澤 清人殿	青年團島帽子支部殿	小林 兵一殿	八子彌壽平殿	山田富太郎殿	土屋 八郎殿	渡部 作一殿	渡部 虎一殿	富川七之助殿	原田寅吉殿	大塚文作殿	三圓宛	花見屋殿	伊勢屋旅館殿	吉田喜一殿	村尾伊太郎殿	薄彦市殿	朝日屋殿	天野竹次郎殿	鈴木忠二殿	大越彌太郎殿	大内庄藏殿	國分喜代治殿	津守留吉殿	船橋佐七殿	根本作太郎殿	大内雄壽殿	國分勝	

秋田縣

三、〇〇〇 佐藤 祥一殿
一、〇〇〇 市川 節治殿
五、〇〇〇 秋田市中通小學校職員一同殿
三圓宛
須貝久平殿
〇旭南小學校職員一同殿
一、五〇〇 佐藤 幸秀殿
〇 佐藤 善一殿

山形縣

一、二〇〇〇 風間幸右衛門殿
二、〇〇〇 加藤専十郎殿
一、〇〇〇 齋藤 金吾殿
一、〇〇〇 齋藤眞三郎殿
一、〇〇〇 菅原九左衛門殿
一、〇〇〇 須藤 榮吉殿
五、〇〇〇 齋藤 忠助殿
五、〇〇〇 天羽又兵衛殿
五、〇〇〇 板垣七郎右衛門殿
五、〇〇〇 島貫泰次郎殿
五、〇〇〇 齋藤 彌助殿
五、〇〇〇 今井安太郎殿
五、〇〇〇 長澤重太郎殿
三、〇〇〇 風間五右衛門殿
三、〇〇〇 三川 信矢殿
三、〇〇〇 大場虎三郎殿
二、〇〇〇 波多野慶次殿
二、〇〇〇 森谷 文六殿
二、〇〇〇 輕部謙三郎殿
一、〇〇〇 佐藤 平吉殿
一、〇〇〇 下條英四郎殿

宮城縣

五、〇〇 內藤 昌孝殿
三、〇〇 菅野 忠一殿

岩手縣

一、〇〇〇 小林 榮吉殿
五、〇〇〇 森口伊三郎殿
五、〇〇〇 森口りう子殿
一、〇〇〇 坂田ちとせ殿

青森縣

一、〇〇〇 柳田 泉殿
一圓宛
地代所新造殿
〇近藤愛子殿
〇近藤二良郎殿

五、〇〇	羽吹 驕殿	五、〇〇	一瀬 亮一殿	五、〇〇	早川政太郎殿○志村實太郎殿○雨宮
五、〇〇	加藤慶三郎殿	五、〇〇	石川 政雄殿	五、〇〇	隆三殿
五、〇〇	多勢吉郎次殿	三、〇〇	時田磯太郎殿	正誤	
五、〇〇	太宰 政純殿	二、〇〇	丹澤 正作殿	前號	五〇、〇〇 岩間平治郎殿
五、〇〇	後藤 榮藏殿	二、〇〇	青柳 欣一殿	同	五〇、〇〇 工藤 佐六殿
五、〇〇	秦 逸三殿	二、〇〇	依田甲子藏殿	同	五〇、〇〇 島田 正巳殿
五、〇〇	漆山喜久次殿	一、〇〇	藤川 隆一殿	右八各五圓也ノ誤ニ付キ訂正ス	
五、〇〇	西海枝信一殿	一、〇〇	秋山 房雄殿		
五、〇〇	高橋吉三郎殿	一、〇〇	保坂治左衛門殿		
五、〇〇	鹿俣忠次郎殿	一、〇〇	齋藤 四郎殿		
五、〇〇	白根澤德三郎殿	一、〇〇	依田 輝孝殿		
五、〇〇	石黒七三郎殿	一、〇〇	北川 幾藏殿		
五、〇〇	岩瀬榮太郎殿	五、〇〇	小宮山參三郎殿		
五、〇〇	野田 良藏殿	五、〇〇	花輪 助浩殿		
五、〇〇	行方 清二殿	五、〇〇	牧野 正七殿		
五、〇〇	淺間 市朗殿	五、〇〇	新津 賢藏殿		
五、〇〇	多勢龜五郎殿	三圓宛	齋藤富次郎殿		
四、〇〇	渡邊彌太郎殿	三圓宛	齋藤雅一郎殿○坂本太三郎殿○雨宮		
三圓宛	平 善兵衛殿	二圓宛	英一郎殿○河合久代殿		

五、〇〇	日向保殿○菅澤伊作殿○茂手木與一	一、五〇	深澤寅吉殿		
三圓宛	殿○遠藤三郎殿○深澤德平殿○秋山	一、五〇	三吉殿○上原なみ子殿		
一圓宛	秋山晴通殿○安藤善造殿○青柳元作		殿○秋山重助殿○望月市造殿○小池		
	善次殿○深澤利十郎殿○矢島隆一殿		○深藤源次郎殿○青柳精郎殿○一之		
	瀨録造殿○樋口銳雄殿○早川治一殿		○青柳恭太郎殿		
五拾錢宛					

静岡縣

一、〇〇	朝重 進一殿	一、〇〇	朝重 進一殿		
一、〇〇	橫山 喜克殿	一、〇〇	橫山 喜克殿		
一、〇〇	松井 敬三殿	一、〇〇	松井 敬三殿		
五、〇〇	早大田方郡學	五、〇〇	早大田方郡學		
五、〇〇	生委員一同殿	五、〇〇	生委員一同殿		
三、〇〇	石山良次郎殿	三、〇〇	石山良次郎殿		
三、〇〇	松下 欸一殿	三、〇〇	松下 欸一殿		
三、〇〇	杉本 正夫殿	三、〇〇	杉本 正夫殿		
二、五〇	原崎 源作殿	二、五〇	原崎 源作殿		
二、〇〇	堀屋印刷所殿	二、〇〇	堀屋印刷所殿		
一、五〇	渡邊壽太郎殿	一、五〇	渡邊壽太郎殿		
一、〇〇	星野 孝平殿	一、〇〇	星野 孝平殿		
一、〇〇	土屋 千秋殿	一、〇〇	土屋 千秋殿		
一、〇〇	島村 行太殿	一、〇〇	島村 行太殿		
一、〇〇	杉本 徹道殿	一、〇〇	杉本 徹道殿		
一、〇〇	井上 重吉殿	一、〇〇	井上 重吉殿		
一、〇〇	石橋時次郎殿	一、〇〇	石橋時次郎殿		
一、〇〇	原 善作殿	一、〇〇	原 善作殿		
一、〇〇	相原 由衛殿	一、〇〇	相原 由衛殿		
一、〇〇	海老名伊策殿	一、〇〇	海老名伊策殿		
一、〇〇	宮内 精殿	一、〇〇	宮内 精殿		
一、〇〇	河津市次郎殿	一、〇〇	河津市次郎殿		
一、〇〇	鈴木 照吉殿	一、〇〇	鈴木 照吉殿		
一、〇〇	鈴木 忠吉殿	一、〇〇	鈴木 忠吉殿		

一、〇〇	子上 孝平殿	一、〇〇	子上 孝平殿		
一、〇〇	秋畑安五郎殿	一、〇〇	秋畑安五郎殿		
一、〇〇	毛利 茂殿	一、〇〇	毛利 茂殿		
一、〇〇	加藤 恕殿	一、〇〇	加藤 恕殿		
一、〇〇	花島兵右衛門殿	一、〇〇	花島兵右衛門殿		
一、〇〇	室伏德兵衛殿	一、〇〇	室伏德兵衛殿		
一、〇〇	下田照太郎殿	一、〇〇	下田照太郎殿		
七、〇〇	住木嘉十郎殿	七、〇〇	住木嘉十郎殿		
六、〇〇	武智たか子殿	六、〇〇	武智たか子殿		
五、〇〇	萩谷 長藏殿	五、〇〇	萩谷 長藏殿		
五、〇〇	田村久太郎殿	五、〇〇	田村久太郎殿		
五、〇〇	澤村 麗一殿	五、〇〇	澤村 麗一殿		
五、〇〇	近藤 彌殿	五、〇〇	近藤 彌殿		
五、〇〇	吉場 節殿	五、〇〇	吉場 節殿		
五、〇〇	鳥居重太郎殿	五、〇〇	鳥居重太郎殿		
五、〇〇	若 松 屋殿	五、〇〇	若 松 屋殿		
五、〇〇	成島 道統殿	五、〇〇	成島 道統殿		
五、〇〇	鹽崎 定次殿	五、〇〇	鹽崎 定次殿		
五、〇〇	伴野岡次郎殿	五、〇〇	伴野岡次郎殿		
五、〇〇	奈良橋彌一殿	五、〇〇	奈良橋彌一殿		
五、〇〇	小宮山儀平殿	五、〇〇	小宮山儀平殿		
五、〇〇	和田 順雄殿	五、〇〇	和田 順雄殿		
五、〇〇	喜入 達郎殿	五、〇〇	喜入 達郎殿		
五、〇〇	木内 宣殿	五、〇〇	木内 宣殿		
五、〇〇	蛭海 文平殿	五、〇〇	蛭海 文平殿		
五、〇〇	河新商店殿	五、〇〇	河新商店殿		
五、〇〇	河島新兵衛殿	五、〇〇	河島新兵衛殿		
五、〇〇	木内 眞雄殿	五、〇〇	木内 眞雄殿		
五、〇〇	菱屋旅館殿	五、〇〇	菱屋旅館殿		
五、〇〇	栗原 於菟殿	五、〇〇	栗原 於菟殿		
五、〇〇	田方郡青年殿	五、〇〇	田方郡青年殿		
五、〇〇	革 新 團殿	五、〇〇	革 新 團殿		
五、〇〇	川口 周作殿	五、〇〇	川口 周作殿		
五、〇〇	中川 太作殿	五、〇〇	中川 太作殿		

五、〇〇	水口 均一殿	五、〇〇	水口 均一殿		
五、〇〇	一木孝一郎殿	五、〇〇	一木孝一郎殿		
五、〇〇	近藤 三郎殿	五、〇〇	近藤 三郎殿		
三圓宛		三圓宛			
今坂音次郎殿○芹澤十四雄殿○市川		今坂音次郎殿○芹澤十四雄殿○市川			
次郎殿○梶賢雄殿○小出富子殿○渡		次郎殿○梶賢雄殿○小出富子殿○渡			
邊藤助殿○大橋春太郎殿○深澤貞吉		邊藤助殿○大橋春太郎殿○深澤貞吉			
殿○川島兼助殿○芹澤伊太郎殿○村		殿○川島兼助殿○芹澤伊太郎殿○村			
岡藤吉殿○酒井茂雄殿○岩田廣太郎		岡藤吉殿○酒井茂雄殿○岩田廣太郎			
殿○鈴木富藏殿○伴野秀堅殿○平野		殿○鈴木富藏殿○伴野秀堅殿○平野			
屋旅館殿		屋旅館殿			
二圓宛		二圓宛			
水口治作殿○山口幸次郎殿○石川友		水口治作殿○山口幸次郎殿○石川友			
一郎殿○水口善三殿○倉新一郎殿		一郎殿○水口善三殿○倉新一郎殿			
○大村伊與藏殿○山本甚兵衛殿○水		○大村伊與藏殿○山本甚兵衛殿○水			
口時次郎殿○渡邊與祖次郎殿○遠藤		口時次郎殿○渡邊與祖次郎殿○遠藤			
敏雄殿○關根佐一郎殿○高木勝之丈		敏雄殿○關根佐一郎殿○高木勝之丈			
殿○曾根萬兵衛殿○河邊富助殿○大		殿○曾根萬兵衛殿○河邊富助殿○大			
河寬之助殿○村上健吉殿○山本平兵		河寬之助殿○村上健吉殿○山本平兵			
衛殿○村上傳右衛門殿○吉田正一殿		衛殿○村上傳右衛門殿○吉田正一殿			
○鈴木角平殿○山梨米吉殿○臼井宇		○鈴木角平殿○山梨米吉殿○臼井宇			
之助殿○山田藤十郎殿		之助殿○山田藤十郎殿			
一、〇一	松下 功殿	一、〇一	松下 功殿		
一圓宛		一圓宛			
齋藤利一殿○萩原たき殿○土屋末廣		齋藤利一殿○萩原たき殿○土屋末廣			
殿○名和佐重殿○植村豊造殿○無名		殿○名和佐重殿○植村豊造殿○無名			
氏殿○菅沼邦策殿○土屋康雄殿		氏殿○菅沼邦策殿○土屋康雄殿			

愛知縣

一、〇〇〇、〇〇	河瀬 文一殿	一、〇〇〇、〇〇	河瀬 文一殿		
九六五、四〇		九六五、四〇			
名古屋校友會野球部代表		名古屋校友會野球部代表			
塚本 義郎殿		塚本 義郎殿			

一五〇、〇〇	堀重三殿	三〇、〇〇	笠原寅之助殿	一〇、〇〇	平田政十郎殿	五、〇〇	谷口庄三郎殿	鹽瀨忠藏殿
一〇〇、〇〇	手島 彌司殿	三〇、〇〇	齋藤 康三殿	一〇、〇〇	松之木惣左衛門殿	五、〇〇	高澤 彰殿	○柴田秋平殿
五〇、〇〇	手島諒一郎殿	三〇、〇〇	代情 茂助殿	一〇、〇〇	清水 文七殿	五、〇〇	高井 盛寬殿	○上田たま子殿
五〇、〇〇	後藤安太郎殿	三〇、〇〇	阪田長五郎殿	一〇、〇〇	木母 勝二殿	五、〇〇	種藏 十郎殿	○日下部元
五〇、〇〇	石川久兵衛殿	三〇、〇〇	小森元三郎殿	一〇、〇〇	深谷竹三郎殿	五、〇〇	武田 萬藏殿	○矢代安兵衛殿
三〇、〇〇	匿名 氏殿	三〇、〇〇	小森 文助殿	七、〇〇	荻谷 半助殿	五、〇〇	田邊 豐吉殿	○藤田光
三〇、〇〇	增田 精二殿	三〇、〇〇	平田 鈴吉殿	七、〇〇	柿下 清六殿	五、〇〇	吉島休兵衛殿	○近藤定太郎殿
三〇、〇〇	野々山整一殿	二五、〇〇	山田 忠造殿	五、〇〇	老田 敬吉殿	五、〇〇	住 廣 造殿	○青木
三〇、〇〇	林田 勝達殿	二〇、〇〇	住 長三郎殿	五、〇〇	宇野暮太郎殿	五、〇〇	住 喜一郎殿	○田中菊太郎殿
三〇、〇〇	犬塚 秋彦殿	二〇、〇〇	日下部久兵衛殿	五、〇〇	四谷寅之助殿	五、〇〇	杉下平右衛門殿	○武川與三郎殿
三〇、〇〇	和田 信次殿	二〇、〇〇	長田松二郎殿	五、〇〇	加藤 專一殿	五、〇〇	杉野健三郎殿	○高橋甚藏殿
三〇、〇〇	横田 精一殿	二〇、〇〇	永田 尙殿	五、〇〇	川上 朝吉殿	五、〇〇	平瀬市兵衛殿	○大川甚作殿
三〇、〇〇	永井新一郎殿	二〇、〇〇	東 由輝殿	五、〇〇	追分 伊助殿	五、〇〇	平野 與平殿	○石川良吉殿
三〇、〇〇	細谷 鏝三殿	一五、〇〇	廣島 彙藏殿	五、〇〇	大野 越夫殿	五、〇〇	平野 素信殿	○岩瀬喜助殿
三〇、〇〇	井上 忠太殿	一五、〇〇	兩野松五郎殿	五、〇〇	小島 けい殿	五、〇〇	白野 啓助殿	○林嘉喜
三〇、〇〇	青木 榮吉殿	一〇、〇〇	上木甚兵衛殿	五、〇〇	戶崎 由衛殿	五、〇〇	三島治兵衛殿	○土井禮殿
三〇、〇〇	海野 幸秀殿	一〇、〇〇	千葉泰一郎殿	五、〇〇	本郷 莊吉殿	五、〇〇	中丸 信吉殿	一、五〇
二〇、〇〇	伏屋 秀雄殿	一〇、〇〇	林 民造殿	五、〇〇	林 隆平殿	三圓宛	東彌助殿	○土井禮殿
二〇、〇〇	山田鉦太郎殿	一〇、〇〇	二木長右衛門殿	五、〇〇	岩佐 利一殿	三圓宛	○杉山久治郎殿	○角川清七
一〇、〇〇	大橋 俊次殿	一〇、〇〇	石浦九郎右衛門殿	五、〇〇	舟坂半右衛門殿	近藤豐之助殿	○關道守殿	○住佐一郎
一〇、〇〇	石川 なみ殿	一〇、〇〇	粟野八重子殿	五、〇〇	柚原 みち殿	殿	○住山一 郎殿	○中村慶次郎殿
一〇、〇〇	金子 駒平殿	一〇、〇〇	粟野 利平殿	五、〇〇	衣笠 又市殿	田清十郎殿	○篠田恒助殿	○中野早苗
一〇、〇〇	夏目 準一殿	一〇、〇〇	福戸重太郎殿	五、〇〇	後藤峰之助殿	殿	○松本吉助殿	○坂井雅太郎殿
一〇、〇〇	早川松五郎殿	一〇、〇〇	松井 貫一殿	五、〇〇	後藤普次郎殿	殿	○坂井田正天殿	○木澤
五、〇〇	福谷 元次殿	一〇、〇〇	山下 佐助殿	五、〇〇	小森 春雄殿	殿	○田中嘉兵衛殿	○土野千秋
五、〇〇	小栗國次郎殿	一〇、〇〇	山下 佐助殿	五、〇〇	松井 音吉殿	殿	○中野寛兵衛殿	○大野政造殿
五、〇〇	淺井 俊三殿	一〇、〇〇	日下部宅二郎殿	五、〇〇	山口竹次郎殿	殿	○大野間岩之助殿	○川
五、〇〇	墨川惣太郎殿	一〇、〇〇	村澤伊三郎殿	五、〇〇	山崎 茂助殿	殿	○村田太三郎殿	上榮一殿
二、〇〇	西村 敏子殿	一〇、〇〇	長尾 うら殿	五、〇〇	黒木新右衛門殿	二圓宛	東文助殿	○東島卯八殿
一圓宛		一〇、〇〇	渡邊 一郎殿	五、〇〇	内山 知春殿	二圓宛	○杉下友之助殿	○佐藤捨藏殿
		一〇、〇〇	須田北之助殿	五、〇〇	中村 象造殿	二圓宛	○中村山兵衛殿	○中根鷲三郎
		一〇、〇〇	森 彦兵衛殿	五、〇〇	永井 環殿	二圓宛	○上村清吉殿	○上木戸義文殿
		一〇、〇〇	平田 篤松殿	五、〇〇	外 重兵衛殿	二圓宛	○清水香山殿	○志
		一〇、〇〇	日比野甚左衛門殿	五、〇〇			見清殿	○下平末吉殿

岐阜縣

井上恒雄殿○西村政子殿

常次郎殿○伊藤貫五郎殿○伊藤廣三郎殿○早崎金治殿○八賀正三殿○橋本義雄殿○西口由松殿○木田芳之助殿○細田熊吉殿○土肥振殿○岡田足穂殿

五拾錢宛
梅村倉吉殿○土村伊兵衛殿
平野 義海殿

長野縣

一〇〇、〇〇〇 丸山 直光殿
五〇、〇〇〇 粥川 進策殿
三〇、〇〇〇 山根 孝作殿
三〇、〇〇〇 田中 榮重殿
三〇、〇〇〇 小松喜代三郎殿
二〇、〇〇〇 田口 良三殿
二〇、〇〇〇 百瀬 計馬殿
一五、〇〇〇 戸塚 嘉平殿
一五、〇〇〇 平林 彌助殿
一五、〇〇〇 野澤中學校校長殿
外職員二十名殿
一五、〇〇〇 山崎織治郎殿
一五、〇〇〇 永井 善俊殿
一〇、〇〇〇 今井善五郎殿
一〇、〇〇〇 安東欽一郎殿
一〇、〇〇〇 三沼誠一郎殿
一〇、〇〇〇 久保田力藏殿
一〇、〇〇〇 楠原 勇尾殿
一〇、〇〇〇 市瀬 泰一殿
一〇、〇〇〇 棚田 儀一殿
一〇、〇〇〇 野原文四郎殿
五、〇〇〇 小澤 秋成殿
五、〇〇〇 小島馬太郎殿

五、〇〇〇 上郷小學校職員一同殿
五、〇〇〇 上郷村々吏一同殿
五、〇〇〇 代田 德男殿
五、〇〇〇 赤羽淺之助殿
五、〇〇〇 北原 治殿
五、〇〇〇 關島 喜代殿
五、〇〇〇 關川 寬治殿
五、〇〇〇 關川 一實殿
五、〇〇〇 伊原五郎兵衛殿
三圓宛
田間善作殿○土松四郎殿○山本村小學校殿○湯澤八三郎殿○大池榮治殿
二圓宛
原保殿○原義之輔殿○小池正人殿○櫻井福藏殿○波多腰政藏殿
一、五八 於長野縣講演會
無名氏殿
一圓宛
原象治郎殿○後澤壽太殿○櫻井五郎輔殿○森本覺道殿○櫻井忠雄殿○原銀作殿○原清太郎殿○原龜三殿○原逢助殿○原常五郎殿○原辰美殿○原武兵殿○杵野龜太郎殿○冬木今朝吉殿○小林高治殿○無名氏殿

新潟縣

二〇〇、〇〇〇 飯村 俊二殿
一〇〇、〇〇〇 飯村 俊雄殿
一〇〇、〇〇〇 白川 順一殿
一〇〇、〇〇〇 渡邊 俊一殿
一〇〇、〇〇〇 齋藤己三郎殿
一〇〇、〇〇〇 本田 伊平殿
五、〇〇〇 吉川 大助殿
五、〇〇〇 齋藤卯太郎殿

五、〇〇〇 柴崎雪次郎殿
五、〇〇〇 丸山 孫衛殿
五、〇〇〇 山田 助作殿
四、〇〇〇 池田作太郎殿
三、〇〇〇 渥美 重雄殿
三、〇〇〇 井上 謙孝殿
二、〇〇〇 森山 耕圓殿
一五、〇〇〇 杉浦 謙吾殿
一〇、〇〇〇 伊藤 榮一殿
一〇、〇〇〇 鷺尾 精治殿
一〇、〇〇〇 小林 勘治殿
一〇、〇〇〇 瀬戸澤次郎殿
一〇、〇〇〇 堀越 與六殿
一〇、〇〇〇 幸田 文時殿
一〇、〇〇〇 木村 銀藏殿
一〇、〇〇〇 金子大須計殿
一〇、〇〇〇 中島 敏克殿
一〇、〇〇〇 高橋藤三郎殿
一〇、〇〇〇 萩野順三郎殿
一〇、〇〇〇 草野 諭吉殿
五、〇〇〇 高橋守太郎殿
五、〇〇〇 解良淳二郎殿
五、〇〇〇 齊藤嘉藤治殿
五、〇〇〇 早川 佐傳殿
三、〇〇〇 山崎丑太郎殿
二圓宛
若杉泰治殿○今井忠一殿○長谷川惣吉殿
一圓宛
濱倉スキ殿○森山左十郎殿○吉井由太郎殿
五〇 會山志斗雄殿

富山縣

五、〇〇〇 西田 收三殿
五、〇〇〇 松田益太郎殿
二、〇〇〇 井上 鹽六殿
五、〇〇〇 近藤 武殿
三圓宛
金子宗吉殿○福田美明殿○最上久平殿
二圓宛
堀佐平殿○武田宗八殿○紫昌玄殿
一圓宛
大西順三殿○武内藤五郎殿○並木徳太郎殿○野村庄右衛門殿○藤井義人殿○小谷健芳殿○重松精一殿
中井茂八郎殿
五、〇〇〇 吉田 直則殿
一〇〇、〇〇〇 川上 正喜殿
一〇〇、〇〇〇 千代 清次殿
一〇〇、〇〇〇 永井 伊助殿
一〇〇、〇〇〇 石塚 純一殿
五、〇〇〇 中谷 重松殿
三、〇〇〇 成富 儀一殿
三、〇〇〇 渡部藤五郎殿
三、〇〇〇 湯尾雄次郎殿
一〇、〇〇〇 舟橋忠太郎殿
一〇、〇〇〇 板坂 三郎殿
一〇、〇〇〇 稻垣 忠男殿
五、〇〇〇 鈴木 一吉殿
五、〇〇〇 辻 益 子殿
五、〇〇〇 奥田 長次殿

福井縣

一五、〇〇〇 小原常太郎殿
五、〇〇〇 西村市郎右衛門殿
一、〇〇〇 平松甚之助殿
三、〇〇〇 熊澤 一衛殿
三、〇〇〇 九鬼 紋七殿
二、〇〇〇 稻垣 太郎殿
二、〇〇〇 木村 秀興殿
一五、〇〇〇 伊藤齋太郎殿
一〇、〇〇〇 小菅劍之助殿
五、〇〇〇 和波鐵太郎殿
四、〇〇〇 小西 利雄殿
三、〇〇〇 清水傳之助殿
三、〇〇〇 米本平左衛門殿
三、〇〇〇 山中傳四郎殿

滋賀縣

三重縣

石川縣

富山縣

福井縣

三〇、〇〇	村田七右衛門殿	一〇、〇〇	佐野 好殿	五、〇〇	南川佐太郎殿	四、〇〇	青年團平田支團殿	一圓五十錢宛
二〇、〇〇	伊藤幸右衛門殿	一〇、〇〇	林 邁殿	五、〇〇	水谷五郎九殿	三、八〇	城南村青年團殿	竹内鹿次郎殿
二〇、〇〇	加藤政吉郎殿	一〇、〇〇	並河 廣次殿	五、〇〇	アグネス、モルガン殿	三圓宛		近藤齋次郎殿
二〇、〇〇	近藤 虎雄殿	一〇、〇〇	田中 郁三殿	五、〇〇	福井 久七殿			一圓宛
二〇、〇〇	長谷川信次郎殿	一〇、〇〇	稻垣半左衛門殿	五、〇〇	藤田 成善殿			宇佐美達三殿
二〇、〇〇	白坂又右衛門殿	一〇、〇〇	岩野 誠一殿	五、〇〇	藤田 成善殿			○垣内甚次郎殿
二〇、〇〇	吉田茂太郎殿	一〇、〇〇	市川 利吉殿	五、〇〇	水谷常次郎殿			○山本龍祐殿
二〇、〇〇	津田 久三殿	一〇、〇〇	伊藤 惠博殿	五、〇〇	水谷忠左衛門殿			○山本龍祐殿
一五、〇〇	森寺喜兵衛殿	一〇、〇〇	清水清三郎殿	五、〇〇	日置徳次郎殿			○恩田
一五、〇〇	内山吉郎兵衛殿	一〇、〇〇	内山 文吾殿	五、〇〇	門脇 丈助殿			○房吉殿
一五、〇〇	市川理一郎殿	一〇、〇〇	川村房治郎殿	五、〇〇	田中 亨殿			○小林三治殿
一五、〇〇	笠井勘三郎殿	一〇、〇〇	杉本 清治殿	五、〇〇	中川 涉殿			○海山清殿
一一、〇〇	北野 晟一殿	一〇、〇〇	伊藤常次郎殿	五、〇〇	藤田平太郎殿			○森
一〇、〇〇	天野勝二郎殿	一〇、〇〇	伊坂秀五郎殿	五、〇〇	伊藤幸次郎殿			○鹿島保殿
一〇、〇〇	三輪 綏殿	一〇、〇〇	長谷川喜市殿	五、〇〇	西村庄右衛門殿			○安次郎殿
一〇、〇〇	伊達貫一郎殿	一〇、〇〇	濱中彌三郎殿	五、〇〇	渡邊彌三一殿			○中野繁藏殿
一〇、〇〇	稻垣太兵衛殿	一〇、〇〇	西尾 重殿	五、〇〇	岩田鏡之助殿			○鹿島保殿
一〇、〇〇	森 太吉殿	一〇、〇〇	森田祐三郎殿	五、〇〇	溝口 英郎殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	吉田千九郎殿	一〇、〇〇	荒木清兵衛殿	五、〇〇	佐藤 源一殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	大久保松次郎殿	一〇、〇〇	濱中彌兵衛殿	五、〇〇	和波久之亮殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	今谷常三郎殿	一〇、〇〇	小柴三代吉殿	五、〇〇	小森 久郎殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	九鬼紋十郎殿	一〇、〇〇	井村 和藏殿	五、〇〇	相山左五郎殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	吉田伊兵衛殿	七、〇〇	石垣 茂吉殿	五、〇〇	佐藤安之進殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	松島 寅吉殿	七、〇〇	稻村八左衛門殿	五、〇〇	稻垣 久實殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	會原徳三郎殿	七、〇〇	長野忠三郎殿	五、〇〇	林 善三郎殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	村林 文助殿	七、〇〇	出口伊兵衛殿	五、〇〇	神保 吉六殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	宮村信次郎殿	七、〇〇	田中 傳衛殿	五、〇〇	上野 進殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	郡 竹次郎殿	七、〇〇	稻垣精一郎殿	五、〇〇	坂倉半兵衛殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	門脇 三藏殿	五、〇〇	名坂 彌作殿	五、〇〇	宮村勇三郎殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	小川 學殿	五、〇〇	稻葉甲太郎殿	五、〇〇	丸山 文七殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	石井 民雄殿	五、〇〇	村山 一平殿	五、〇〇	中森 一男殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	伊藤 昇殿	五、〇〇	山下 九助殿	五、〇〇	九鬼 文助殿			○金森忠平殿
一〇、〇〇	近藤 脩殿	五、〇〇	久志本久七郎殿	四、〇八	上野町赤坂町總代濱邊喜兵衛殿			○金森忠平殿

右衛門殿

五十錢宛

山路由松殿○岡崎賢一殿○朝岡花子殿○小林初一殿○田中正男殿○鈴木民三郎殿○山路德松殿○水野甚治殿○伊藤兼一殿○米川新三殿

二〇 瀬川 靜夫殿

和歌山縣

八〇〇、〇〇 玉置 正視殿
三〇〇、〇〇 植松新十郎殿
三〇〇、〇〇 赤松 保羅殿
二〇〇、〇〇 池田伊三郎殿
二〇〇、〇〇 長谷六兵衛殿
二〇〇、〇〇 尾崎榮之助殿
二〇〇、〇〇 中谷利一郎殿
一〇〇、〇〇 浦木清十郎殿
一〇〇、〇〇 深瀬 史朗殿
一〇〇、〇〇 木村 藤吉殿
六〇、〇〇 木田定太郎殿
六〇、〇〇 和田 虎松殿
五〇、〇〇 鹽崎庄三郎殿
五〇、〇〇 古川常三郎殿
五〇、〇〇 木村瑜一郎殿
宇治田種雄殿
五〇、〇〇 林 近 藏殿
五〇、〇〇 龜瀧盛太郎殿
五〇、〇〇 寺本喜一郎殿
三〇、〇〇 玉置 雄殿
三〇、〇〇 杉本長太郎殿
三〇、〇〇 東 宗 次殿
三〇、〇〇 遊木保太郎殿
三〇、〇〇 鹽崎 道三殿

三〇、〇〇 片岡 鎌吉殿
三〇、〇〇 松江武二郎殿
三〇、〇〇 森本 貞一殿
二〇、〇〇 中西武次郎殿
二〇、〇〇 橘 育 二殿
二〇、〇〇 杉本喜代松殿
二〇、〇〇 山木丑之助殿
二〇、〇〇 小西友一郎殿
二〇、〇〇 高森 靖一殿
一六、〇〇 熊野クラス會代表 保田 美一殿
一五、〇〇 岡 定 松殿
一五、〇〇 小倉 信男殿
一〇、〇〇 畑中長四郎殿
一〇、〇〇 永田小三郎殿
一〇、〇〇 市谷 正吉殿
一〇、〇〇 楠木富之助殿
一〇、〇〇 大路 嘉康殿
一〇、〇〇 阪井彌三太殿
一〇、〇〇 鳥居春之助殿
一〇、〇〇 勝本喜代松殿
一〇、〇〇 勝又 清三殿
一〇、〇〇 奥川 幸夫殿
一〇、〇〇 岡本 繁一殿
一〇、〇〇 太平喜與次殿
一〇、〇〇 早川憲次郎殿
一〇、〇〇 坪井基太郎殿
一〇、〇〇 中會 榮次殿
一〇、〇〇 榎本 庄七殿
一〇、〇〇 高本安太郎殿
一〇、〇〇 津田長左衛門殿
一〇、〇〇 村田元三郎殿
一〇、〇〇 平石 増次殿

奈良縣

一〇、〇〇 林 守三郎殿
一〇、〇〇 小内鶴次郎殿
一〇、〇〇 小野 旁彦殿
一〇、〇〇 大西 英雄殿
六、〇〇 宇井 丈兒殿
五、〇〇 田花 竹松殿
五、〇〇 濱 良三殿
五、〇〇 太地 泰郎殿
五、〇〇 日下 辰吉殿
五、〇〇 杉本 久松殿
五、〇〇 千葉 武吉殿
五、〇〇 小野 紀一殿
五、〇〇 山路 二郎殿
五、〇〇 尾崎 直彦殿
五、〇〇 山本 菊彦殿
五、〇〇 湯川 新造殿
五、〇〇 中村 馬彦殿
五、〇〇 福田貞一郎殿
五、〇〇 鹽崎 理一殿
五、〇〇 中根長二郎殿
五、〇〇 中村 正一殿
五、〇〇 榎本益太郎殿
五、〇〇 岡 順 二殿
五、〇〇 成江 秀治殿
五、〇〇 阪口延次郎殿
三〇〇、〇〇 安田多三郎殿
一〇、〇〇 東正直殿○和田彦一殿
一〇、〇〇 大前 陽三殿
三〇〇、〇〇 奈良縣 安田多三郎殿

京都府

三〇、〇〇 中上 英雄殿
一五、〇〇 安田 多助殿
一〇、〇〇 船津彌八郎殿
一〇、〇〇 安田松太郎殿
一〇、〇〇 安田民三郎殿
一〇、〇〇 安田民三郎殿
一〇、〇〇 深瀬 貞明殿
一〇、〇〇 松木利三郎殿
一〇、〇〇 芳川 雄三殿
一〇、〇〇 安田八重子殿
五、〇〇 井上定次郎殿
五、〇〇 井上定次郎殿
五、〇〇 鎌塚久五郎殿
五、〇〇 有川 忠夫殿
五、〇〇 上杉 直太殿
五、〇〇 中戸 由松殿
五、〇〇 久保清太郎殿
三〇、〇〇 安田千代子殿○安田百太郎殿○庄司吉郎殿○上田薫殿
二〇、〇〇 安田時殿○安田笑子殿○前防玄貫殿
二〇、〇〇 〇度瀨賢承殿○五味七郎殿○井上玉吉殿○加藤丈太郎殿○加藤榮太郎殿
一〇、〇〇 〇福谷宗平殿○佐古武彦殿
一〇、〇〇 林直温殿○安田文子殿
一〇、〇〇 井上清太郎殿
五〇〇、〇〇 大原直次郎殿
三〇〇、〇〇 西村定次郎殿
一〇〇、〇〇 石澤繼治郎殿
一〇〇、〇〇 友田金三郎殿
一〇〇、〇〇 岡本芳之助殿

綾部町有志十八名

一〇、〇〇 岡野源三郎殿
一〇、〇〇 中野辰之助殿
一〇、〇〇 樋口芳太郎殿
一〇、〇〇 倉田五郎兵衛殿
一〇、〇〇 奥田平兵衛殿
一〇、〇〇 今井六兵衛殿
六〇、〇〇 村上 國吉殿
五〇、〇〇 岸田喜兵衛殿
五〇、〇〇 城下 竹治殿
五〇、〇〇 鴻池銀行京都支店員五名殿
五〇、〇〇 竹内 愛藏殿
五〇、〇〇 宇野又三郎殿
三〇、〇〇 塚本 儀助殿
三〇、〇〇 矢崎正太郎殿
二五、〇〇 松本 辨吉殿
二〇、〇〇 加藤 龍一殿
二〇、〇〇 松村平兵衛殿
二〇、〇〇 大久保作次郎殿
一〇、〇〇 吉富金太郎殿
一〇、〇〇 藤井 祐正殿
一〇、〇〇 安田 太七殿
一〇、〇〇 井上 幸吉殿
一〇、〇〇 足達 米治殿
一〇、〇〇 井上德左衛門殿
一〇、〇〇 森川 定七殿
一〇、〇〇 高橋 源七殿
一〇、〇〇 井關傳兵衛殿
一〇、〇〇 石井 齡治殿
一〇、〇〇 宅間 藤馬殿
一〇、〇〇 安田 ゆか殿

五、〇〇	大槻宇之助殿
五、〇〇	増田松次郎殿
二圓宛	
出口光三殿	安山彌平殿
出口光三殿	安山卯三殿
森盛藏殿	
一圓宛	
出口榮藏殿	梅垣喜藏殿
出口榮藏殿	藤田倍次郎殿
和田百豊殿	白井英好殿
五、〇〇	管井晴太郎殿
正誤	
前號二〇〇、〇〇	河原井象三殿トア
ルヲ 同	河原林象三殿ニ訂正

大阪府

二、〇〇〇、〇〇	今西林三郎殿
六〇〇、〇〇	大阪毎日新聞社
三〇〇、〇〇	野球部殿
二〇〇、〇〇	芋谷瀧三郎殿
二〇〇、〇〇	丸茂 忠郎殿
二〇〇、〇〇	小川 親篤殿
二〇〇、〇〇	阪上宗兵衛殿
二〇〇、〇〇	生駒 コマ殿
一〇〇、〇〇	廣瀬安太郎殿
一〇〇、〇〇	關崎四五六殿
一〇〇、〇〇	有田 朝一殿
一〇〇、〇〇	畑田 保次殿
一〇〇、〇〇	清水 覺夫殿
一〇〇、〇〇	宮本 諄殿
一〇〇、〇〇	三堀 寛殿
一〇〇、〇〇	岸田 完五殿
一〇〇、〇〇	石垣 庄八殿
一〇〇、〇〇	田中藤三郎殿
六〇、〇〇	東尾 勝三殿

六〇、〇〇	岩本 富藏殿
六〇、〇〇	松本 岸三殿
五〇、〇〇	大澤 定正殿
五〇、〇〇	中島 傳吉殿
五〇、〇〇	相原山次郎殿
五〇、〇〇	猪居 龜松殿
五〇、〇〇	服部保太郎殿
五〇、〇〇	岡野養之助殿
五〇、〇〇	後醍醐正六殿
五〇、〇〇	遠藤麟太郎殿
三〇、〇〇	平野英太郎殿
三〇、〇〇	佐藤 贊太殿
三〇、〇〇	石川 文一殿
三〇、〇〇	岡 俊雅殿
三〇、〇〇	大塚 有章殿
三〇、〇〇	寄氣 實明殿
三〇、〇〇	平井 確郎殿
二〇、〇〇	小野 順治殿
二〇、〇〇	淺沼 務殿
二〇、〇〇	高木熊次郎殿
二〇、〇〇	浦野常次郎殿
一五、〇〇	新川 盛彦殿
一〇、〇〇	今來信太郎殿
一〇、〇〇	鯛中 昌磨殿
一〇、〇〇	丸井 萬藏殿
五、〇〇	大道 ため殿
五、〇〇	伊藤 駒子殿
五、〇〇	三谷 かつ殿
五、〇〇	湊 あい殿
五、〇〇	中戸安次郎殿
五、〇〇	堀戸爲次郎殿
五、〇〇	七尾 まさ殿
五、〇〇	稻垣繁太郎殿

兵庫縣

五、〇〇	押木 晴殿
五、〇〇	伊藤卯之助殿
三圓宛	
菊井商會殿	奥野義重殿
葛井作兵衛殿	小林萬作殿
辻橋一殿	村田巳之助殿
辻橋一殿	遊谷長三殿
駒井喜兵衛殿	佐村木勝吉殿
豊内勝三郎殿	辰巳吉之助殿
取谷熊次郎殿	
二圓宛	
橋高齊三殿	葛井民藏殿
橋高齊三殿	田崎吉藏殿
高辻ハツ殿	領家奈良三郎殿
橋寅吉殿	龜田嘉太郎殿
橋寅吉殿	松丸盛一殿
中村藤三郎殿	
一圓五拾錢宛	
雪永米藏殿	和田高十郎殿
一、〇〇	上田 安治殿
正誤	
前號 五〇〇、〇〇	松葉茶助殿トアル
同	松葉恭助殿ニ訂正ス

三七、〇〇	増谷女學校殿
三〇、〇〇	原口 純一殿
三〇、〇〇	大石 武二殿
三〇、〇〇	石丸源次郎殿
二〇、〇〇	杉村 茂介殿
一〇、〇〇	松井 和宗殿
一〇、〇〇	小林 一雄殿
一〇、〇〇	弓場善之助殿
一〇、〇〇	野條辰三郎殿
五、〇〇	山田 泰二殿
五、〇〇	八十川政太殿
五、〇〇	吉原 譽殿
五、〇〇	笹谷 外夫殿
五、〇〇	賀集 益藏殿
五、〇〇	西岡 勢七殿
五、〇〇	國澤 能春殿
五、〇〇	河田 忠彦殿
五、〇〇	土方 義壽殿
五、〇〇	八十川とく子殿
五、〇〇	永井己之藏殿
三圓宛	
今井廉之助殿	高辻楯吉殿
今井廉之助殿	坂井弘殿
森田茂殿	野々市吉次殿
森田茂殿	岡本良助殿
細川鉅殿	吉原ユキ殿
細川鉅殿	八十川正彦殿
阿山猪佐久殿	坂田伊與五郎殿
市川正孝殿	市川喜規殿
二圓宛	
岡田正義殿	青石實三郎殿
岡田正義殿	山崎政吉殿
道上吉藏殿	上田龜吉殿
道上吉藏殿	西川太次殿
一圓宛	
梶本一郎殿	梶石松殿
梶本一郎殿	森畑又吉殿

○山本新吉殿 ○吉田萬二郎殿 ○金野宇太郎殿 ○與治留四郎殿 ○加治伊三郎殿 ○西脇石松殿 ○中尾重三郎殿 ○坊惠作殿 ○中尾義夫殿 ○丸吉吉殿 ○石井長三郎殿 ○作田良三殿 ○辻本辰之助殿 ○辻伊藏殿 ○辻本伊九一殿 ○細木喜作殿 ○有安榮之助殿 ○本田作太郎殿 ○松井繁吉殿 ○辻喜之助殿 ○本田三郎殿 ○友安六平殿 ○後藤彌介殿 ○庄治恒治殿 ○森仲藏殿 ○上谷幸一郎殿 ○作田豐一殿 ○梶太郎殿 ○庄治萬二郎殿 ○上谷辰之助殿 ○杉本駿殿 ○二松松作藏殿 ○一家定一殿 ○阪口秀松殿 ○西門馬二郎殿 ○一家次郎吉殿 ○古藪廣一殿 ○野口字之助殿 ○野口作太郎殿 ○榎木清一郎殿 ○鮫貝重太郎殿 ○中西元之介殿 ○坂田勝藏殿 ○中尾太一郎殿 ○亥野德一殿 ○野口小三郎殿 ○杉本義尊殿 ○宮崎辨藏殿 ○札場菊二郎殿 ○西口儀三郎殿 ○上本惠隣殿 ○塚本伊三郎殿 ○塚本庄太郎殿 ○塚本磯吉殿 ○山垣勢治郎殿 ○山垣房吉殿 ○寺本勝二郎殿 ○山垣貞造殿 ○今西千代八殿 ○戸尻勸造殿 ○橋本秀吉殿 ○東治郎吉殿 ○東駒吉殿 ○樽井吉三郎殿 ○小西三藏殿 ○山田房吉殿 ○森力藏殿 ○田中甚吉殿 ○鍛冶定吉殿 ○塗田幾之助殿 ○橋本虎太郎殿 ○橋本熊吉殿 ○橋本榮太郎殿 ○萬並芳藏殿 ○松原金藏殿 ○金野治三郎殿 ○吉田國二郎殿 ○下野傳吉殿 ○濱名定之助殿

五、〇〇 藤田金三郎殿

岡山縣

廣島縣

野崎武吉郎殿 一〇、〇〇〇
 三宅 元雄殿 一〇、〇〇〇
 山田芳三郎殿 一〇、〇〇〇
 大西 虎雄殿 二〇〇、〇〇〇
 下村亮太郎殿 一〇、〇〇〇
 中島 榮殿 一〇、〇〇〇
 古屋野橋衛殿 五、〇〇〇
 原田 吉平殿 五、〇〇〇
 一圓宛

黑田秀夫殿○横山應天堂殿

佐々木千秀殿 二〇〇、〇〇〇
 三宅清兵衛殿 一〇〇、〇〇〇
 野木 六雄殿 一〇〇、〇〇〇
 卜部 守之殿 一〇〇、〇〇〇
 島津 霽吉殿 一〇〇、〇〇〇
 石田常太郎殿 六〇、〇〇〇
 富島 平助殿 六〇、〇〇〇
 澤原 俊雄殿 五〇、〇〇〇
 山本 道之殿 五〇、〇〇〇
 植田新之助殿 五〇、〇〇〇
 吳市同盟銀行會 五〇、〇〇〇
 幹事吳商工銀行殿 三〇、〇〇〇
 澤原 精一殿 三〇、〇〇〇
 遠藤傳右衛門殿 三〇、〇〇〇
 中鹽 龍殿 二〇、〇〇〇
 小島利久夫殿 一五、〇〇〇
 堀岡 眞一殿 一〇、〇〇〇
 勝田 登一殿 一〇、〇〇〇
 宮崎俊太郎殿 一〇、〇〇〇

山口縣

宮部久太郎殿 一〇、〇〇〇
 中村 準二殿 一〇、〇〇〇
 武富 成一殿 一〇、〇〇〇
 瀧口 兵一殿 一〇、〇〇〇
 大島 昇一殿 一〇、〇〇〇
 藤井重三郎殿 五、〇〇〇
 白川 染殿 五、〇〇〇
 大塚 恒市殿 五、〇〇〇
 岡崎琢太郎殿 五、〇〇〇
 中島 精二殿 五、〇〇〇
 橋高茂三郎殿 五、〇〇〇
 三木 孝造殿 五、〇〇〇
 三圓宛

佐藤長次郎殿○三谷清吉殿○藤野貞三殿○八杉定次郎殿

寺田力吉殿○小山靜兵衛殿○橋本迷造殿

一圓宛

廣井傳殿○林爲助殿○廣安伍助殿○木村倉太殿○坂井寅三殿○長久顯三殿○土屋政太殿

佐藤 爲助殿 五〇

豐田 公平殿 一五〇、〇〇〇
 松本 新六殿 一五〇、〇〇〇
 上野 唯勝殿 一五〇、〇〇〇
 宮下 實三殿 八〇、〇〇〇
 一柳 靖三殿 六〇、〇〇〇
 毛利 祥久殿 五〇、〇〇〇
 新川元右衛門殿 一五、〇〇〇
 土屋 恭輔殿 一〇、〇〇〇

鳥取縣

藏澄義三郎殿 一〇、〇〇〇
 久保田誠之殿 三、〇〇〇
 大部 アサ殿 一、五〇〇
 五拾錢宛

田熊吉之進殿○渡邊典殿○松村坂吉殿○栗田佐一殿○河村勇助殿○田熊ツタ殿○山本倉助殿

拾錢宛

森本清一殿○田中雅殿

小田 政美殿 六〇〇、〇〇〇
 稻田 元長殿 五〇〇、〇〇〇
 難波 義雄殿 五〇、〇〇〇
 藤繩 範介殿 二〇、〇〇〇
 井上 房治殿 一〇、〇〇〇
 井上 孝喜殿 一〇、〇〇〇
 石尾保太郎殿 一〇、〇〇〇
 田中 千藏殿 一〇、〇〇〇
 石尾源太郎殿 五、〇〇〇

島根縣

渡邊新太郎殿 二〇、〇〇〇
 森山 重男殿 一〇、〇〇〇
 太田廣太郎殿 一〇、〇〇〇
 井元祐右衛門殿 五、〇〇〇

首藤 貞吉殿 一〇、〇〇〇
 岡本由喜三郎殿 五、〇〇〇
 土成尋常小學殿 三、〇〇〇
 校職員一同

酒卷光太郎殿○酒卷伊左衛門殿

一圓宛

西村 正安殿 一五〇、〇〇〇
 藤井 政八殿 一二〇、〇〇〇
 大森 財藏殿 一二〇、〇〇〇
 藤村 寬殿 一〇〇、〇〇〇
 小西 元殿 一〇〇、〇〇〇
 西村 定則殿 五〇、〇〇〇
 笠井 宗一殿 五〇、〇〇〇
 大西 鐘輔殿 五〇、〇〇〇
 長谷川八郎殿 五〇、〇〇〇
 上野留五郎殿 五〇、〇〇〇
 伊賀兼三郎殿 三〇、〇〇〇
 大林 英夫殿 三〇、〇〇〇
 大西貞次郎殿 三〇、〇〇〇
 黒木 筆助殿 二五、〇〇〇
 石井 數平殿 一〇、〇〇〇
 石川森太郎殿 一〇、〇〇〇
 仁田 正金殿 一〇、〇〇〇
 溝淵 又藏殿 二、〇〇〇

高知縣

安藝郡早大學生一同殿 一〇八、八〇〇
 野島 信忠殿 一〇、〇〇〇
 山崎 繁喜殿 五、〇〇〇
 安岡 福吉殿 二、〇〇〇

八幡濱町在任早大學生一同 代表 毛利 只義殿 一〇五、〇〇〇
 芳我 保殿 一〇〇、〇〇〇
 吉元誠一郎殿 一〇〇、〇〇〇
 大野 警吾殿 一〇〇、〇〇〇
 仲田傳之影殿 一〇〇、〇〇〇
 手島楨三郎殿 一〇〇、〇〇〇
 木下 明治殿 一〇〇、〇〇〇
 松木 文二殿 一〇〇、〇〇〇
 大野 德七殿 七〇、〇〇〇
 三津濱早大學生 演藝會 五六、〇〇〇
 菊地 清平殿 五〇、〇〇〇
 柳田與三郎殿 五〇、〇〇〇
 田内榮三郎殿 五〇、〇〇〇
 山本 義晴殿 五〇、〇〇〇
 高須 峰造殿 五〇、〇〇〇
 村上長次郎殿 五〇、〇〇〇
 須内實三郎殿 五〇、〇〇〇
 村上 莊三殿 五〇、〇〇〇
 岩村芳太郎殿 五〇、〇〇〇
 川之石町在任 早大學生演藝會 三八、八五〇
 香川熊太郎殿 三〇、〇〇〇
 村上半太郎殿 三〇、〇〇〇
 越智虎太郎殿 三〇、〇〇〇
 長井幸太郎殿 三〇、〇〇〇
 玉井友太郎殿 三〇、〇〇〇
 由井恒太郎殿 三〇、〇〇〇
 檜田寅之丞殿 三〇、〇〇〇
 矢野出龜之助殿 三〇、〇〇〇

愛媛縣

三〇、〇〇	岡田 喜一殿	一〇、〇〇	町田 秀務殿	一〇、〇〇	白銀 豐殿	五、〇〇	長崎 健夫殿	三〇、〇〇	深野 憲見殿
三〇、〇〇	河野駒次郎殿	一〇、〇〇	株式會社 内子銀行殿	一〇、〇〇	芳我 數衛殿	五、〇〇	町野 茂朝殿	三〇、〇〇	井本 孝殿
二〇、〇〇	近藤 正平殿	一〇、〇〇	福居甚五平殿	五、〇〇	二宮精四郎殿	五、〇〇	二宮 正文殿	二五、〇〇	望月 康哉殿
二〇、〇〇	德本 良一殿	一〇、〇〇	栗田 英敏殿	五、〇〇	其六會代表 井上 伊平殿	五、〇〇	平塚 義和殿	二〇、〇〇	川手龜之助殿
二〇、〇〇	大西和一郎殿	一〇、〇〇	黒川 槌忠殿	五、〇〇	西尾萬太郎殿	五、〇〇	友澤 重郎殿	一〇、〇〇	久保田清太殿
二〇、〇〇	宮内 長殿	一〇、〇〇	上田哲二郎殿	五、〇〇	遠田周一郎殿	五、〇〇	宮田 愛明殿	一〇、〇〇	草刈 健藏殿
二〇、〇〇	三友 舍殿	一〇、〇〇	上田 謙吉殿	五、〇〇	下井小太郎殿	五、〇〇	二宮 道厚殿	一〇、〇〇	奈良 秀治殿
二〇、〇〇	岡田 悅三殿	一〇、〇〇	林 實正殿	五、〇〇	由利常太郎殿	五、〇〇	大高 五郎殿	一〇、〇〇	清水慶之助殿
二〇、〇〇	小西壽三郎殿	一〇、〇〇	重松 太郎殿	五、〇〇	渡邊 坦殿	五、〇〇	大西 常治殿	一〇、〇〇	神德 明道殿
二〇、〇〇	今川 續緒殿	一〇、〇〇	八木 誠一殿	五、〇〇	佐海 直隆殿	五、〇〇	小泉 瀧藏殿	一〇、〇〇	大石 敬三殿
二〇、〇〇	西山琴三郎殿	一〇、〇〇	東 忠直殿	五、〇〇	笹田 治水殿	五、〇〇	高岡 デン殿	一〇、〇〇	中野 作樂殿
二〇、〇〇	村瀬 正敬殿	一〇、〇〇	島田富士太郎殿	五、〇〇	三木 長政殿	五、〇〇	曾根與八郎殿	一〇、〇〇	宮崎小八郎殿
二〇、〇〇	藤田寛二郎殿	一〇、〇〇	露口 守雄殿	五、〇〇	香川養太郎殿	五、〇〇	後藤 茂殿	一〇、〇〇	田内 眞能殿
二〇、〇〇	加藤 恒忠殿	一〇、〇〇	佐川 與市殿	五、〇〇	重森 米吉殿	五、〇〇	今井忠太郎殿	一〇、〇〇	吉末 功殿
一五、〇〇	西山 實彌殿	一〇、〇〇	福岡 龜一殿	五、〇〇	福井 末廣殿	五、〇〇	宮内大三郎殿	一〇、〇〇	野崎 貞敏殿
一五、〇〇	富田 嘉吉殿	一〇、〇〇	大森 只衛殿	五、〇〇	井上熊太郎殿	五、〇〇	岸 史郎殿	一〇、〇〇	中村喜次郎殿
一五、〇〇	重信雄三郎殿	一〇、〇〇	程野彦太郎殿	五、〇〇	中川吉太郎殿	五、〇〇	大西 藏六殿	一〇、〇〇	東原 敬一殿
一〇、〇〇	矢野小十郎殿	一〇、〇〇	河野 高芳殿	五、〇〇	中村 文藏殿	四、〇〇	東村縫治郎殿	一〇、〇〇	藤山 良一殿
一〇、〇〇	福岡 芳芽殿	一〇、〇〇	今川 安宅殿	五、〇〇	大政節太郎殿	三圓宛	稗圃 ヒサ殿	一〇、〇〇	長野 重臣殿
一〇、〇〇	德田 甚吉殿	一〇、〇〇	三瀬徳太郎殿	五、〇〇	松本 正晴殿	二圓宛	龍田宥量殿○河野伊勢五郎殿	一〇、〇〇	廣渡 晴樹殿
一〇、〇〇	大野龜太郎殿	一〇、〇〇	兵藤 正人殿	五、〇〇	坂本卯一郎殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇	中村常太郎殿	三谷 高音殿
一〇、〇〇	城戸 通徳殿	一〇、〇〇	龜岡 哲夫殿	五、〇〇	重松 清行殿	一、五〇	岡 房吉殿	一〇、〇〇	深川 忠吉殿
一〇、〇〇	廣橋 次郎殿	一〇、〇〇	本多 歛殿	五、〇〇	影浦 次男殿	一圓宛	松村 增男殿	一〇、〇〇	首藤 精殿
一〇、〇〇	松井 正作殿	一〇、〇〇	中村象太郎殿	五、〇〇	矢野 小市殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇	松村 增男殿	松村 增男殿
一〇、〇〇	河野 眞琴殿	一〇、〇〇	池田 貞市殿	五、〇〇	和田榮三郎殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇	山本 芳助殿	山本 芳助殿
一〇、〇〇	安達 雲平殿	一〇、〇〇	島田安三郎殿	五、〇〇	大西澤五郎殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇	辻井 眞殿	辻井 眞殿
一〇、〇〇	赤松佐治眞殿	一〇、〇〇	三瀬嘉三郎殿	五、〇〇	山内 範平殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇	白井 文彦殿	白井 文彦殿
一〇、〇〇	河野福太郎殿	一〇、〇〇	芳我 實衛殿	五、〇〇	田中好五郎殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇	末永 留吉殿	末永 留吉殿
一〇、〇〇	田村 縁殿	一〇、〇〇	渦岡 綱藏殿	五、〇〇	藤山 藤太殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇	川上 文夫殿	川上 文夫殿
一〇、〇〇	芳我 孝一殿	一〇、〇〇	滿野和一郎殿	五、〇〇	吉田章太郎殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇	板垣 龍亮殿	板垣 龍亮殿
一〇、〇〇	芳我吉右衛門殿	一〇、〇〇	會根ノブヨ殿	五、〇〇	豐川 英吉殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇	黒田忠次郎殿	黒田忠次郎殿
一〇、〇〇	芳我 彌雄殿	一〇、〇〇	喜多酒造殿	五、〇〇	渡邊 滿匡殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇	杉本時化雄殿	杉本時化雄殿
一〇、〇〇	淺野 善作殿	一〇、〇〇	株式會社	五、〇〇	渡邊 滿匡殿	一宮和太郎殿○佐々木喜久雄殿○ 寶來貴寶三殿○久保安太郎殿	一〇、〇〇		

福岡縣

五〇〇〇	森 繁哉殿	五、〇〇	泉 光藏殿
五〇〇〇	小林重太郎殿	二圓宛	
五〇〇〇	渡邊 堅護殿	上野利三郎殿○猪口和吉殿	
五〇〇〇	平岡 義孝殿	一、五〇	甲斐貞次郎殿
五〇〇〇	荒木榮一郎殿	一圓宛	
五〇〇〇	飯野惣太郎殿	宮崎速瀨殿○森ヲトセ殿○金子滿津	
五〇〇〇	保住 幸生殿	男殿○森ミツリ殿○津城トラノ殿○	
五〇〇〇	馬場登士夫殿	十時ヲトセ殿○眞崎ヨウ殿○田中ヨ	
五〇〇〇	蒲地 競殿	シエ殿○江河ハツネ殿○古賀ミツエ	
五〇〇〇	肥筑石炭窯業 株式會社殿	殿○百垣令丸殿○廣松喜三郎殿○富	
五〇〇〇	二宮 彦雄殿	松正治殿○今村治義殿○池田忠太郎	
五〇〇〇	宇都宮泰繼殿	殿○石橋正三郎殿○大坪有義殿○田	
四〇〇〇	中村勝三郎殿	中茂三郎殿○齋藤義雄殿○北原則男	
三〇〇〇	小澤 勝七殿	殿○本村太郎殿	
三〇〇〇	北脇 祥殿	五、〇〇	梶島伊勢松殿
三〇〇〇	上田 誠殿	三、〇〇	無名氏殿
三〇〇〇	佐藤 正雄殿		
三〇〇〇	福井 鐵雄殿	二〇、〇〇	山崎仁三郎殿
三〇〇〇	内海 東男殿	二〇、〇〇	清水作兵衛殿
三〇〇〇	中村嘉次郎殿	二〇、〇〇	塚島房次郎殿
三〇〇〇	近藤 正之殿	二〇、〇〇	市川 元愛殿
二五〇〇	江頭 清殿	一五、〇〇	吉田武一郎殿
一〇〇〇	久保田由次郎殿	一五、〇〇	矢澤喜三郎殿
一〇〇〇	高原 太島殿	一五、〇〇	松尾 四郎殿
一〇〇〇	吉永 代殿	一五、〇〇	山本 行道殿
一〇〇〇	川口補習學校 職員中殿	一〇、〇〇	高木平次郎殿
一〇〇〇	伊野 敬義殿	一〇、〇〇	吉田 千策殿
一〇〇〇	富士木三代吉殿	一〇、〇〇	東 省次殿
五〇〇〇	北原 信一殿	一〇、〇〇	山崎勝次郎殿
五〇〇〇	三又尋常高等 小學 校殿	一〇、〇〇	内田 彌吉殿
五〇〇〇	粟飯原錦次郎殿	一〇、〇〇	植木元太郎殿
五〇〇〇	森岡 守成殿	一〇、〇〇	塚島吉三郎殿
			木田龜太郎殿

長崎縣

五、〇〇	初島 深三殿	五、〇〇	滿井勝次郎殿
一〇、〇〇	橋本千五郎殿	五、〇〇	柴田 英彦殿
一〇、〇〇	清水 文雄殿	五、〇〇	菅 又八殿
一〇、〇〇	平山 嘉門殿	五、〇〇	杉本 利善殿
一〇、〇〇	島内 源一殿	五、〇〇	内野 義則殿
一〇、〇〇	水町 藤一殿	三圓宛	
八、〇〇	中島金兵衛殿	京田惣吉殿○早稻田熊雄殿○村上與	
五、〇〇	吉川大六郎殿	十郎殿○早稻田夢三殿○金子六衛殿	
五、〇〇	古川 箴一殿	○古瀬卯太郎殿○松下覺殿○吉井武	
五、〇〇	早稻田要衛殿	市殿○榑田幸三郎殿○高井嘉三郎殿	
五、〇〇	加藤 龜吉殿	○相良甚一郎殿○井手吉二殿○大場	
五、〇〇	野中 留十殿	善九郎殿	
五、〇〇	谷口 泉殿	二圓宛	
五、〇〇	山本 富治殿	木下良二殿○菊池達玄殿○阿波秀三	
五、〇〇	前田 猛殿	郎殿○小國和雄殿○井口卯太郎殿○	
五、〇〇	山崎和一郎殿	木下虎喜殿○井上新太郎殿	
五、〇〇	中山 剛殿	一、〇〇	日向 茂市殿
五、〇〇	中山 文樹殿	正誤	
五、〇〇	中島 鐵男殿	九月號	
五、〇〇	高橋 正直殿	一〇、〇〇○宮田梧殿トアルヲ	
五、〇〇	渡邊 哲郎殿	同宮田格殿ニ訂正	
五、〇〇	折田 祐吉殿		
五、〇〇	織田萬次郎殿		
五、〇〇	友永 定吉殿		
五、〇〇	伊藤 官治殿	一〇〇、〇〇	原 誠助殿
五、〇〇	伊藤 馬八殿	五〇、〇〇	勝屋 弘規殿
五、〇〇	飯島 宗義殿	三五、〇〇	藤生幸太郎殿
五、〇〇	宮崎 曆藏殿	三〇、〇〇	秀島春一郎殿
五、〇〇	田丸 勝一殿	二〇、〇〇	石川 文八殿
五、〇〇	澤井 重軌殿	二〇、〇〇	原 孝德殿
五、〇〇	松尾 豪雄殿	一五、〇〇	須古小學校殿
五、〇〇	江崎好太郎殿	一五、〇〇	片岡 利一殿
五、〇〇	相良荒次郎殿	一五、〇〇	溝口榮太郎殿
五、〇〇	木村治三郎殿	一一、〇〇	副島 茂三殿

佐賀縣

一〇、〇〇	木村 全九殿
一〇、〇〇	古川 一才殿
一〇、〇〇	中島松二郎殿
一〇、〇〇	中野 淺吉殿
一〇、〇〇	鶴丸種一郎殿
一〇、〇〇	鶴丸廣太郎殿
一〇、〇〇	塚原 喜六殿
一〇、〇〇	市川 潔殿
一〇、〇〇	大串 藤吉殿
一〇、〇〇	森 喜六殿
一〇、〇〇	力久辰三郎殿
一〇、〇〇	稻富 武一殿
七、〇〇	北島 虎吉殿
七、〇〇	古賀銀三郎殿
七、〇〇	原 多平殿
七、〇〇	大串廣太郎殿
五、〇〇	稻富 寅一殿
五、〇〇	江口 喜平殿
五、〇〇	彌富 惣三殿
五、〇〇	西村 謙三殿
五、〇〇	小倉 清彦殿
五、〇〇	深町 仁市殿
五、〇〇	久保正兵衛殿
五、〇〇	中尾豐太郎殿
五、〇〇	堤 善六殿
五、〇〇	川副 廣吉殿
五、〇〇	鍵山 俊保殿
五、〇〇	小柳實太郎殿
三圓宛	
	光野儀六殿○井手國吉殿○蒲原彌一
	殿○塚原龜吉殿○村山鹿一郎○八ッ
	木岩吉殿○古賀榮次殿○末吉善六殿
	○糸山英次郎殿

二圓二十錢宛 無名氏二名殿
二圓宛
德久清一郎殿○田原虎三殿○副島長一郎殿○小宮ユキ殿○小林武三殿○

森山儀八殿○永淵龜之助殿○山田伊吉殿○田代秀吉殿○大家利晴殿○野口伊太郎殿○池田伊勢次郎殿○三浦伊三殿

一圓宛
山崎善次郎殿○諸岡勝之助殿

熊本縣

三〇〇、〇〇〇 藤川 年殿
三、〇〇〇 園田 周作殿

宮崎縣

一、〇〇〇、〇〇〇 米良 重美殿
一、〇〇〇、〇〇〇 赤澤虎之助殿
一、〇〇〇、〇〇〇 谷 次郎殿
五〇〇、〇〇〇 日高猪兵衛殿
三〇〇、〇〇〇 佐藤千吉郎殿
二〇〇、〇〇〇 日高 安實殿
二〇〇、〇〇〇 井尻 正殿
一五〇、〇〇〇 永井 廉夫殿
一五〇、〇〇〇 安樂 興俊殿
一〇〇、〇〇〇 綾部 二郎殿
一〇〇、〇〇〇 藤本龍三郎殿
一〇〇、〇〇〇 岩切 縣殿
一〇〇、〇〇〇 宮下 秀一殿
一〇〇、〇〇〇 曾木 重貴殿
一〇〇、〇〇〇 池袋 春樹殿
三〇、〇〇〇 德地 清三殿
三〇、〇〇〇 後藤 基殿

三〇〇、〇〇〇 河野 順三殿
二〇〇、〇〇〇 日高 三郎殿
一〇〇、〇〇〇 黒木利三郎殿
一〇〇、〇〇〇 安藤政千代殿
一〇〇、〇〇〇 河野清次郎殿
一〇〇、〇〇〇 金丸伊勢吉殿
一〇〇、〇〇〇 長友 文雄殿
一〇〇、〇〇〇 長友 末助殿
一〇〇、〇〇〇 江川甚一郎殿
一〇〇、〇〇〇 江夏喜兵衛殿
一〇〇、〇〇〇 日高三之助殿
七、八〇 美々津小學校職員殿
五、〇〇〇 八幡 繁松殿
五、〇〇〇 相馬 卯一殿
五、〇〇〇 赤木十太郎殿
五、〇〇〇 林 貞助殿
五、〇〇〇 日高 虎吉殿
五、〇〇〇 鹽見 雅雄殿
五、〇〇〇 野邊 傳七殿
三圓宛
有馬彦次殿○小野原弘殿○阿部良平殿
二圓宛
原齋藏殿○安藤重夫殿○近藤勇吉殿
○金丸禎三殿○富高保殿
一圓宛
九鬼福太郎殿○深田通殿○森軍治殿
○服部富平殿○守部吉太殿○平島武雄殿○安藤利一殿○高山辰六殿○村山實三殿○岩本吾平殿○渡邊泰治殿
○富高袈裟四郎殿
五十錢宛

大分縣

玉井一郎殿○久家信一殿○河野享殿
○高木吉之助殿

三〇〇、〇〇〇 山口 半七殿
一〇〇、〇〇〇 中尾 清殿
一〇〇、〇〇〇 高山 英明殿
一〇〇、〇〇〇 千原 喜助殿
一〇〇、〇〇〇 三田 政則殿
一〇〇、〇〇〇 油屋 惣八殿
四〇〇、〇〇〇 松山 保市殿
三〇〇、〇〇〇 田中 清夫殿
三〇〇、〇〇〇 岩田 虎藏殿
三〇〇、〇〇〇 一丸伍兵衛殿
二〇〇、〇〇〇 神崎 作市殿
二〇〇、〇〇〇 瀨口 平吉殿
二〇〇、〇〇〇 井上己之吉殿
一〇〇、〇〇〇 中村 鶴殿
一〇〇、〇〇〇 池田 武彦殿
一〇〇、〇〇〇 中村 清三殿
五、〇〇〇 泉 伊三郎殿
五、〇〇〇 中 八郎殿
五、〇〇〇 溝上 國藏殿
一〇〇、〇〇〇 龍 つる殿
五〇〇、〇〇〇 篠田早一郎殿
五〇〇、〇〇〇 竹之下英三殿
三〇〇、〇〇〇 新納 積彌殿
五、〇〇〇 國分 絞彌殿
三、〇〇〇 早淵伊藤太殿
二、〇〇〇 黒川 源七殿

北海道

三〇〇、〇〇〇 西村 忠一殿
七五、〇〇〇 一杉 鶴作殿
五〇、〇〇〇 笠原 定藏殿
五〇、〇〇〇 矢代 代次殿
二〇、〇〇〇 小林録太郎殿
二〇、〇〇〇 笹野 榮吉殿
二〇、〇〇〇 清水真一郎殿
一五、〇〇〇 松山 義純殿
一〇、〇〇〇 宮本 うた殿
一〇、〇〇〇 佐野 文策殿
一〇、〇〇〇 佐藤隆太郎殿
一〇、〇〇〇 佐野忠三郎殿
一〇、〇〇〇 寺村 太吉殿
一〇、〇〇〇 藤井 太吉殿
一〇、〇〇〇 八木安太郎殿
一〇、〇〇〇 村上 佐市殿
一〇、〇〇〇 弦卷千代三殿
一〇、〇〇〇 大野 京治殿
一〇、〇〇〇 西垣 薫一殿
一〇、〇〇〇 石黒 才吉殿
一〇、〇〇〇 川合 堅次殿
一〇、〇〇〇 安達 支店殿
一〇、〇〇〇 松田 秀藏殿
一〇、〇〇〇 森本 一郎殿
一〇、〇〇〇 佐藤重五郎殿
一〇、〇〇〇 株式會社
一〇、〇〇〇 加賀商店殿
一〇、〇〇〇 佐々木忠兵衛殿
一〇、〇〇〇 川名和吉商店殿
一〇、〇〇〇 坂井 義夫殿
一〇、〇〇〇 新 潤次郎殿
一〇、〇〇〇 西村 忠一殿
一〇、〇〇〇 一杉 鶴作殿
一〇、〇〇〇 笠原 定藏殿
一〇、〇〇〇 矢代 代次殿
一〇、〇〇〇 小林録太郎殿
一〇、〇〇〇 笹野 榮吉殿
一〇、〇〇〇 清水真一郎殿
一〇、〇〇〇 松山 義純殿
一〇、〇〇〇 宮本 うた殿
一〇、〇〇〇 佐野 文策殿
一〇、〇〇〇 佐藤隆太郎殿
一〇、〇〇〇 佐野忠三郎殿
一〇、〇〇〇 寺村 太吉殿
一〇、〇〇〇 藤井 太吉殿
一〇、〇〇〇 八木安太郎殿
一〇、〇〇〇 村上 佐市殿
一〇、〇〇〇 弦卷千代三殿
一〇、〇〇〇 大野 京治殿
一〇、〇〇〇 西垣 薫一殿
一〇、〇〇〇 石黒 才吉殿
一〇、〇〇〇 川合 堅次殿
一〇、〇〇〇 安達 支店殿
一〇、〇〇〇 松田 秀藏殿
一〇、〇〇〇 森本 一郎殿
一〇、〇〇〇 佐藤重五郎殿
一〇、〇〇〇 株式會社
一〇、〇〇〇 加賀商店殿
一〇、〇〇〇 佐々木忠兵衛殿
一〇、〇〇〇 川名和吉商店殿
一〇、〇〇〇 坂井 義夫殿
一〇、〇〇〇 新 潤次郎殿
一〇、〇〇〇 久保支店殿
一〇、〇〇〇 遠藤 吉平殿
一〇、〇〇〇 保坂海運會社
一〇、〇〇〇 會社殿
一〇、〇〇〇 相川 四郎殿
一〇、〇〇〇 吉田 基殿
一〇、〇〇〇 太田義之助殿
一〇、〇〇〇 渡邊富吉商店殿
一〇、〇〇〇 長野德太郎殿
一〇、〇〇〇 喜多村吉二殿
一〇、〇〇〇 森 卯兵衛殿
一〇、〇〇〇 青塚喜七郎殿
一〇、〇〇〇 桂 武太郎殿
一〇、〇〇〇 片谷 勇藏殿
一〇、〇〇〇 白崎一二三殿
一〇、〇〇〇 鎌田 清三郎殿
一〇、〇〇〇 上野 久吉殿
一〇、〇〇〇 田中 仙吉殿
三圓宛
林正三郎殿○福井家殿○渡邊安雄殿
○藤谷儀八郎殿○栗林商船株式會社
函館出張所殿○太田末藏殿○佐々木淺吉殿○小山與四郎殿
二圓宛
吉田定久殿○山本弘一殿○新與三郎商店殿○今井定太郎殿○美馬史郎殿
○笹野富吉殿○大庭商店殿○川端石太郎殿○村上ツネ殿○石動谷商會殿
○木島松藏殿○三輪竹次郎殿
一圓宛
福田篤三郎殿○原恒吉殿○柴田惣十郎殿○和田治五郎殿○山本公次殿○原鎮太郎殿○福山助七殿

五〇 大島 虎雄殿

正誤

前號一、五〇〇、〇〇〇苦小牧金子元三郎殿トアルハ同小樽金子元三郎殿二訂正

沖繩縣

三圓宛

川上喜秀殿○山口保策殿

二圓宛

岸本民子殿○又吉オト殿○渡邊直子殿○大城兼義殿○山里永昌殿○屋嘉マカジ殿

一圓宛

伊波普猷殿○嘉數マヅル殿○城間恒加殿○藤井吳服店殿○富永實忠殿○揚長積殿○金城清松殿○山城高興殿○糸敷昌運殿○中馬政次郎殿○平岸磯次郎殿○青山藏吉殿○城間恒篤殿○鹽谷ウシ殿○城間恒有殿○香文德殿○喜内種次郎殿○澤田吳服店殿○新嘉喜ゴゼイ殿

臺灣

一〇、〇〇〇

白石熊一郎殿

朝鮮

一〇、〇〇〇

桑野 健次殿
鄭 燦 玉殿

滿洲

五〇、〇〇〇
一一、六〇〇

佐々木義山殿
荒井元四郎殿

五、〇〇〇 旅順高等女學校殿

支那

五〇、〇〇〇

遠藤 盛彌殿

二〇、〇〇〇

皆川 七郎殿

一、〇〇〇

増田 友壽殿

海外

一〇〇、〇〇〇

石田福二郎殿

一〇、〇〇〇

大久保繁雄殿

校外生

八四一、二五

本月分七百殿
七十一名殿

敢て校友諸君に懇ふ

故總長大隈侯爵逝いて茲に拾有一ヶ月、故侯記念事業部開始されて正に九ヶ月、幸ひにして故侯遺靈の庇護と、校友學生竝に一般同情者諸氏の熱烈なる援助に依り、我記念事業は開始以來漸次進捗し來り、今や豫定募集額の半を超過するに至りたるも、前途尙ほ甚だ遼遠の感なしとせず。百里を行くものは九十里を以て半ばとすとの古諺にして眞ならば、我が記念事業は未だ以て其の豫定の半ばにも達したるものといふ能はず。故侯の一年祭にして而して我記念事業の締切期日たる大正十二年一月十日が正に目睫の間に迫りたるを思へば、局に當事業に與るもの頗る焦心に禁えざるものあり。これ元より吾人不敏の致す所なりと雖も、唯夫れ當事業たる必成を期せざるべからざると同時に、偏に校友諸兄の特別なる援助に依るに非ずんば、到底所期の目的を達する能はざるを以て、茲に締切期日の切迫に當り、更に校友諸兄の發奮協力を望み、殊に本記念事業に對して未だ御申込の榮を得ざる校友諸君に對して、此際至急御申込あらんことを切望に禁えず。重ねて故總長の爲めに、將た母校早稻田學園の前途の爲めに、敢て校友諸君の愛校心に懇ふ。

大正十一年十二月

故總長大隈侯爵記念事業部

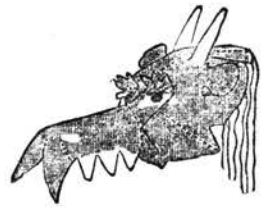
大正十一年十二月十日印刷
大正十一年十二月十日發行

編輯兼發行人 前田 多藏
東京市牛込區榎町七番地
印刷者 渡邊 八太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所 日清印刷株式會社
府下豊多摩郡戸塚町字下戸塚六
百四十七番地
早稻田大學
發行所 早稻田大學校友會

文學博士坪内逍遙先生著 小川治平氏畫
穴戸左行氏畫

家庭用兒童劇

美麗を極めた装釘(四六版)、色刷口繪、見返し繪、其他挿畫多數 定價貳圓貳拾錢 郵稅八錢



今はやる童話劇の多くは寧ろ**大人本位**です、それを演じるのも大抵大人か黒人の子供かです、此兒童劇は四五歳以上十三四歳までの子供達の爲に博士が**特に家庭用**として其高遠な教育的見地から書かれたものです、容易に**子供達自身で演ぜられます**、さうしてそれは單に無邪氣な遊戯を供するに止まらないで**品性の陶冶**ともなり**藝術的修養**ともなります、殊に手輕に**手製の出來る澤山の假面**を利用して**紅や白粉を塗らないで演ぜさせる**趣向に至つては、古今内外に**前例のない斬新な考案**です(尙附録として坪内博士の家庭用兒童劇に關する意見が發表されてゐます)

◆**兒童出演の可否** などは本兒童劇に對しては問題となりませんが、兒童出演の弊害を悉く除いたのが即ちこの**家庭用兒童劇**ですから。(小學校、女學校等に於ける公演の申込が多數ですから、今回學校内に於ける公演は、本出版部へ交渉次第承諾することにしました。)

附録——(畫用紙で自)二十餘種**假面の作方** 坪内博士指導 穴戸左行氏案

◆東京有樂座に於て其の七種を上演、好評噴々たる本兒童劇は、更に十二月下旬帝國劇場に於て五日間上演

館隆北・堂誠至・堂京東(實別) 部版出學大田稻早 込牛京東
野星・館文盛・堂海東 三二一—京東特振

名譽大賞牌受領
於和平紀念博覽會

特 契約高 四億餘萬圓
長 株式相互兩長所併有

皇
日本生命保險株式會社

本店 大阪市東區今橋四丁目七番地
支店所在地 東京、大阪、京都、名古屋
福岡、仙臺、金澤、廣島、京城



早稻田の代理部を信用して下さい

地質と云ひ 仕立と云ひ 恰好と云ひ 體裁と云ひ

此の値段では到底外では需められませぬ特價であります

特價と申しても世間並でいふ特價ではありません

當部特選眞劍の特價なのであります

マント (厚地 黒羅紗)

肩長頭巾附

背丈鯨尺 二尺八寸 金拾七圓五十錢
同 三 尺 金拾 八 圓
同 三尺二寸 金拾八圓五十錢

二重トンビ (霜降メ)

總甲斐絹裏

背丈鯨尺 三尺三寸 金貳拾四圓
同 三尺四寸 金貳拾五圓
同 三尺五寸 金貳拾六圓
(頭巾附一割増)

二重トンビ (純毛霜降メルトン)

總甲斐絹裏

背丈鯨尺 三尺三寸 金 廿
同 三尺四寸 金 參
同 三尺五寸 金 拾
同 三尺六寸 金 九
同 三尺五寸 金 二
同 三尺四寸 金 一
同 三尺三寸 金 圓
同 三尺二寸 金 圓
同 三尺一寸 金 圓
同 三尺 金 圓
同 二尺九寸 金 圓
同 二尺八寸 金 圓
同 二尺七寸 金 圓
同 二尺六寸 金 圓
同 二尺五寸 金 圓
同 二尺四寸 金 圓
同 二尺三寸 金 圓
同 二尺二寸 金 圓
同 二尺一寸 金 圓
同 二尺 金 圓
同 一尺九寸 金 圓
同 一尺八寸 金 圓
同 一尺七寸 金 圓
同 一尺六寸 金 圓
同 一尺五寸 金 圓
同 一尺四寸 金 圓
同 一尺三寸 金 圓
同 一尺二寸 金 圓
同 一尺一寸 金 圓
同 一尺 金 圓
同 九寸 金 圓
同 八寸 金 圓
同 七寸 金 圓
同 六寸 金 圓
同 五寸 金 圓
同 四寸 金 圓
同 三寸 金 圓
同 二寸 金 圓
同 一寸 金 圓
同 無寸 金 圓

當部取扱目録送呈

日用品必需

東京牛込早稻田大學出版部所屬



代理部

部

(電話番町三九二九番)
(振替東京六二二八五番)

(マント、トンビ共に送料内地金四十五錢臺榊・朝・滿金七十五錢)

主幹

東京高等師範
學校教授

岡倉由三郎先生

東京帝國大學
文學部教授

市河三喜先生

研究社

英文學叢書

豫約締切日期
十二月廿日限

第二輯會員募集

光榮と感激との導く一路へ!!

弊社曩に、我文化が英米に負ふ處多年而も其の精華にして魂の糧たる文學を閉却するを遺憾とし、岡倉市河兩先生主幹の下に「研究社英文學叢書」刊行を發表するや、忽ち江湖の視聽を集めて、學界及出版界空前の美譽とせられ、實に締切半ばにして豫定會員數を突破するの盛觀に逢へり。爾來、兩主幹及執筆各大家が學殖を傾けらる、獻身的努力と、弊社が此の光榮に副はんとする犠牲的努力とは月と共に加はる識認と讚辭との中に、遂に第一輯廿四冊九千四百頁は豫定頁數を超過する事一千頁なりしにも拘らず約定期限に完成配本せり。而も弊社の感激と歡喜とは一日の休息をも屑しとせず、切に兩主幹に請うて、茲に第二次事業に邁進するに至れり。識者諸賢、冀くは弊社の微意を諒とし、更に前輯に倍するの高願と聲援とを賜へ。

第一輯特別會員募集

本叢書第一輯廿四冊豫約は中途締切の止む無きを見たるも、其後電話、書面等にて頻に追加募集の要求を斷たず、因つて、弊社は茲に諸賢の高願に報いて、今回を限り特別會員募集を敢行す。只憾むらくは部數更に有限、且つ斯る機會の到來は、出版界恐らく之を最終とす可しと信す。冀くは各位、即決即刻御申込あれ。

體裁清雅

四六新形、池田藩伯裝幀、上等クロ
1ス優麗典雅、新録ポイント式活
字を用ひ印刷鮮明英米版を凌ぐ

會期一ヶ年

一、二輯共自大正十二年一月至同
年十二月完結、第一輯毎月二冊宛、
第二輯毎月一冊又は二冊宛

會費低廉

第一輯 一冊 拂最初中込金六圓、毎月
月六圓宛十一ヶ月間拂込
第二輯 一冊 拂最初中込金四圓、毎月
月四圓宛十一ヶ月間拂込

(送料毎月一、二輯共市内十二錢、地方廿七錢宛)

内容説明書

本叢書の内容見本文規
定を詳記せる美麗なる
冊子御申込次第進呈す

研究社英文學叢書部

東京市麴町區
富士見六丁目

振替口座
東京一〇六

東京一〇六

米國 **ストーン式洋服** と

羅紗地の販賣



羅沙地の暴落

直輸入品を直接お買上げになれば拾圓乃至拾五圓の節約となります

- オーバ地一着分 9,60 錢以上
- トンビ地一着分 12,80 錢以上
- 背廣地一着分 12,00 錢以上
- 制服地一着分 10,00 錢以上
- マント地一着分 11,00 錢以上

裁縫料及裏地及附屬品一切

にて

- オ ー バ 24,00 錢以上
- ト ン ビ 20,00 錢以上
- 背 廣 28,00 錢以上
- 制 服 大 人 用 20,00 錢以上
- マ ン ト 10,00 錢以上

市内は御来店下されば御選
定御自由地方は(十錢切手)
添御一報次第見本及寸法用
紙御發送致します。

東京牛込區鶴卷町電停前

ストーン商會 羅紗部 洋服部

電話番町一九八〇 振替東京三三五八三

早稻田大學報告

早稻田大學報告 第三百四拾四號 大正十一年十月十日發行

目次

第十三	第十二	第十一	第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
出版部	校友會	附屬工手學校	體育部	科外講演及特別講義	學生課	圖書館	社會計	得業生	學科課程	學科課程	教職員	學年間の重要事項

早稻田大學第九回報告

(自大正十年九月一日至同十一年三月卅一日)

維持員の改選並に學長理事監事の更迭

現在の有期維持員及び各役員は大正十年十月四日を以て任期満了せるに付き校規に基づき夫々推薦又は改選の結果左の如く決定せり

●評議員會選出の維持員

大正十年九月廿五日午後三時校規第十條第一號に依り恩賜館内に臨時評議員會を開き維持員の改選を行ふ

松平 會長 山田英太郎氏

昆田文次郎氏 内ヶ崎作三郎氏

杉山 重義氏 金澤種次郎氏

池田 龍一氏

銚衛の結果左記十四氏當選せり

平沼 淑郎氏(再) 鹽澤 昌貞氏(再)

淺野 應輔氏(再) 田中 穂積氏(再)

金子 馬治氏(再) 中島半次郎氏(再)

寺尾 元彦氏(新)

(以上七氏教授會選出評議員)

早速 整爾氏 渡邊 亨氏

浦邊 襄夫氏 上原 鹿造氏

松山忠二郎氏 増田 義一氏

宮田 脩氏

(以上七氏校友會選出評議員)

●維持員會の維持員推薦

大正十年十月四日午前十時麴町區富士見軒に於て定時維持員會を開き左記五氏を推薦せり

伯爵松平頼壽氏(再) 昆田文次郎氏(再)

山田英太郎氏(再) 砂川 雄峻氏(再)

阪本 三郎氏(新)

●維持員會々長の決定

右の維持員會に於て維持員會長大隈信常氏を再選す

●理事の決定

右の維持員會に於て互選の結果左の五氏當選重任と決し大正十年十一月一日登記を完了せり

田中 穂積氏 伯爵松平 頼壽氏

淺野 應輔氏 鹽澤 昌貞氏

平沼 淑郎氏

●學長の決定

右理事の決定と共に學長を互選せり

法學博士 鹽澤 昌貞氏

右の結果文部大臣は届出の日付を以て大正十年十二月十九日認可せられたり

●監事の決定

之に次ぎて更に互選に依り左の二氏監事に當選せり

宮田 脩氏 阪本 三郎氏

學長就任式

十一月三日午前十時中央校庭に於て教職員學生參列學長就任式を舉行す

高田名譽學長式辭を述べ先づ平沼前學長の功を頌して其の在任中の勞を深謝し次で新學長を紹介し鹽澤新學長の懇切なる挨拶ありたり

是より先き十月十八日午後には恩賜館會議室に於て教授助教講師一同に對し新舊學長より新任退任の挨拶あり續いて本部應接室に於て幹事副幹事以下事務主任一同に對しても同様挨拶ありたり

理事重任登記

改選の結果財團法人理事は何れも重任と決せるを以て其旨所轄區裁判所へ登記し大正十年十二月一日之れを完了せり

理事の事務分掌

別項記載の如く理事新任の結果左の如く掌務を擔當することとなる

教務及會計 平沼 淑郎氏

教務 淺野 應輔氏

庶務 伯爵 松平 頼壽氏

同 田中 穂積氏

教授會の學部長及評議員選舉

大正十年九月十七日午後一時校規第六十七條第二號に依り各學部教授會を開き校規第四十三條及第五十一條に依り學部長及評議員の改選を行へり其結果左の如し

●學部長

政治經濟學部長

第一候補者(當選) 安部 磯雄氏(再)

第二候補者 鹽澤 昌貞氏

第一候補者(當選) 寺尾 元彦氏(新)

第二候補者 遊佐 慶夫氏

文學部長 金子 馬治氏(再)

第一候補者(當選) 五十嵐 力氏

第二候補者 田中 穂積氏

商學部長 北澤新次郎氏

第一候補者(當選) 田中 穂積氏

第二候補者 北澤新次郎氏

理工學部 山本 忠興氏

第一候補者(當選) 德永 重康氏

第二候補者 山本 忠興氏

◎評議員 德永 重康氏

政治經濟學部 平沼 淑郎氏

五來 欣造氏 鹽澤 昌貞氏

安部 磯雄氏 内ヶ崎作三郎氏

法學部 橫田 秀雄氏

寺尾 元彦氏 中村 進午氏

中村 萬吉氏 遊佐 慶夫氏

文學部 金子 馬治氏 中島半次郎氏

五十嵐 力氏 片上 仲氏

橫山 有策氏

商學部 田中 穂積氏 杉山 重義氏

小林 行昌氏 北澤新次郎氏

高杉 瀧藏氏

理工學部 淺野 應輔氏 山本 忠興氏

沖 巖氏 小林 久平氏

早稻田大學報告

早稻田大學報告 第參百拾四號 大正十一年十二月廿日發行

目次

第十三	第十二	第十一	第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
出版部	校友會	附屬工手學校	體育部	科外講演及特別講義	學生課	圖書館	會計	得業生	學科課程	教職員	學年間の重要事項	

早稲田大學第卅九回報告

(自大正十年九月一日至同十一年三月卅一日)

維持員の改選並に學長理事監事の更迭

現在の有期維持員及び各役員は大正十年十月四日を以て任期滿了せるに付き校規に基き夫々推薦又は改選の結果左の如く決定せり

●評議員會選出の維持員

大正十年九月廿五日午後三時校規第十條第一號に依り恩賜館内に臨時評議員會を開き維持員の改選を行ふ

松平 會長

山田英太郎氏

昆田文次郎氏

内ヶ崎作三郎氏

杉山 重義氏

金澤種次郎氏

池田 龍一氏

銚衛の結果左記十四氏當選せり

平沼 淑郎氏(再)

鹽澤 昌貞氏(再)

淺野 應輔氏(再)

田中 穗積氏(再)

金子 馬治氏(再)

中島半次郎氏(再)

寺尾 元彦氏(新)

(以上七氏教授會選出評議員)

早速 整爾氏

渡邊 亨氏

浦邊 襄夫氏

上原 鹿造氏

松山忠二郎氏

増田 義一氏

宮田 脩氏

(以上七氏校友會選出評議員)

●維持員會の維持員推薦

大正十年十月四日午前十時麴町區富士見軒に於て定時維持員會を開き左記五氏を推薦せり

伯爵松平 頼壽氏(再) 昆田文次郎氏(再)

山田英太郎氏(再) 砂川 雄峻氏(再)

阪本 三郎氏(新)

●維持員會々長の決定

右の維持員會に於て維持員會長大隈信常氏を再選す

●理事の決定

右の維持員會に於て互選の結果左の五氏當選重任と決し大正十年十一月一日登記を完了せり

田中 穗積氏 伯爵松平 頼壽氏

淺野 應輔氏 鹽澤 昌貞氏

平沼 淑郎氏

●學長の決定

右理事の決定と共に學長を互選せり

法學博士 鹽澤 昌貞氏

右の結果文部大臣は届出の日付を以て大正十年十二月十九日認可せられたり。

●監事の決定

之に次ぎて更に互選に依り左の二氏監事に當選せり。

宮田 脩氏

阪本 三郎氏

學長就任式

十一月三日午前十時中央校庭に於て教職員學生參列學長就任式を舉行す

高田名譽學長式辭を述べ先づ平沼前學長の功を頌して其の在任中の勞を深謝し次で新學長を紹介し鹽澤新學長の懇切なる挨拶ありたり是より先き十月十八日午後には恩賜館會議室に於て教授助教講師一同に對し新舊學長より新任退任の挨拶あり續いて本部應接室に於て幹事副幹事以下事務主任一同に對しても同様挨拶ありたり

理事重任登記

改選の結果財團法人理事は何れも重任と決せるを以て其旨所轄區裁判所へ登記し大正十年十一月一日之れを完了せり

理事の事務分掌

別項記載の如く理事新任の結果左の如く掌務を擔當することゝなる

教務及會計 平沼 淑郎氏

教 務 淺野 應輔氏

庶 務 伯爵 松平 頼壽氏

同 田中 穗積氏

教授會の學部長及評議員選舉

評議員選舉

大正十年九月十七日午後一時校規第六十七條第二號に依り各學部教授會を開き校規第四十三條及第五十一條に依り學部長及評議員の改選を行へり其結果左の如し

●學部長

政治經濟學部長

第一候補者(當選) 安部 磯雄氏(再)

第二候補者 鹽澤 昌貞氏

法學部長 第一候補者(當選) 寺尾 元彦氏(新)

第二候補者 遊佐 慶夫氏

文學部長 第一候補者(當選) 金子 馬治氏(再)

第二候補者 五十嵐 力氏

商學部長 第一候補者(當選) 田中 穗積氏(再)

第二候補者 北澤新次郎氏

理工學部 第一候補者(當選) 山本 忠興氏

第二候補者 德永 重康氏

政治經濟學部 平沼 淑郎氏 鹽澤 昌貞氏

五來 欣造氏 内ヶ崎作三郎氏

安部 磯雄氏

法學部 橫田 秀雄氏 中村 進午氏

寺尾 元彦氏 遊佐 慶夫氏

中村 萬吉氏

文學部 金子 馬治氏 中島半次郎氏

五十嵐 力氏 片上 伸氏

橫山 有策氏

商學部 田中 穗積氏 杉山 重義氏

小林 行昌氏 北澤新次郎氏

高杉 瀧藏氏

理工學部 淺野 應輔氏 山本 忠興氏

沖 巖氏 小林 久平氏

能村 千別氏

總長大隈侯爵の薨去

大正十年三月頃主治醫稻田博士は特に注意せらるゝ所ありしが九月に至りて稍不快を覺へられ同二十六日遂ひに就床せられ其後一進一退の内に十月二、三日より食慾減退同二十日頃には深き警戒を要するに至りしも漸次快方に向はれたりしが十二月十日頃より再び逆變の兆あり日を追ふて益々不良となり稻田三浦兩博士共に力を效されしも翌年一月二日より食慾頓に衰へ病勢日に陰惡を加へ五日よりは遂に容態書を發表することゝなれり

超へて六日に及び病狀急變治療祈願共に其至誠を盡したりしも及ばず同月十日午前六時遂ひに薨去せられたり一月十日總長危篤の報天聽に達するや特旨を以て從一位に陞叙せられ菊花頸飾章を授け給へり

理事會及維持員會は侯爵家に於ける日比谷齋場の國民葬に對し校葬の禮を以て臨む事とし一月十七日其葬儀に際しては教職員學生及全國の校友を擧げて堵列送葬せり此が爲め理事會維持員會評議員會教授講師會並に校友幹事會等を招集し又臨時事務局を設けて鹽澤學長平沼理事前田幹事等連日連夜深更まで之れに參し力を併せて諸員を督勵し一月十日より同十九日迄臨時授業を休止し而して一方學生も亦其全快祈願に於て又葬送萬般に於て實に深甚なる美德を發揮したり國民葬當日は地方校友も續々上京して之れに參列し各地方に於ても亦其在郷校友専ら中心となりて到る處に官民合同の遙弔式行はれたり

超へて二月十九日校庭に於て大追悼會を舉

行し其夜永樂俱樂部に於て追悼晚餐會を催せり

學報三月號は故總長の遺徳を追慕するの意を以て特別號となし四月號を合して哀悼録を發刊せり

大隈侯爵邸の寄附並に故總長大隈侯爵記念事業

大正十一年二月初旬故總長の遺志に基き大隈信常侯より同邸宅庭園全部の寄附申出あり之れを以て二月二十日臨時維持員會を開き特に右交渉其他の爲め維持員中より代表者を定めて右の寄附を受くることに決すると共に之れを機とし茲に故總長の記念事業を企劃するの議を起し大正十一年三月二十日の定時維持員會に於て之れを決し高田名譽學長を其委員長に推し維持員評議員教職員校友會幹事は固より我學園關係の總動員にて該事業の必成を期することゝせり

右決定と共に其議を普く教職員評議員學生並に校友大會に報告し且つ一方知名の士に依りて故大隈侯爵記念事業後援會を組織し濠澤子爵其會長に擧げられたり

學部長主任會の新設

各方面授業の連絡を爲めに各學部長教務主任並に學科主任等に依り學部長主任會を設け學長理事幹事本部教務主任之れに參し毎月一回適時會合のこととし大正十一年十一月本部應接室に於て其第一回を開きたり

内容充實方針委員會の設立

大正十一年一月二十七日の定時維持員會に於て理事會の諮問機關として内容充實方針委員會なるものを設くる事に決定し左記四氏其委員に囑託せられ尙ほ贊助會幹事難波埋一郎氏を同會主事として其事務を幹することとせり

侯爵 大隈 信常 氏

高田 早苗 氏

坪内 雄藏 氏

市島 謙吉 氏

尙ほ學長理事は職務上右委員會に參加し幹事も亦事務上之れに與る

建築委員會の設立

大學各方面の建築に對し充分の監督を爲し以て其建築目的の間然する所無きを期する爲め大正十一年一月二十七日の定時維持員會に於て建築委員會を設け左の五氏其委員に囑託せられ尙副幹事土屋啓造氏主事として其事務を幹することとし學長理事高等學院長圖書館長は職務上之れに參加し幹事も亦事務上其事務に與ることゝせり

市島 謙吉 氏

阪本 三郎 氏

渡邊 亨 氏

佐藤 功一 氏

内藤 多仲 氏

別格制度の臨設

大正九年二月愈本大學の新大學令に依る大學の設立認可せらるゝ、や其新令の適用を受くる

は特に當時豫科在學(一、二年)の者よりする事に決せられたり然るに吾大學に於ては是より三年前即大正六年度に於て從來修業年限一ヶ年四ヶ月なりし豫科を延長して滿二ヶ年修了としたる結果大正八年四月大學部各學部第壹學年へ進級せる者(右認下當時大學部各學部第一學年在學中)は何れも新令適用を受くる豫科修了生と、全然同一課程を試みたるものなり然るに大學部卒業の曉に於て一方は大學卒業の稱號を有し從て社會に於ても相當の待遇を受くべきに對し他方は全然同等の課程を修めたるに拘らず此等の特典なきは甚だ遺憾なるを以て茲に各部當局と交渉の結果其諒解の下に特例を設け當時大學部第一學年生にして卒業の上稱號希望の者は其卒業年期を特に一年延長することとし大學は其の爲に特別設備を設くこととし即之れを同學年の右稱號を必要とせざる者(即順調に進みて大正十一年三月限り卒業する者)に對し區別して別格第一學年と稱せり即ち此の結果當時大學部第一學年在學生は名稱上單に大學部第壹學年と稱するもの(專門學校令に依る)別格第壹學年と稱するもの(新大學令に依る)とに區別せり尤も學科は別項學科課程に見る如く同一學課を修むるものなれ共過途時の特例として已むを得ざるものなり、

尙ほ右は只此の際に限りしものなるを以て大正十年度に於ては別格第二學年と稱し同十一年度に於ては別格第三學年と稱し大正十二年三月限りを以て前後とも消滅すべき特例たるなり

高等學院の組織變更

高等學院の組織變更

從來高等學院は之れを早稲田大學附屬早稲田高等學院第一部及び同第二部と稱し且つ學生も兩部共全部を第一部校舎に收容し來りしも大正十一年四月よりは之れを分離して

早稲田大學附屬第一高等學院
早稲田大學附屬第二高等學院
と改稱し第二高等學院は別項記載の如く別に新築の校舎に轉じ而て兩院長各左の通り囑任さる

早稲田大學附屬早稲田第一高等學院 院長 中島半次郎氏
早稲田大學附屬早稲田第二高等學院 院長 杉山 重義氏

尙野々村戒三氏は第一高等學院教頭とし定金右源二氏は第一高等學院事務主任兼第二高等學院事務主任として各囑任せらる

學費の引上

大正十年十二月十五日の臨時維持員會に於て左の如く學費の引上を決定す

大學部	年額	一二〇圓		
專門部	同	八五圓		
高等學院	同	一〇〇圓		
高等師範部	同	九五圓		
第一期	第二期	第三期		
大學部	五〇圓	四〇圓	三〇圓	計
專門部	三五圓	三五圓	一五圓	八五圓
高等學院	四〇圓	四〇圓	二〇圓	一〇〇圓
高等師範部	三五圓	三五圓	二五圓	九五圓

事務主任の式服制

大正十一年一月より各事務主任にも式服制を

設け之れを着用せしむること、せり

臨時人事係新設

一般得業生の就職に關する事務は從來主として庶務課に於て取扱るたるも近時同事務の彌繁劇を加へ而して又一方其重要な任務を帯び來れる等に鑑み茲に新に臨時人事係を新設し庶務理事直屬のこととし難波賛助會幹事片山主事其任に當り大正十年十二月十九日其事務を開始せり

文部省の補助金

大正十年十二月二十八日第四十三回帝國議會に於て議決せられたる七私立大學に對する補助金其第一年分金貳萬五千圓の交付を受く

海外留學派遣及歸朝

出發

理事商學部長法學博士田中穂積氏は大正十年九月二十一日東京驛を發し同日正午天洋丸にて横濱解纜歐米教育視察に赴かる
講師清水泰次氏は學術研究の爲め三月南支那へ出張又大正五年商科出身の長谷川安兵衛氏は會計學研究の爲め二ヶ年間歐米留學を命ぜられ大正十年十二月二日横濱解纜の熱田丸にて渡米せり

歸朝

野球外征團を率ひ渡米したる政治經濟學部長教授安部磯雄氏は九月九日歸朝せり
農業政策研究のため米國ウイスクンシン大學に在學中なりし留學生猪俣津南雄氏は大正十年十月三十日アフリカ丸にて歸朝す
大正十年三月出發外遊中の理學博士德永重康

氏は無事視察を終へ大正十年十二月二十一日神戸着の三島丸にて歸朝す

金融保險學研究の爲め米國コロンビヤ大學に留學中なりし小林新氏は大正十一年二月二十八日歸朝

經濟政策研究の爲め同じく米國ペンシルバニア大學留學中なりし島田孝一氏は大正十一年三月十日歸朝す

校醫醫學博士前田實氏は歐米學校衛生視察の爲め大正十一年三月卅一日出發

左記諸氏は前年度より引續き留學中

米國留學中	公法	中野登美雄氏
佛國留學中	社會學 教授	關 與三郎氏
佛國留學中	民事訴訟法	中村 宗雄氏
米國留學中	建築學 助教授	大澤 一郎氏
米國留學中	電氣學 教授	上田 大助氏
米國留學中	政治學行政學 植民政策	淺見 登郎氏
米國留學中	海法及國際私法	高井 忠夫氏
英國留學中	礦物學 教授	小室 靜夫氏
英國留學中	保險學	末高 信氏
米國留學中	電氣工學 教授	堤 秀夫氏
英國留學中	英文學 講師	日高 只一氏
英國留學中	機械工學 教授	松本 容吉氏
米國留學中	應用化學教授	富井 六造氏
米國留學中	建築學 教授	吉田 亨二氏
獨國留學中	經濟學 講師	二木 保幾氏

高等豫科長圖書館長及 工手學校長の重任

大正十年十二月の維持員會に於て左記諸氏何れも重任と決したり

高等豫科長 平沼淑郎氏
圖書館長 安部磯雄氏
工手學校長 德永重康氏

教職員の異動

大正十年九月二十六日名譽理事田中唯一郎氏逝去せらる

大正十年十月五日附學長平沼淑郎氏滿期退任理事鹽澤昌貞氏新に學長に當選就任せらる

大正十年十月十日教授五來欣造氏を水泳部長に教授神尾錠吉氏を山岳スキー部長に囑任す

大正十年十一月十九日教授杉山重義氏に高等豫科事務監督を囑託す

大正十年十一月十九日贊助會主事兼工手學校主事片山利久氏の兼任を解き高等豫科主事兼第二高等學院事務主任土屋詮教氏に工手學校主事を命じ高等豫科主事兼務とす

大正十年十一月十九日贊助會幹事難波理一郎氏同主事片山利久氏は臨時人事係兼務を命ぜらる

大正十年十二月一日維持員阪本三郎氏を短艇部長に囑託す

大正十年十二月九日工手學校主事兼第二高等學院事務主任兼高等豫科主事土屋詮教氏の第二高等學院事務主任の兼務を解く

大正十年十二月九日第一高等學院事務主任定金右源二氏に第二高等學院事務主任兼務を命ず

大正十一年一月二十三日教授杉山重義氏を第二高等學院長に囑任す

大正十一年一月二十三日工手學校主事兼高等豫科主事土屋詮教氏の兼務を解き事務員坂本隆昌氏同主事代理を命ぜらる

教授講師主事校醫及

師範の異動

左記諸氏新に囑任せらる

同	法學部	商行為擔任	同	理化學部	工學士 松井元太郎氏
同	理化學部	火藥學擔任	同	應用化學科專屬	工學士 中田 浩氏
同	高等學院	校醫	同	商學部 講師	早稲田 商學士 洪氏
同	高等學院	劍道師範(兼)	同	應用化學科專屬 科助手	山内眞三雄氏
同	柔道師範	同	同	理化學部	早稲田 都築 謙雄氏
同	劍道師範	同	同	電氣工學科專屬	工學士 吉田 豊吉氏
同	左記休講中の處復任せらる	同	同	法學部	法學士 大原 昇氏
同	教授 法學部	同	同	獨法	法學士 喜多壯一郎氏
同	教授 刑法擔任	同	同	專門部法 早稲田 法學士	工學士 牧 銳夫氏
同	講師 法學部	同	同	理化學部應用化學科 合成化學	工學士 龜山 直人氏
同	講師 刑注擔任	同	同	理化學部應用化學科 電氣化學	工學士 米元 晋一氏
同	高等學院教授	同	同	理化學部建築學科 給水排水	工學士 市川 繁彌氏
同	講師	同	同	理化學部建築學科 發電所	工學士 山内不二雄氏
同	高等學院教授	同	同	機械工學科力學	繁野 政瑞氏
同	講師	同	同	高等學院教授	ヘルマンジョーシ
同	講師	同	同	高等學院教授	スベンサー氏
同	講師	同	同	工業簿記	リオ子ルジョヨシ
同	講師	同	同	電氣工學	早稲田 和田 清氏
同	講師	同	同	齒醫學及應用齒學	工學士 山本 五郎氏
同	講師	同	同	製造化學(芳香油)	理學士 岡田要之助氏
同	講師	同	同	銀行及貨幣統計學	工學士 永井彰一郎氏
同	講師	同	同	交通經濟	早稲田 小林 新氏
同	講師	同	同	商業經濟	早稲田 島田 孝一氏

同	法學部	推津 盛一氏
同	理化學部	西松 唯一氏
同	高等學院	上石留五郎氏
同	柔道師範	高野佐三郎氏
同	劍道師範	三船 久藏氏
同	左記休講中の處復任せらる	齋村 五郎氏
同	教授 法學部	柳川 勝二氏
同	教授 刑法擔任	清水 行恕氏
同	講師 法學部	相良 守峯氏
同	講師 刑注擔任	長谷川鐵次郎氏
同	高等學院教授	ジーマン氏
同	講師	三淵 忠彦氏
同	講師	日々野信一氏
同	講師	甲斐 秀雄氏
同	講師	野村 正雄氏
同	講師	上野 景明氏
同	講師	新田修三郎氏
同	講師	野口 尙一氏
同	講師	井上 克己氏
同	講師	長竹 信次氏
同	講師	關野 九郎氏
同	講師	重光 簇氏
同	講師	岡田 純三氏
同	講師	講師矢津昌永氏は大正十一年二月四日逝去せられたり

同	地方校友會選出	山田 甫氏(新)
同	福井縣校友會選出	伴野 賢造氏(重)
同	靜岡縣 同	並河 正氏(重)
同	鳥根縣 同	田手 喜市氏(新)
同	宮城縣 同	野村勘左衛門氏
同	滿期退任せられしは	
同	福井縣校友會	
同	教授會選出	
同	大正十年九月十七日再選重任せられたるは	
同	左の如し	
同	鹽澤 昌貞氏(再)	
同	五來 欣造氏(新)	
同	安部 磯雄氏(再)	
同	平沼 淑郎氏(再)	
同	内ヶ崎作三郎氏(再)	
同	田中 穂積氏(再)	
同	杉山 重義氏(再)	
同	高杉 瀧藏氏(再)	
同	小林 行昌氏(再)	
同	北新次郎氏(再)	
同	横田 秀雄氏(再)	
同	中村 進午氏(再)	
同	寺尾 元彦氏(再)	
同	遊佐 慶夫氏(再)	
同	中村 萬吉氏(再)	
同	片上 仲氏(再)	
同	中島半次郎氏(再)	
同	五十嵐 力氏(再)	
同	金子 馬治氏(再)	
同	横山 有策氏(再)	
同	山本 忠興氏(再)	
同	沖 巖氏(新)	

本期中囑任せられたる評議員は左の如し

維持員會推薦

小林 久平氏(再)
能村 千別氏(新)
淺野 應輔氏(再)
浮田 和民氏(再)
松平 康國氏(再)
牧野謙次郎氏(再)
永井 一孝氏(再)
内藤 多仲氏(新)
増田 義一氏(再)
杉田 駿氏(再)
菊地三九郎氏(再)
早速 整爾氏(再)
渡邊 亨氏(再)
中村房次郎氏(再)

大正十一年九月二十五日校規第十條第一號に依り臨時評議員會を恩賜館内に開き評議員會選出維持員改選を行ふ

大正十一年一月十日午後二時臨時評議員會を開き總長御危篤の報告及び其他重要な協議をなしたり

大正十一年三月十八日午後一時評議員會例會を恩賜館第二會議室にて開催學長より前年中の學事及會計狀況を報告し次で高田名譽學長は故大隈侯爵邸寄附の願末並に故總長の記念事業の趣旨計畫等に關して詳密なる説明を試みられ全員事業の趣旨を諒とするのみならず戮力以て其實現を期する事に一致したり

大隈維持員會々長の襲爵

大正十一年一月三十日附贈爵仰付られ同時に貴族院令に依り同院議員に列せらる。

澁澤基金管理委員長

の渡米

澁澤子爵には日米親善の爲め渡米せらるゝに、つき大隈總長には特に十月四日富士見軒に於て送別午餐會を催されしが愈十月十三日正午横濱解纜の春洋丸にて出發せられ翌十一年一月十日コレヤ丸にて無事歸朝せられたり

校舎の新築及移轉

●高等豫科教室の移轉

本館(二階建)は恰も一回轉をなして約十五間東北隅に移り後方の三階建は十間北方に轉じ大正十年十月十日其工を竣れり

●圖書館の移轉

御大典記念事業たる圖書館を中心とせる大研究室建築の第一着手として先づ其敷地整備の爲め閱覽室及附屬事務室を移轉することとなり政法教室と稍平行の形を取り大正十年十月十日其工を竣れり

●第一高等學院體育場の新築

主として柔劍道々場として平家建一棟(建坪八十四坪五合)を同運動場南東隅の綠樹蒼鬱たる澄りに建て大正十年九月十五日落成せり之れに依り學院學生の體育上に資せられたるは言ふ迄もなく尙更に構内風致の上にも更に趣を加へたるを覺ゆ

●第一高等學院正門及塀の新築

全部天然石及鐵筋コンクリートを以てし道路

に面する全長九十二間餘にして大正十年十月十五日竣成せり

相撲部道場の新築

木造構建二十五坪(グラウンド西南高地弓衛部道場前) 大正十年十月竣成す

華盛頓大學野球團の遠征

野球團の招待に依り九月九日一行十五名來朝九月十六日に小栗飛行將校の我國最初の飛行始球式に依る仕合を第一回とし慶應大學野球部とも合し前後七回に互りて競技をなし更に本大學野球團と共に京阪九州地方に赴き數回の仕合をなし 月 日出發歸國の途に就けり

出版部創業三十五年記念

同部は大正十年十月を以て創立恰も三十五年に相當し而も逐年其隆盛を見現に講議録購讀者十五萬に上り創業以來の修學者は八十萬乃至百萬人に達すと稱せらるこれを以て同部に於ては祝賀を兼ね記念として十月三日帝國ホテルに於て其特別關係者及新聞記者等を招待記念祝賀會を催し又同十七日には大阪中ノ島公會堂に於て關西に於ける講讀者の爲に記念講演會及校外生大會を催したり

出版部の女子講義錄發行と聽講生受驗資

格特許

出版部は大正十一年四月より女學講義錄を發

行すること、なり其の優良なる卒業生には本大學聽講生たる受驗資格を有せしむることとしたり

諸催會

- △ポオドレル誕生一百年祭
- 文學部佛蘭西文學會主催にて大正十年十一月六日午後一時大講堂に開催す
- △新舊學長送迎會
- 本大學教職員主催にて大正十年十一月十九日永樂俱樂部に開催す
- 維持員評議員及校友會幹事發起にて大正十年十二月十九日午後五時芝紅葉館に於て開催す
- 平沼前學長慰勞會
- △ホイットマン三十年祭
- 大正十年三月二十六日恩賜館第二會議室に開催す
- △大隈總長の田中理事送別會
- 大正十年九月十八日正午總長邸に開催
- △評議員懇親會
- 大正十年九月廿五日午後六時富士見軒に開催
- △總長の澁澤子爵送別及新舊維持員招待會
- 大正十年十月四日正午富士見軒に開催
- △文部大臣の學生招待
- 大正十年九月 日午後文部大臣は先程皇太子殿下御歸朝を横濱に奉迎せしめたる全國各官私大學高等學校代表學生を小石川植物園に招待茶話會を催せり
- 尙翌四日には全國青年團代表者と共に賢所をも拜觀せり

●法學部法律答案練習の設立

法學部の爲め判檢事辯護士及高等文官受驗志望者の便宜の爲め法律答案練習會を創設し模

擬試験を行へり

●機械工學部後援會の創立

理學部機械學科の設備充實を助けん爲めに本年より同學科出身の校友有志に依り後援會を組成せり

●高等學院父兄保證人會

大正十年十月十六日午前九時同院學生控所に舉行學長同院長、挨拶あり次て構内一般の設備を觀覽せしめ更に學生の諸催を隨意展觀せしむ

△擬國會 第三十四回

大正十年十一月二十七日午前九時講堂に開催す

△訴訟演習

法學部の訴訟演習は久しく中絶の姿なりしも大正十年十一月十二日第二十教室に於て行ひたり

各休暇及臨時休校

- 臨時休業 大正十年九月三日 皇太子殿下御歸朝につき敬意を表する爲め
- 臨時休業 大正十年九月八日東京市の皇太子殿下御歸朝祝賀會につき
- 秋季休業 自大正十年十月十五日至同廿二日
- 冬季休業 自大正十年二月廿六日至大正十一年一月七日
- 臨時休業 大正十一年一月十日總長の御病氣危篤につ

き臨時授業を休止し翌十一日より十九日まで故總長の喪に服する爲め

○臨時休業

大正十年二月九日故山縣公爵の國葬の爲め廢朝仰せ出されしを以て謹で休業す

授業終了及試験

●大學部政法商の各科第三學年及び專門部政法の第三學年——大正十年十二月三日授業終了同月十二日より卒業試験施行

●大學部政法商の別格第二學年——十二月三日授業終了同月十三日より進級試験施行

●高等豫科第二學年及び第一第二高等學院各學年十二月十七日授業終了同月廿日より廿四日まで第二學期試験施行

●未了試験施行

●大政大法大商各第一學年末試験を十二月廿一日より廿四日まで施行

新學年入學試験期日及事務開始

○新學年入學試験期日

專門部政治經濟科及び商科の新學年入學試験は大正十一年四月五日より同七日までに施行す猶專門部法科及び高等師範部に於ては中學校卒業生を詮衡の上入學せしむ

第一高等學院入學試験期日
自大正十一年三月廿九日
至 同月卅一日

第二高等學院新入學試験期日
自大正十一年四月一日
至 同月四日

△入學事務受附

新學年入學事務の受附は大正十一年三月十五日より開始す

第二教職員(大正十一年三月)

本部

學長理事

法學博士 鹽澤昌貞

物理部	松平頼壽	物理部	淺野應輔
法學部	平沼淑郎	法學部	田中穂積
會計監督	阪本三郎	會計監督	宮田脩
幹事	前田多藏	幹事	難波理一郎
副幹事	土屋啓造	副幹事	蠣崎敏雄
課務主任	中村芳雄	課務主任	望月嘉三郎
臨時人事係	片山利久	學生課主任	金子馬治
政治經濟學	安部磯雄	文學部部長	山本忠興
法學部部長	田中穂積	工學部部長	北澤新次郎
法學部部長	寺尾元彦	商學部部長	遊佐慶夫
專門部部長	五尾欣彦	專門部部長	永井一孝
專門部部長	小島行昌	高等師範部	杉山重義
專門部部長	林行昌	事務主任	阪本隆昌
編輯及講演部	內ヶ崎作三郎	事務主任	定金右源二

◎維持員

會長	大隈信常	市島謙吉	早速整爾	渡邊亨
候爵	金子馬治	高田早苗	田中穂積	坪内雄藏
	中島半次郎	上原鹿造	浦邊襄夫	山田英太郎
	松平頼壽	増田義一	松山忠二郎	昆田文次郎

寺尾元彦 淺野應輔 阪本三郎 三枝守富
 宮田脩 子爵 澁澤榮一 鹽澤昌貞 平沼淑郎
 砂川雄峻

◎基金管理委員

管理委員長 澁澤榮一 原富太郎 大橋新太郎
 子爵 內藤久寬 村井吉兵衛 安田善三郎
 男爵 露森村開作

◎名譽教職員

名譽學長 高田早苗 名譽教授 坪内雄藏 名譽理事 市島謙吉
 法學博士

◎理工學部商議員

工學博士 高松豐吉 竹内明太郎

◎教授、講師、助教授

法學博士	岩田一郎	五十嵐力
早稻田大學	伊地知純正	服部文四郎
文學士	本多淺治郎	德永重康
文學士	富田逸二郎	富井六造
文學士	岡田信一郎	沖子馬治
工學士	渡部寅次郎	金子馬治
工學士	神尾錠吉	桂五十郎
工學士	勝俣銓吉郎	片上伸
法學博士	橫田秀雄	吉江喬松
工學士	吉田享二	橫山有策
商學部長	田中穂積	田中不二
農學士	武信由太郎	高橋清吾

ドクトル、オプ、
フイロソフイ

工學士
高杉瀧藏

法學博士
竹中二郎

早稻田大學
副島義一

早稻田大學
堤秀夫

法學博士
中村進午

高等師範部
永井一孝

工學士
内藤多仲

工學士
内ヶ崎作三郎

理學士
氏家謙曹

工學士
上田大助

早稻田大學
野村堅

早稻田大學
山ノ内弘

工學士
山岸光宣

工學士
松本容吉

工學士
松平康國

理學士
増田藤之助

理學士
牧野鑑造

藤野了祐

小林行昌

五來欣造

遠藤隆吉

淺野應輔

青柳篤恒

菊池三九郎

紀淑雄

北澤武雄

宮井安吉

志賀重昂
平沼淑郎

工學士
民野雄平

早稻田大學
武田豐四郎

早稻田大學
津内左右吉

早稻田大學
中田浩

早稻田大學
中島半次郎

中桐確太郎

法學士
中村萬吉

法學博士
浮田和民

文學士
梅若誠太郎

探礦冶金學科
主任工學士
能村千別

工學士
山本忠興

工學士
柳川勝二

工學士
松井元太郎

工學士
牧野菊之助

工學士
牧野謙次郎

工學士
前橋孝義

史學科主任
煙山專太郎

應用化學科主任
小林久平

工學士
小室靜夫

今和二郎

寺尾元彦

早稻田大學法學士
政治經濟學部長
安部磯雄

早稻田大學
佐藤功一

岸本能武太

北澤新次郎

遊佐慶夫

鹽澤昌貞
澁澤元治
樋口清策

早稻田大學
關與三郎

早稻田大學
杉山重義

早稻田大學
杉森孝次郎

第二高等學院長
文
講師

工學博士
伊東忠太

文藝博士
市村瓊次郎

理學士
今村恭太郎

文藝士
池田清

農學博士
橋本傳左衛門

法學士
西松唯一

文藝士
保科孝一

アスター、オ
ベニン、ホッ
理學士
富永齋

法學博士
小原溫

法學士
大原昇

文藝博士
大瀨甚太郎

理學士
岡田要之助

工學士
越智誠二

工學士
大島義清

工學士
大久保常正

法學士
小田内通敏

法學士
大森洪太

商學士
渡部明

法學士
渡部俊治

法學士
神谷健夫

法學博士
河津暹

早稻田大學
吉田源次郎

工學士
吉田謹平

法學博士
鈴木喜三郎

法學博士
杉田金之助

早稻田大學
井上誠一

早稻田大學
市川繁彌

早稻田大學
伊藤康安

早稻田大學
出井盛之

早稻田大學
馬場哲哉

早稻田大學
西村眞次

理學士
本田親二

早稻田大學
本間久雄

工學士
兵藤藤吉

工學士
張忠一

工學士
小穴秀一

文藝士
大隈信常

文藝士
岡田正美

文藝士
尾上八郎

法學博士
岡田朝太郎

アスター、オ
早稻田大學
大東直太郎

早稻田大學
岡村千曳

法學士
岡田正孝

法學士
岡田純三

理學士
和田清

工學士
和山直人

法學博士
龜山克彦

農學士
香川冬夫

工學士
吉原重威

工學士
米元晋一

◎附屬早稻田第二高等學院

●教授

第一高等學院長 中島半次郎

教頭 野々村戒三

早稻田大學文學士 伊藤康安

早稻田大學文學士 長谷川慶三郎

文學士 西村眞次

文學士 岡次郎

文學士 川合孝太郎

文學士 河野與一

農學士 香川冬夫

文學士 吉川秀雄

早稻田大學文學士 吉江喬松

文學士 高見豐

文學士 中桐確太郎

文學士 中城陟

文學士 梅若誠太郎

早稻田大學文學士 窪田通治

文學士 山口剛

文學博士 山岸光宣

文學士 牧野謙次郎

文學士 松永永材

文學士 藤野了祐

法學士 五來欣造

第二高等學院長

國語學科主任

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

杉山重義

五十嵐力

飯田敏雄

秦孝道

富田逸二郎

渡俊治

勝俣詮吉郎

影山千萬樹

片上伸

吉田源次郎

高谷實太郎

民野雄平

中村仲

内ヶ崎作三郎

久松廉吾

山崎貞

矢口達

前橋孝義

松島鉦四郎

深澤由次郎

舟木重信

●講師

文學士 菊池三九郎

文學士 清水泰次

文學士 石井信二

早稻田大學文學士 馬場哲哉

早稻田大學文學士 梶島二郎

早稻田大學文學士 平尙明

早稻田大學文學士 外岡茂十郎

早稻田大學文學士 中村萬吉

早稻田大學文學士 崎田喜太郎

早稻田大學文學士 北澤新次郎

早稻田大學文學士 南晴耕

早稻田大學文學士 井上辰九郎

早稻田大學文學士 池田龍一

早稻田大學文學士 原嘉道

早稻田大學文學士 橋本良藏

早稻田大學文學士 大橋誠一

早稻田大學文學士 沖誠巖

早稻田大學文學士 金子馬治

早稻田大學文學士 川井正進

早稻田大學文學士 高杉瀧藏

理學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

早稻田大學文學士

池田清

原久一郎

吉田彌六

高橋善吉

土橋仁之進

山本勇造

江間道助

佐野學

衣川義雄

井上要

石原善三郎

羽田智證

德永重康

小野駿一

渡邊惣衛門

嘉納虎太郎

金澤種次郎

田手喜一

谷村一太郎

内藤多仲

◎評議員

會長 伯爵

松平頼壽

井上廣居

石黒大次郎

埴原正直

伴野賢三

小山溫

若林成昭

川井正進

高杉瀧藏

井上辰九郎

池田龍一

原嘉道

橋本良藏

大橋誠一

沖誠巖

金子馬治

片上伸

高根義人

五十嵐力

石井政吉

早速整爾

西尾謙吉

小川爲次郎

渡邊亨

上遠野富之助

柏原文太郎

田中穂積

井上要

石原善三郎

羽田智證

德永重康

小野駿一

渡邊惣衛門

嘉納虎太郎

金澤種次郎

田手喜一

内藤多仲

◎早稻田大學教授、講師、助教現在表 (大正十一年三月三十一日)

學科名稱	教授	講師	師	助教	授	計
政治經濟學部	一九	一八	一八			三七
法學部	一一	九	九			二一
文學部	二〇	二一	二一			四一
商學部	一六	一一	一一			二八
理工學部	二四	四五	四五	二三		九一
政治經濟學科	一八	二九	二九			四七
法學科	一一	二一	二一			三三

中村進午	中島半次郎	永井一孝	中桐確太郎
中野禮四郎	中川末吉	中村康之助	中村萬吉
中村祐吉	中村房次郎	中野鐵平	並川正
浮田和民	内ヶ崎作三郎	上原鹿造	浦邊襄夫
野間五造	能村千別	栗山資四郎	山田英太郎
山田甫	山本忠興	山澤俊夫	山本慎平
松田謹一郎	松平康國	町田忠治	牧野謙次郎
增田義一	松山忠二郎	松川駒次郎	前橋孝義
男爵 前島彌	松井郡治	松澤知司	松村謙三
增子喜一郎	藤井健治郎	降旗元太郎	福島武之助
昆田文次郎	小林行昌	小林久平	小山松壽
小竹文次郎	五來欣造	寺尾元彦	淺野應輔
安部磯雄	齋藤和太郎	齋藤隆夫	坂本三郎
菊池三九郎	北澤新次郎	岸本市太郎	遊佐慶夫
宮田倫	三宅雄二郎	水野正己	南方常楠
鹽澤昌貞	莊保勝藏	平沼淑郎	平田讓衛
久富久吉	廣井一	森田卓爾	關和知
砂川雄峻	杉山重義	杉田駿	鈴木寅彦
鈴木茂雄			

◎早稻田大學職員現在表 (大正十一年八月三十一日)

職名	職員	事務員	助手及電工	手交換及電話	巡視及夜警	職工	給仕	小使	計
文學科	一八								一八
商科	一四								一四
理工科	二七								二七
專門部政治經濟科	一五								一五
同法律科	八								八
同商科	七								七
高等師範部	一四								一四
第一高等學院	五三								五三
第二高等學院	一九								一九
附屬工手學校	二九六								二九六
計	二九六	四三九	八三	四二	七七七				二四六

備考本表教授助教及講師數は延人員なり

備考本大學維持員二十五名、評議員百十七名は本表以外とす

第三 學科課程

(大正十一年三月)

大學各學部

政治經濟學部

政治學科

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		憲法 政治學 法學 三	行政法 政治學 法學 三	政治哲學 政治學 法學 二
選擇科目		經濟學原理 法史 法理 三 政治學(英書) 法史 法理 三	財政學 政治學 法史 二 最近政治學 法史 二 特殊政治學 法史 二	國際法 行政法 政治學 二 近世外交史 政治學 二 國際公法 政治學 二
隨意科目		國語 四	國語 四	國語 四
特別講義		特別講義 四	特別講義 四	特別講義 四
特別講義		特別講義 四	特別講義 四	特別講義 四

政治學科別格三學年

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		憲法 政治學 法學 三	行政法 政治學 法學 三	政治哲學 政治學 法學 二
選擇科目		經濟學原理 法史 法理 三 政治學(英書) 法史 法理 三	財政學 政治學 法史 二 最近政治學 法史 二 特殊政治學 法史 二	國際法 行政法 政治學 二 近世外交史 政治學 二 國際公法 政治學 二
隨意科目		國語 四	國語 四	國語 四
特別講義		特別講義 四	特別講義 四	特別講義 四
特別講義		特別講義 四	特別講義 四	特別講義 四

經濟學科

早稻田大學報告(大正十一年十二月)

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		憲法 政治學 法學 三	財政學 政治學 法學 四	經濟學 政治學 法學 二
選擇科目		經濟學原理 法史 法理 三 政治學(英書) 法史 法理 三	貨幣及銀行論 工業政策及社會政策 法史 二 統計學 法史 二 特殊政治學 法史 二	國際法 行政法 政治學 二 近世外交史 政治學 二 國際公法 政治學 二
隨意科目		國語 四	國語 四	國語 四
特別講義		特別講義 四	特別講義 四	特別講義 四
特別講義		特別講義 四	特別講義 四	特別講義 四

經濟學科別格三學年

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		憲法 政治學 法學 三	財政學 政治學 法學 四	經濟學 政治學 法學 二
選擇科目		經濟學原理 法史 法理 三 政治學(英書) 法史 法理 三	貨幣及銀行論 工業政策及社會政策 法史 二 統計學 法史 二 特殊政治學 法史 二	國際法 行政法 政治學 二 近世外交史 政治學 二 國際公法 政治學 二
隨意科目		國語 四	國語 四	國語 四
特別講義		特別講義 四	特別講義 四	特別講義 四
特別講義		特別講義 四	特別講義 四	特別講義 四

法學部

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		憲法 民法 刑法 三	民事訴訟法 民法 三	商事訴訟法 民法 四
選擇科目		經濟學 法史 法理 三 政治學(英書) 法史 法理 三	貨幣及銀行論 工業政策及社會政策 法史 二 統計學 法史 二 特殊政治學 法史 二	國際法 行政法 政治學 二 近世外交史 政治學 二 國際公法 政治學 二
隨意科目		國語 四	國語 四	國語 四
特別講義		特別講義 四	特別講義 四	特別講義 四
特別講義		特別講義 四	特別講義 四	特別講義 四

一 政治經濟學部ニ於ル選擇科目數ハ各第二學年ハ二科目、各第三學年ハ三科目トス
一 第二外國語ハ獨逸語、佛蘭西語、露西亞語及支那語トシ其一ヲ選擇セシム

科目/學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目	心學 二 西理學 三 東洋哲學史(支那) 二 西洋哲學史(支那) 二 哲學概論 二 文藝學 二	倫理學 二 西洋哲學史 二 美哲學史 二 西理學 二 西洋哲學(心理學) 二 文藝學 二	哲學通論 二 社會通論 二 西洋哲學(哲學研究) 二 卒業論 二
隨意科目	外國法(獨法、英法) 二 經濟原論 三	刑事訴訟法 二 外國法(獨法、英法) 二 法學實習 四	外國法(獨法、英法) 二 法學實習 六
選擇科目	國際公法 三 社會學 二	羅馬法 二 行政法 三	國際私法 二 破產法 二
特別講義	特別講義	特別講義	特別講義

文學部

哲學科

東洋哲學專攻

一 法學部ニ於ケル選擇科目數ハ各學年ヲ通シテ四科目トス
一 外國法ハ獨法英法及佛法中其一ヲ選擇セシム

科目/學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目	心學 二 西理學 三 東洋哲學史(支那) 二 西洋哲學史(支那) 二 哲學概論 二 文藝學 二	倫理學 二 西洋哲學史 二 美哲學史 二 西理學 二 東洋哲學(印度學) 二 文藝學 二	哲學通論 二 社會通論 二 東洋哲學(印度學) 二 卒業論 二
隨意科目	第二外國語(獨逸語、佛蘭西語) 四	第二外國語(同上) 四	第二外國語(同上) 四

西洋哲學專攻

科目/學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目	心學 二 西理學 三 東洋哲學史(支那) 二 西洋哲學史(支那) 二 哲學概論 二 文藝學 二	倫理學 二 西洋哲學史 二 美哲學史 二 西理學 二 西洋哲學(心理學) 二 文藝學 二	哲學通論 二 社會通論 二 西洋哲學(哲學研究) 二 卒業論 二
隨意科目	第二外國語(獨逸語、佛蘭西語) 四	第二外國語(同上) 四	第二外國語(同上) 四

科目/學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目	心學 二 西理學 三 東洋哲學史(支那) 二 西洋哲學史(支那) 二 哲學概論 二 文藝學 二	倫理學 二 西洋哲學史 二 美哲學史 二 西理學 二 社會學 二 經濟學 二 文藝學 二	哲學通論 二 社會通論 二 統計學 二 近世社會問題 二 卒業論 二
隨意科目	第二外國語(獨逸語、佛蘭西語) 四	第二外國語(同上) 四	第二外國語(同上) 四

社會哲學專攻

文學部哲學科別格第三學年(第三學年ハ必修科目五科目)

科目	西洋哲學	印度哲學	佛典研究	支那思想史	第二外國語(科目選擇)
科目	西洋哲學	印度哲學	佛典研究	支那思想史	第二外國語(科目選擇)
科目	西洋哲學	印度哲學	佛典研究	支那思想史	第二外國語(科目選擇)
科目	西洋哲學	印度哲學	佛典研究	支那思想史	第二外國語(科目選擇)

哲學科選擇科目

數論學 二	宗敎史 二	國制史 二	財政學 二	英政學 二	佛典研究 二
教育學 二	人類學 二	東洋史 二	經濟思想史 二	文藝學 二	獨逸文學 二
教育學及教授法 二	美術史 二	西洋史 二	外國文學 二	佛蘭西文學 二	獨逸文學 二

文學科

國文學專攻

科目/學年	必修科目	隨意科目
第一學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 三 國文學概論 二 國文學研究 二 文學研究 六	第二外國語(獨逸語) 四 <small>(佛蘭西語 露西亞語)</small>
第二學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 國文學研究 八 文學研究 二	第二外國語(同上) 四
第三學年 業每時週數授	倫理學 二 美學 二 國文學 八 卒業論文 二	第二外國語(同上) 四

支那文學專攻

科目/學年	必修科目	隨意科目
第一學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 三 支那文學概論 二 支那文學研究 二 支那文學研究 六	第二外國語(獨逸語) 四 <small>(佛蘭西語 露西亞語)</small>
第二學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 支那文學研究 二 支那文學研究 六	第二外國語(同上) 四
第三學年 業每時週數授	倫理學 二 美學 二 支那文學 八 卒業論文 二	第二外國語(同上) 四

英文學專攻

科目/學年	必修科目	隨意科目
第一學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 三 英文學概論 二 英文學研究 二 英語學(英作文) 六	第二外國語(獨逸語) 四 <small>(佛蘭西語 露西亞語)</small>
第二學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 英文學研究 八 英語學(英作文) 二	第二外國語(同上) 四
第三學年 業每時週數授	倫理學 二 美學 二 英文學 八 卒業論文 二	第二外國語(同上) 四

佛蘭西文學專攻

科目/學年	必修科目	隨意科目
第一學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 三 佛蘭西文學概論 二 佛蘭西文學研究 六 佛蘭西語學 四	第二外國語(獨逸語) 四 <small>(佛蘭西語 露西亞語)</small>
第二學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 佛蘭西文學研究 六 佛蘭西語學 四	第二外國語(同上) 四
第三學年 業每時週數授	倫理學 二 美學 二 佛蘭西文學 六 卒業論文 四	第二外國語(同上) 四

獨逸文學專攻

科目/學年	必修科目	隨意科目
第一學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 三 獨逸文學概論 二 獨逸文學研究 六 獨逸語學 四	第二外國語(獨逸語) 四 <small>(佛蘭西語 露西亞語)</small>
第二學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 獨逸文學研究 六 獨逸語學 四	第二外國語(同上) 四
第三學年 業每時週數授	倫理學 二 美學 二 獨逸文學 六 卒業論文 四	第二外國語(同上) 四

露西亞文學專攻

科目/學年	必修科目	隨意科目
第一學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 三 露西亞文學概論 二 露西亞文學研究 六 露西亞語學 四	第二外國語(獨逸語) 四 <small>(佛蘭西語 露西亞語)</small>
第二學年 業每時週數授	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 露西亞文學研究 六 露西亞語學 四	第二外國語(同上) 四
第三學年 業每時週數授	倫理學 二 美學 二 露西亞文學 六 卒業論文 四	第二外國語(同上) 四

文學部文學科別格第三學年

別格第三學年科目ハ各分科科目中ヨリ專攻五科目
選擇科目二科目以上ヲ選ブベキモノトス

文學科選擇科目

心理學	支那哲學	印度哲學	佛典研究
西洋哲學	教育學及教授法	宗敎學	佛典研究
社會學	近世社會問題	言語學	美術史
近代藝術研究	文藝批評研究	演劇研究	國文學
國史	東洋史	經濟學	文明史
法制史	國家學	經濟學	文明史

史學科

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		西洋哲學史 西洋學概論	西洋哲學史 西洋明學史	社會學 倫理學
隨意科目		東洋史 西洋史 國史	東洋史 西洋史 國史	東洋史 西洋史 國史

文學部史學科別格第三學年

科目	目	時數	科目	目	時數
日本古代史	支那思想史	2	基礎督敎學	佛語、獨語、露語	2
日本經濟史	支那思想史	2	第二外國語(隨意科目)		1
日本上代思想史	支那思想史	2			2

選擇科目	目	時數	科目	目	時數
心理學	支那文學	2	印度哲學	印度哲學	2
西洋哲學	支那文學	2	教育學及教授法	教育學及教授法	2
言語學	支那文學	2	教育學及教授法	教育學及教授法	2
美術史	支那文學	2	教育學及教授法	教育學及教授法	2
經濟史	支那文學	2	教育學及教授法	教育學及教授法	2
統計學	支那文學	2	教育學及教授法	教育學及教授法	2

支那哲學	二	英文學	二	獨逸文學	二
佛蘭西文學	二	露西亞文學	二	文藝思想史	二

商學部

- (一) 文學部各學科ニ於ル選擇科目ハ各學年ニ科目トス
- (二) 各學年ノ選擇科目ハ每學年ノ初ニ之ヲ定ム
- (三) 文學部學生ハ同一學年ニ於ル其所屬各分科ノ必修科目ヲ自己ノ選擇科目ト爲スナ得
- (四) 第二外國語ハ前掲科目中其一ヲ選擇セシム
- (五) 文學部學生ニシテ敎員志望者ニハ所定科目ノ外特ニ左記科目ヲ必修セシム
- (一) 修身、英語(佛蘭西語又ハ獨逸語)敎員志望者ニハ
- (二) 教育學、教授法、英語(佛蘭西語又ハ獨逸語)實際教授
- (三) 修身、國語及漢文敎員志望者ニハ
- (四) 教育學、教授法、國語及漢文實際教授
- (五) 歷史敎員志望者ニハ
- (六) 教育學、教授法、歷史實際教授

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		經濟學原理 經濟學地 簿記學 簿記學	貨幣及銀行論 商業經濟學 簿記學 簿記學	保險學 工業經濟學 統計學 統計學
隨意科目		商業算術 簿記學 簿記學	商業算術(爲替マテ) 簿記學 簿記學	商業算術 簿記學 簿記學

商學部別格第三學年(科目選擇トス)

科目	目	時數	科目	目	時數
經濟學	社會學	2	農業	農業	2
經濟學	社會學	2	農業	農業	2
經濟學	社會學	2	農業	農業	2
經濟學	社會學	2	農業	農業	2
經濟學	社會學	2	農業	農業	2
經濟學	社會學	2	農業	農業	2

理工學部

機械工學科

科目 / 學年	必修科目	隨意科目
第一學年 業每週數授	數學 機械學 材料學 力學 水工學 電氣學 熱力學 製造法 機械設計 工學 熱力學 計測學 物理學 化學 計測學 工場實習	外國語 四
第二學年 業每週數授	機械設計 熱力學 機械學 電氣學 抽水機 建築學 計測學 工場實習	外國語 四
第三學年 業每週數授	操重機 原動機 金屬組機 機械學 電氣學 暖房及通氣 紡績機及力織機 自働車 工業簿記 工場管理 計測學及製圖卒業論文	外國語 四

電氣工學科

科目 / 學年	必修科目	隨意科目
第一學年 業每週數授	電氣學及磁氣學 應用力學 數流學 電氣機械論 熱力學 水工學及水力學 工學 物理學 化學 計測學 工場實習	外國語 四
第二學年 業每週數授	電氣機械 熱力學 原動機 交流電機 電燈及照明 電機應用 送電機 電氣學 機械學 計測學 工場實習	外國語 四
第三學年 業每週數授	電氣織機 發電機 送電機 電氣化學 電氣學 經濟學 機械學 計測學 工場實習 卒業論文	外國語 四

採鑛冶金學科

科目 / 學年	必修科目	隨意科目
第一學年 業每週數授	採鑛學 冶金學 地質學 鑛物學 鑛山測量 鑛山測量實習 鑛山測量學 鑛山測量實習 鑛山測量學 鑛山測量實習	外國語 四
第二學年 業每週數授	採鑛學 鑛床學 鑛山測量 鑛山測量實習 鑛山測量學 鑛山測量實習 鑛山測量學 鑛山測量實習	外國語 四
第三學年 業每週數授	鑛山測量 鑛山測量實習 鑛山測量學 鑛山測量實習 鑛山測量學 鑛山測量實習 鑛山測量學 鑛山測量實習	外國語 四

一、採鑛冶金學科第一學年於テハ十二月末ニ地質學實習、學年末ニ鑛山測量ノ實習ヲ課ス

建築學科

科目 / 學年	必修科目	隨意科目
第一學年 業每週數授	建築構造學 建築材料學 建築材料學 建築材料學 建築材料學 建築材料學 建築材料學 建築材料學	外國語 四
第二學年 業每週數授	建築構造學 建築材料學 建築材料學 建築材料學 建築材料學 建築材料學 建築材料學 建築材料學	外國語 四
第三學年 業每週數授	建築法 建築法 建築法 建築法 建築法 建築法 建築法 建築法	外國語 四

望者ニハ佛蘭西語、獨逸語若クハ露西亞語ヲ第一外國語トシ(第二學年ヨリ之ヲ課ス)其他ノ外國語ヲ第二外國語トス毎週授業時數左ノ如シ

科目	第一學年	第二學年	第三學年
第一外國語	每週授數(四)	每週授數(三)	每週授數(一〇)
第二外國語	每週授數(三)	每週授數(三)	每週授數(三)
計	(三三)	(三二)	(三〇)

理科

科目	第一學年	第二學年	第三學年
國語及漢文	每週授數(四)	每週授數(六)	每週授數(六)
第一外國語	每週授數(八)	每週授數(四)	每週授數(一)
第二外國語	每週授數(四)	每週授數(六)	每週授數(一)
算學	每週授數(一)	每週授數(三)	每週授數(三)
物理學	每週授數(二)	每週授數(三)	每週授數(六)
化學	每週授數(二)	每週授數(三)	每週授數(六)
植物學	每週授數(二)	每週授數(三)	每週授數(六)
礦物學	每週授數(二)	每週授數(三)	每週授數(六)
心算及地理	每週授數(二)	每週授數(三)	每週授數(六)
法制及經濟	每週授數(二)	每週授數(三)	每週授數(六)
圖畫	每週授數(三)	每週授數(三)	每週授數(三)
體育	每週授數(二)	每週授數(三)	每週授數(三)
計	(二八)	(二八)	(二八)

第二高等學院
文科

一、第一外國語ハ英語トス
第二外國語ハ獨逸語、佛蘭西語、露西亞語又ハ支那語トシ之ヲ隨意科目トス

科目	第一學年	第二學年
國語及漢文	每週授數(五)	每週授數(五)
第一外國語	每週授數(一)	每週授數(一)
第二外國語	每週授數(一)	每週授數(一)
計	(七一)	(七一)

科目	第一學年	第二學年
第一外國語	每週授數(一)	每週授數(一)
第二外國語	每週授數(一)	每週授數(一)
算學	每週授數(三)	每週授數(三)
物理學	每週授數(二)	每週授數(二)
化學	每週授數(二)	每週授數(二)
植物學	每週授數(二)	每週授數(二)
礦物學	每週授數(二)	每週授數(二)
心算及地理	每週授數(二)	每週授數(二)
法制及經濟	每週授數(二)	每週授數(二)
圖畫	每週授數(三)	每週授數(三)
體育	每週授數(二)	每週授數(二)
計	(二九)	(二八)

一、第一及第二外國語ニ關スル規定ハ第一高等學院文科ニ同シ
二、第二外國語ヲ第一外國語トスル場合ニ於ケル毎週授業時數左ノ如シ

科目	第一學年	第二學年
第一外國語	每週授數(一)	每週授數(一)
第二外國語	每週授數(一)	每週授數(一)
算學	每週授數(三)	每週授數(三)
物理學	每週授數(二)	每週授數(二)
化學	每週授數(二)	每週授數(二)
植物學	每週授數(二)	每週授數(二)
礦物學	每週授數(二)	每週授數(二)
心算及地理	每週授數(二)	每週授數(二)
法制及經濟	每週授數(二)	每週授數(二)
圖畫	每週授數(三)	每週授數(三)
體育	每週授數(二)	每週授數(二)
計	(三二)	(三〇)

第四學生

本學年末各學生總數は一萬三千六百七十七名にして、今左に其學級別府縣別及創立以來の學生年別表を示せば左の如し

◎現在學生學級別表 (大正十一年六月末日)

學級	一年	二年	三年	計
政治學部	二〇〇	一九〇	一七九	三九〇
經濟學部	九〇	八九	四八	一七九
法學部	二〇	二五	一四	四八
文學部	六六	八〇	一〇六	一五二
哲學部	五	五	一〇	一五
商學部	八五	八五	一七〇	二四〇
機械學部	八五	一三五	二二〇	四四〇
電氣學部	八五	一三五	二二〇	四四〇
建築學部	三五	五〇	八七	一七二
探礦學部	三五	五〇	八七	一七二
應用化學部	三四	四〇	八五	一五九
計	一、七〇九	一、七〇九	一、七〇九	五、一二七

● 本大學創立以來學生表

(六月末日現在)

年別	學部										學科										合計
	政治	經濟	法律	文	商	理	工	農	醫	教育	政治	經濟	法律	文	商	理	工	農	醫	教育	
明治十五年																					
明治十六年																					
明治十七年																					
明治十八年																					
明治十九年																					
明治二十年																					
明治二十一年																					
明治二十二年																					
明治二十三年																					
明治二十四年																					
明治二十五年																					
明治二十六年																					
明治二十七年																					
明治二十八年																					
明治二十九年																					
明治三十年																					
明治三十一年																					
明治三十二年																					
明治三十三年																					
明治三十四年																					
明治三十五年																					
明治三十六年																					
明治三十七年																					
明治三十八年																					
明治三十九年																					
明治四十年																					
明治四十一年																					
明治四十二年																					
明治四十三年																					
明治四十四年																					
明治四十五年																					
大正二年																					
同三年																					
同四年																					
同五年																					
同六年																					
同七年																					
同八年																					
同九年																					
同十年																					
同十一年																					

早稻田大學報告 (大正十一年十二月)

●早稻田大學得業生府縣別 (大正十一年度調)

府縣別	學科別	總數	內												外																	
			大學部						專門部						高等師範部						清國留學生部											
			政治經濟學科		法學科		文學科		商科		理工科		邦語政治行政科		經濟科法律科		國語歷史地理科		漢文科		英語科		數學科		物理化學科		英語政治文學		英語普通部		研究科	
東京府		2,006	133	64	136	853	263	231	135	24	11	24	42	36	48	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
大阪府		495	54	19	46	182	28	79	38	15	4	4	11	4	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
京都府		307	35	6	16	86	17	62	45	7	15	7	9	6	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
神奈川縣		376	20	5	26	152	33	65	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	
兵庫縣		52	49	11	38	187	30	106	55	4	13	7	13	9	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
長崎縣		331	28	6	21	89	25	89	24	1	8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
新潟縣		751	61	32	58	204	41	141	112	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
埼玉縣		426	30	17	36	120	18	66	69	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
群馬縣		285	23	10	36	122	17	52	33	4	13	4	13	8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
千葉縣		451	22	10	33	110	23	96	57	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
茨城縣		409	30	16	30	108	23	71	57	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
栃木縣		349	32	15	26	101	19	65	45	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
奈良縣		142	9	9	17	34	6	22	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
三重縣		347	19	10	31	111	22	89	49	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
愛知縣		560	40	19	52	220	28	89	59	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
靜岡縣		568	46	7	38	163	38	130	65	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
山梨縣		266	23	5	22	87	7	50	26	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
滋賀縣		197	18	6	18	57	12	42	20	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
岐阜縣		295	14	4	18	90	17	88	45	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
長野縣		537	25	16	42	143	27	130	83	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
宮城縣		266	25	16	42	143	27	130	83	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
福島縣		342	36	9	25	92	11	79	47	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
巖手縣		156	16	4	18	55	11	44	27	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
青森縣		171	13	8	18	31	11	41	20	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
山形縣		293	38	15	28	65	13	51	45	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

早稻田大學報告 (大正十一年十二月)

合	小	瑞	米	支	朝	臺	沖	北	鹿	宮	熊	佐	大	福	高	愛	香	德	和	山	廣	岡	島	鳥	富	石	福	秋
計	計	典	國	那	鮮	灣	繩	海	兒	崎	本	賀	分	岡	知	媛	川	島	歌	口	島	山	根	取	山	川	井	田
一八、二六一				一、一四三	七八	一一	五七	二九	二〇三	一三五	三〇七	三七	二八七	六三三	三三九	二九一	二七九	一一八	二二八	四〇八	四六〇	五四四	二二二	一八三	二七三	二二二	二二七	二三八
一四、二四	〇	〇	一	六四	一一	三	七	二四	一五	一三	三三	三三	二四	六八	一七	二二	二六	六	一六	三〇	二〇	三三	一五	二二	二二	一八	三三	二四
五七〇	〇	〇	〇	一一	二	二	二	七	三	五	一〇	八	一一	二四	六	一六	一四	五	六	一二	三	二二	六	四	一四	一〇	七	一一
一三、三	〇	〇	〇	七	四	〇	八	一九	六	一一	一九	二二	一三	四一	一六	二八	二四	一〇	三〇	三〇	三六	五〇	二七	一一	二六	一七	二八	一五
五、二五九	〇	〇	〇	三五	三	〇	一一	一〇四	六一	四三	六三	一〇七	六三	一五六	六七	九四	八四	三四	七二	一二三	一五一	一六九	五六	四八	七四	七	五六	三三
一、一八八	一	〇	八	〇	一	三	三	二二	三	七	一一	三三	一八	五六	一〇	一六	一六	八	八	三七	四〇	二九	一四	一五	一八	二六	九	二〇
三、七三六	〇	〇	〇	五二〇	五三	五	一四	六六	六五	二二	七五	六九	六四	一四一	四七	五〇	三三	二九	二七	七四	八三	九九	二五	三六	五五	三五	三四	七〇
二〇、一三	〇	〇	七五	五	一	五	二	一六	一一	四一	四七	四八	六〇	六〇	二〇	三〇	三七	一一	二二	五八	六四	五七	一九	一八	三三	二五	三〇	三一
四、五七	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二	八	一	六	一七	一一	一八	一〇	一〇	一〇	七	六	一一	五	三〇	二八	四	五	一〇	一	七	九
二、二四	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	五	三	六	四	五	六	四	六	二	一	三	二	四	七	二	四	二	二	三	一
四、七	〇	〇	一〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	三	一	三	〇	一	〇	〇	〇	一	三	〇	〇	〇	二	〇	〇	〇	〇
三、三四	〇	〇	〇	〇	〇	一	三	六	二	九	五	五	二	四	六	四	七	五	五	八	一〇	一〇	八	五	四	二	七	四
三、三	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	一	二	〇	一	〇	二	〇	〇	一	〇	三	〇	一	〇	一	一	〇
二、九	〇	〇	一	〇	〇	〇	一	〇	一	〇	〇	一	〇	一	一	〇	〇	一	〇	四	〇	二	〇	一	〇	〇	〇	二
三、八九	〇	〇	〇	〇	〇	一	一	六	六	六	一四	一〇	一六	一五	三	九	六	三	五	八	六	一八	六	五	三	三	三	八
三、七七	〇	〇	〇	〇	〇	三	七	八	五	一二	四	四	一七	一〇	三	一〇	三	五	七	二	一六	八	三	〇	一	四	二	
四、三九	〇	〇	〇	〇	〇	〇	七	六	〇	一三	八	五	一三	〇	九	七	三	七	一三	五	一五	七	三	八	四	六	八	
一、五	〇	〇	五	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一、五〇			一五〇																									
七、二			七二																									
五、八			五八																									
八、〇			八〇																									
四、七			四七																									

實驗費	四五、七六二・七七〇
消耗費	一九、二五三・一三五
通信費	五、一〇八・〇七〇
乘車費	二、二六八・八〇〇
圖書費	二六、二六一・六八〇
器具費	九、四一三・二九〇
火災保險料	一〇、七三一・七四〇
衛生料	一八五・二九〇
衛生費	二、四八二・六六〇
諸生稅	四四二・一八〇
廣告費	二四、四三三・八八〇
營業費	七、一三四・九一〇
集會費	八、六九一・〇四〇
得業式費	二、〇五四・六〇〇
學會補助費	一、五二九・九六五

第七圖書館

大正十年度自大正十年六月一日起至同十一年三月三十一日

圖書館報告

(一) 圖書
 總數九萬一千四百四十八部
 貳拾三萬七千七百七十二册
 內
 和漢書 五萬四千二百八十部
 拾八萬三千五百三十四册
 洋書 三萬七千六百六十八部
 五萬三千六百三十八册
 內譯
 一、本館藏書
 八萬五千五百七十四部
 二十萬八千七百七十册
 內

薪炭費	五、五五五・〇七〇
體育會補助費	一四、一〇五・七二〇
校友會補助費	一〇、〇〇〇・〇〇〇
永樂俱樂部補助費	三、五〇八・二三〇
基金募集費	一、二〇〇・〇〇〇
海外留學生費	一、〇六五・四二〇
教職員年金積立金	四七、五八一・六一〇
雜費	九、五二四・五八〇
豫備金	一六、〇一三・八八五
土地購入費	三、〇八九・九九〇
臨時費	五、〇四〇・〇〇〇
合計	九七七、八八六・一三五
差引不足金	二五、四二八・五七五

和漢書 四萬九千五百三十九部
 拾五萬六千五百七十一册
 洋書 三萬六千三百三十五部
 五萬二千九百九十九册
 右之內本年度中に増加
 三千六百五十八部
 五千六百二十五册
 內
 和漢書 九百二十部
 一千八百三十六册
 洋書 二千七百三十八部
 三千七百八十九册
 二、寄託圖書
 五千八百七十四部
 二萬八千四百二册
 內
 和漢書
 四千七百四十一部

二萬六千九百六十四册
 洋書
 一千百三十三部
 一千四百三十九册

(一) 標本
 一、歷史地理科參考品
 總數二千四百五十點
 內
 本年度増加 一點

二、商科參考品
 總數一千七百七十四種
 四千二百二十九點
 內
 本年度増加 一種六點

(二) 本年度內圖書標本
 購入寄贈別
 一、購入圖書
 二千四百九十六部
 三千五百九十四册
 內
 和漢書 四百九十八部
 九百一册
 洋書 一千九百九十八部

(三) 最近五ヶ年比較
 一、增加圖書年々比較

年度	圖書數	增加	減少	前年較度	購入	寄贈	前年度比較
大正七年	五、〇五七	減	減	二、一三七	二、六一九	二、四三八	購增 五八
大正八年	七、五九九	增	增	二、五四二	四、七六九	二、八三〇	購增 二、一五〇
大正九年	六、六四二	減	減	九五七	三、四九九	三、一八三	購增 三、三九二
大正十年	一、〇二二	增	增	四、三八〇	八、六二二	二、四〇〇	購增 三、一五〇
大正九年(第一次)	六、六四二	減	減	九五七	三、四九九	三、一八三	購增 三、三九二
大正九年(第二次)	一、〇二二	增	增	四、三八〇	八、六二二	二、四〇〇	購增 三、一五〇

二、寄贈圖書
 一千百六十二部
 二千三十一册
 內
 和漢書 四百二十二部
 九百三十五册
 洋書 七百四十部
 一千九十六册
 三、歷史地理科參考品
 購入 〇
 寄贈 一點
 四、商科參考品
 購入 一種 六點
 寄贈 〇
 (四) 本年度內閱覽人員並に貸出圖書數
 一、一ヶ年總計(但本年度は十ヶ月)
 開館日數 二百十二日
 閱覽人員 六萬三千五百五十人
 貸出圖書數拾貳萬一千六百八十六册
 二、一日平均
 閱覽人員 二百九十七人 八八
 貸出圖書數 五百七十三册 九九

大正十年	五、六二五	減	五、三九七	三、五九四	二、〇三一	購增	五、〇二八
六月—三月						寄減	三六九

二、洋書之部

年	度	增加總數	前年度比較	購	入	寄	贈	前年度比較
大正七年		一、七一九	減	一、三三六	一、四八八		二三一	購增
同八年		三、〇〇二	增	一、二八三	一、六七六	一、三二六	一、一八九	寄減
同九年	(第一次)	三、九二九	增	九二七	二、五九八	一、三三一	一、〇九五	購增
同九年	(第二次)	三、四七一	減	四五八	三、二七五	一九六	一、一三五	寄減
同十年	(六月—三月)	三、七八九	增	三一八	二、六九三	一、〇九六	九〇〇	購增

三、和漢書之部

年	度	總增加數	前年度比較	購	入	寄	贈	前年度比較
大正七年		三、三三八	減	八〇一	一、一三一	二、二〇七	七九六	購減
同八年		四、五九七	增	一、二五九	三、〇九三	一、五〇四	一、九六二	購增
同九年	(第一次)	二、七二三	減	一、八八四	八六一	一、八五二	七〇三	寄減
同九年	(第二次)	七、五五一	增	四、八二八	五、三四七	二、二〇四	四、四八六	購增
同十年		一、八三六	減	五、七二五	九〇一	九三五	四、四四六	寄減

四、閱覽人員貸出圖書數

年度總計比較

年	度	閱覽人員	貸出圖書數	前	年	度	比	較
大正七年		一三〇、五一七	二五二、九二〇	人員	減	二〇、〇二〇		
同八年		一一八、七四〇	二三七、四二八	圖書	減	三五、〇七〇		
同九年	(第一次)	一一八、九九二	二二七、七三四	人員	增	一一、七七七		
同九年	(第二次)	一一三、七三〇	二〇二、九二六	圖書	減	一五、四八三		
同十年		六三、一五〇	一一一、六八六	人員	減	二四、八〇八		
				圖書	減	五〇、五八〇		
				圖書	減	八一、二四〇		

五、閱覽人員貸出圖書數

一日平均年度比較

年	度	閱覽人員	貸出圖書數	前	年	度	比	較
大正七年		四六二、八二	八九六、八四	人員	減	八〇、六三		
同八年		三八四、二七	七六八、三八	圖書	減	一四二、八〇		
同九年	(第一次)	三七一、八五	七一、六七	人員	減	七八、五五		
同九年	(第二次)	三五六、五二	六三六、一三	圖書	減	一一八、四六		
同十年		二九七、八八	五七三、一三	人員	減	一五、三七		
				圖書	減	七五、五四		
				圖書	減	五八、六四		
				圖書	減	六二、一四		

第八 學生課

(自大正十一年四月至大正十一年三月)

一、課員の配置及異動

學年の當初高等豫科派遣の石原課員は第一高等學院體操講師として轉出したるも之に先んじ本部學生課に茂木課員を増したるを以て茲に數を滿たし得其配置前年の通りとす唯高等豫科は一學年のみとなるを以て課員の補充を行はず即ち本部に主任以下七名高等豫科一名理工學部に一名計九名を以て終始し其事務分掌は別項の通(學年の初め己に各課に配付せるを以て略す)實施し相當効果を收めたるものと認めらる。

二、學生課の移轉

本部事務所の混雜を防止し業務の進捗を企圖し追て高等豫科の閉鎖すべきを利用し學生課全部及教務課の一部を分離することに決せられ學年の終り己に新學年の準備の爲め茂木課員外二名を新事務所へ派遣せり。

三、事務執行の方針

元來學校の事務特に直接學生に對するもの、心掛は官廳會社の夫れと其趣を異にし懇切を旨とし繁を厭はず教師と協力し以て學生の品性陶冶に資する所なかるべからず之れ從來我大學の執る方針にして亦實に獨特の美點たりしなり然るに學生は愈其數を増加し職員數亦之に隨ひ一般思想界の混濁は其波瀾を我學苑にも及ぼせるを以て從來の美點は漸く之れを見難きに至らんかを憂へしめしが今學年は其當初特に課員協力其注意を怠らざりしを以て漸次幸に再び其憂を絶ち而て年次の古きに隨ひ學生も亦よく當局の方針を理解し學生と課員との關係大に改まる所ありしを以て尙一段の努力によらば我學苑の特色を發揮するの程度には達せざるも然も一層學生の信頼を厚くするを得ん乎

四、服裝

學年の初に於て制服制帽を着用すべき旨揭示し絶へず此の實行に注意せる結果漸次整頓を來せるも近時極端に發達せる自由思想と又一面經濟上の利便より學年進行に従ひ之が規

定を遵守せざるものを加ふるに到りたるは頗る遺憾とする所蓋し學生の服装に付ては一層の研究を要するの機運に達せるには非ざる乎

五、出席點呼
課員三名をして専ら點呼に任せしめ教師の行ふものとを綜合し月末之が調査を行ひ數次若くは夫以上の缺席者にして事由の届出なきものに對しては程度に應じ本人又は父兄に通知し之が處理を促がし可成學生をして閑居誘惑に陥らざる様注意し尙ほ長期缺席又は學費意納等により修學の見込なきものは之を除籍し不良學生を省き専ら整理に勉めたり。

點呼の方法は其部により又新古に應じ程度を計り或は出席簿を備付け又は委員をして職員の點呼を補助せしむる等各種の方法を混用し大部の出席を促がし専ら缺席者に注意するの方針に出たり右の結果略ぼ其目的を達するを得たるも只遺憾とする所は教師との連絡充分ならず全年度に互り其趣旨を徹底せしめ得ざりし點に在り。

七、學生心得の改正
十一月九日改正心得を揭示す之れ從來のもの其の規定現時の諸條規に適合せざるもの多く實行に支障を生ぜざるを以て勉めて現狀に應ぜんが爲茲に其發表を視るに至れり。

教師の行ふ點呼に就ては何等の困難を見ざるも職員が行ふものに在ては時に喧嘩を惹起することなきを得ず之れ一般に學生が點呼を嫌忌するもの多く課員を以て舊來の慣習上徒らに學生の非を發き單に壓迫強制するものと誤解せるに基因するものにして之れ又努力の結果當局の意を諒とし學年末に到ては已に大部の學生は課員に對し好意を保つる域に達せり蓋し教室に於ける課員の行動はたとへ其言動些事に屬するも學生に與ふる印象甚深なるものあるを以て常に課員を戒め自重せしむる所なり。

八、講演集會及揭示物
講演學生集會及講習は附表に示す通にして特種一二の講演を除ては靜肅にして何等紛騒を來せしことなく充分研究の効果を擧げたるものと考察せらるる但し社會主義研究のものに在ては時に宣傳に流れ爲に警視廳を煩はし或は新紙の誤報を招きし事あり若し夫れが爲め社會の學校に對する誤解を生ずることあらんか事甚重大なるものあらん。

教師の行ふ點呼に就ては何等の困難を見ざるも職員が行ふものに在ては時に喧嘩を惹起することなきを得ず之れ一般に學生が點呼を嫌忌するもの多く課員を以て舊來の慣習上徒らに學生の非を發き單に壓迫強制するものと誤解せるに基因するものにして之れ又努力の結果當局の意を諒とし學年末に到ては已に大部の學生は課員に對し好意を保つる域に達せり蓋し教室に於ける課員の行動はたとへ其言動些事に屬するも學生に與ふる印象甚深なるものあるを以て常に課員を戒め自重せしむる所なり。

九、東宮殿下奉迎
九月三日午前十一時二十分歐洲御巡遊の東宮殿下御歸朝に付在京學生五百餘名東京驛前に奉迎す諸事奉送の時に準ず。

六、學生事故
本學年は前年に比し稍事故の増加を來し除名二、諭旨退學二、入學取消一、訓戒十を算し其外金品衣類を騙取せられたるもの數名溺死情死各一名あり特に破廉耻罪を増したるを憾みとす。

十、大隈總長を送る
大隈總長病革まるや學校當局は勿論學生の憂慮其極に達し大會は開かれ祈願は行はれ參籠は實施せられ赤誠の吐露他に比類を見ざる所其計に接するや一萬の健兒泣かざるはなく總て國民葬は行はれ如何に學生が節度を保ち故總長を慕へるかはその紙上近くは總長哀悼號に詳なり。

六、學生事故
本學年は前年に比し稍事故の増加を來し除名二、諭旨退學二、入學取消一、訓戒十を算し其外金品衣類を騙取せられたるもの數名溺死情死各一名あり特に破廉耻罪を増したるを憾みとす。

十一、警備
一、夜警勤務の方法は前年と異なる所なし。
二、火災豫防之れ亦從前の通り各冬期課員をして居残り火災取締に任せしめたり。
五月二十日専用消火栓及水管の接手を町野式に改め取扱の便を計り十二月六日消火器の試験を行ひたり。

十二、遺留品取扱
本年度を通じて届出遺留品數及交付數は學生の總數に比して少きが如しと雖も而も尙ほ一概に前年に比し成績甚優良とは觀るを得ず。

十三、衛生及校内監督
一、教室の掃除監督下足の取締校庭芝地樹木の保護及便所採取の事項は専務係二名の擔當とし午前中特に力を用ゆること、し六月下旬雨天續き下足取締上最も必要の時機に際しては更に他の課員をして之を補助せしめ出來得る限りの方法を採れるも尙未だ所望の點に達せざること遠く下駄穿きの儘教室出入の學生中々に其數を減せず非衛生は勿論之れが爲授業を妨害すること甚だしきに付ては最も苦慮する所なり右様の狀態に在るを以て自治心に富める學生にして之が矯正に盡力すべく奮起せんとの聲も屢々耳にする所なるを以て總ては學生委員會の問題たるべし。
二、年度間を通じ在學中發病其他の事件なく傳染病の流行もなかりしを以て特に實施せることなし。
三、校内に於ける學生の投球及芝生保護に關しては工手學校當事者とも協議し所用の箇所に制札を立て取締を勵行せるも之亦效果揚らず制札の如何記載の文言に付ては尙充分研究の餘地あるものと思料せらる。
四、運動場附近民家より「ボール」の投入よりする危険及損害に付ては申込少なからず之れ亦相當の方法を講じつつあり。

十四、乘車割引券取扱
昨十年一月十日より新乘車割引事務を開始し新に身分證明書を作製することとなり教師學生の便宜加はれるに隨ひ該事務は愈繁忙を加ふるに到れり特に當初は一般に其精神を了解せざるを以て證書割引券の取扱に粗漏多く證明書紛失者多きを以て揭示により又は本人に付よく其意を説明し尙一層注意を深からしむる爲め身分證明書再下附の場合に手数料を徴收すること、なし之が専務係として二名を當て毎日午後之が取扱を行ひしも尙充分ならず特に冬期及夏期休暇前に於ては課員一同之に當らざるを得ざるの狀態に在り唯遺憾を感ずる點は學院に於ける該事務取扱が本大學に於ける實施の精神に沿はざるにあり其結果學生の

便を缺き累を當課に及すと屢々なるにあり。

十五、小使勤務

定員三十二名を以て終始す。

十六、雜件

學報配布其他從前の通りにして特に記すべきことなし。

十七、學生諸會

學生の正科以外の研究又は修養の爲めの各種の會を擧ぐれば左の如し。

音樂會

丙辰美學會
早大史學會

佛語會

早大史學會
基督教青年會

雄辯會

亞細亞學生會

奉仕會

都市政策會

一新會

早大YNS會

白雲會

純福音信仰會

靜座會

早大自強術會

道の會

佛教々友青年會

獨逸學會

人道々德青年會

政治學會

思想問題研究會

東洋學會

早稻田法律學會

經濟學會

ローマ字ひろめ會

廣告研究會

早大新聞研究會

早稻田大學人性道德研究會
早稻田大學稻政會 早大東部會
早稻田ローマ字會 早大觀世會
早苗會 森林社
早稻田大學文化事業研究會
英語會 獨逸文學會
沼南會 統計學會
日鮮語原研究會 參禪會
早稻田同學會 映畫研究會
養眞青年會 早稻田法學會
早稻田旅行會 參陵會
早稻田短歌會 文化人類學會

第九 科外講演及特別講義

別講義

本期間中に開催したる科外講演及特別講義左の如し。

大正十年九月廿二日

早稻田野球團遠征談

教授 安部 磯 雄氏

大正十年九月廿八日

何故に疑ひ懼る、や

國際聯盟協會理事 田川大吉郎氏

軍備問題

外務書記官 杉村陽太郎氏

大正十年十月五日

ワシントン會議の經濟的背景

前中央カリフォルニア農會理事 千葉 豊 治氏

大正十年十月十三日

我天然と國際及國防

陸軍少將 河野 恒 吉氏

大正十年十月廿六日

米國關係より觀たる極東問題

米國スタンフォード大學 教授 トリート博士

大正十年十月廿七日

日米關係より觀たる亞米利加問題

トリート博士

大正十年十一月十日

大戰後日本の國際的地位の變動

教授 内ヶ崎 作三郎氏

大正十年十一月十七日

帝國議會議事法の一般

衆議院議員 林田龜太郎氏

大正十年十一月十八日

汎太平洋新聞會議に就て

米國ミネソタ大學教授ウオーター ドクトル ウイリアム氏

大正十年十一月二日高等學院にて

科學と現代生活に就て

東京博物館長 棚橋源太郎氏

世界平和の基調と題して

法學博士 吉野 作 造氏

特別講義

大正十年自九月至十二月十日 每週三時間宛

自動車に就て

柴藤 營 一氏

地震學に就て

理學博士 大森 房 吉氏

第十 體育部

競争部

大正拾年九月十八日第二回關西學院對本校陸上競技大會を本校トラックに開く競技十九

種其の結果早大八十點關西學院廿八點にて昨年の怨を晴らす。下田貞晴の走巾跳、内田庄作の低障礙物競走は共に本校新記録となれり

十月二日第一高等學校陸上運動會一哩リレース、招待レースに於て本校選手一着を占む。尚ほ右は本校の新記録となる。

十月十一日高等蠶絲專門學校陸上運動會メドレーリレース招待レースに於て、本校選手三着を占む。

十月十七日日本本校第四十五回陸上運動會に於ける招待中學校八百米リレースは一着曉星中學校、招待專門學校千六百米突リレースは一着高等師範學校。

十月廿三日京都帝國大學陸上運動會專門學校招待一哩リレースに於て本校二着となる。

十月卅日東京帝國大學陸上運動會招待一哩リレースに於て本校二着となる。

一着の一高と同タイムにして本校新記録なり

十月卅一日明治大學陸上運動會招待一哩リレースに於て、本校優勝し優勝旗を授與せらる。

十一月六日學書院陸上運動會招待一哩リレースに於て本校優勝す。

十一月十二、三日大日本體育協會主催全國專門學校學生聯合競技大會舉行、本校選手一同奮闘の結果競技種目十八種八十七點の最高點を以て優勝し、優勝旗を授與せらる。

十一月十九日二十日、大日本體育協會主催第九回全日本選手權陸上競技大會に於ける本校選手成績左の如し。

高障礙競走三等 走中跳四等 三千米競走

一等、二等、四等 一萬米競走三等 圓盤
 投二等、四等 八百米競走三等 低障礙競
 走一等、三等 ホップ、ステップ、エンド、
 ジャンプ三等 ハンマー投一等 四百米競
 走三等 棒高跳三等 槍投三等 走高跳一
 等 五種競技四等 十種競技四等

大正十一年一月七日八日報知新聞社主催第
 三回十大學對抗驛傳競走に於て、本校選手一
 着を占め優勝旗を得たり。

端艇部

大正十年十月隅田川に行はるべき日本漕艇
 協會對校レースに出漕する爲め殊に今回は昨
 年の雪辱的必勝の意味もあり、大正十年六月
 廿五日練習を開始す。

八月三日よりは向島に合宿練習九月三日よ
 りは更に川崎六郷川に移轉社會館に起臥練
 漕をつよく超へて十月三日向島に歸る

十月五日新艇進水す。
 十月二十二日日本漕艇協會主催對抗競漕行
 はる。

第一回豫選、早帝外語の組合せとなり本大
 學は残念ながら二着となる。

十月廿三日皇太子殿下の御台覽あり、御前
 試漕後出漕選手一同拜顔の榮を賜はる。

十一月十六日艇友會主催新舊部長の送迎會
 あり鹽澤舊部長の挨拶續いて新部長阪本三郎
 先生の新任辭あり。

同二十六日艇友會委員端艇部委員との打合
 せ會あり今後の我が端艇部の採るべき方策に

つき協議せり。

大正十一年二月十五日端艇部主催新舊部長
 の送迎會竝に卒業生送別會を開く。

二月廿二日連年の敗戦により我が端艇部を
 改造すべく選手會大會を開き大改革を行へり
 決議事項左の如し。

二月廿三日コーチャー及び選手決定す、斯
 くして吾人は本年こそ必勝の銳氣を以て來る
 べき秋を待ちつ、あるものなり。

端艇部選手選出法

及其他の改正

◎校内競漕

(一)選手選出法

一、選手は政、法、文、商、理の各科より選手七
 名宛を選出したるしも爾今選手選出區域を
 政學部、法文學部、商學部、理工學部の四に
 分ち各一部より第一選手四名及第二選手四
 名宛を選出するものと改正す。

一、前條により選出されし各學部の第一選手
 を抽籤或は協議により更に紅白に二分す。

(第二選手亦之に倣ふ)

一、舵手は選手及係員協議の上之を決定す
 但し第一條に従ひ各選舉區域より各一名
 を選出するも妨なし。

(二)競漕

一、水上運動會の分科競漕及對科競漕は之を
 廢止し爾今第一選手競漕、第二選手競漕と
 す。

一、選手競漕は第一選手第二選手各紅白に分
 れ之を行ふものとす。

一、競漕艇は八丁艇とす。
 但し大正十一年度に限り第二選手は六丁

艇とす。

◎對校競漕

(一)對校選手選出法

一、第一選手は對校選手被選舉權を有す
 一、對校選手候補を左の二種とす。

第一候補—本大學水上運動會に於ける第
 一選手中優勝組

第二候補—第一候補に非ざる第一選手
 一、對校選手は前條候補中より之を選定す

一、選手選定は部長及コーチャーに於て候補
 中より取捨選擇し之を決定す。

(二)コーチャー

一、コーチャーは艇友會、第一選手及委員の
 協賛を待つて部長之を依頼するものとす。

二月廿三日コーチャー及び選手決定す、斯
 くして吾人は今や必勝の銳氣を以て來るべき
 秋を待ちつ、あるものなり。

柔道部

大正十年十月二日、部下各大學專門學校竝に
 中等學校三十餘校を招待し、第二十六回大
 會を舉行す。

十月十六日、より同三十日までの各日曜に舉
 行されたり。講道館秋季紅白勝負に、本部
 々員多數出席何れも健闘威技を示せり。

十一月十二日、本部豫饒會竝に納會を行ふ。
 十一月十三日、より同十六日まで四日間に互
 り、伊豆半島方面に向つて親睦旅行を行ふ

十二月二十日、講道館昇段式に於て、本部々
 員六名三段に、六名二段に進む。

大正十一年一月八日、講道館昇段式に於て本
 部部員壹名三段に進む。
 一月十五日より向ふ三週間寒稽古開始。

二月五日、講道館昇段式に於て、校友山崎互
 氏五段に進み、依田、高廣、岡崎の三氏及
 び部員貳名四段に進む。

本部に於て正に一大威力を加へしものと云
 ふべし。

二月十一日、寒稽古納會を開き紅白勝負を行
 ふ。皆勤者中瀬四段以下三十四名に賞狀を
 授與す。尙ほ當日委員改選の結果左の七氏
 當選す。

二宮宗太郎、中瀬直雄、鷹崎正見、江橋
 力、中西市次郎、友成康、高橋芳平。

二月十九日、小川町常盤に於て、新舊委員會
 開催、本部の發展に付き議する所ありたり

三月三十日、委員會合、本年度豫算を編成
 す。

劍道部

九月二十三日、(秋季皇靈祭)本部主催第六回
 全國中等學校優勝大會を舉行す、北は北海道
 小樽商業より南は九州唐津中學まで名の如く
 全國の覇者を網羅して實に五十二校空前の盛
 會にて、壯烈なる決戦の結果遂に小樽商業優
 勝し京北中學、秋田師範の順なりき、特記す
 べきは年を追ふて劍士の技術の著しく上達せ
 ることと、本年より本部の趣意を賛して報知
 新聞社が爾後此會を後援することとなりたる
 事なり。

十月六日、恒例により選手十五名慶應義塾の
 道場に赴き親しく慶應の部員諸氏と稽古をな
 す、私學の兩權威たる二大學に於て、君子的
 争の裏に身神の修練をなす、麗はしき此關係
 を永遠にのこさむことを望む。

十月十七日より秋季休業中相浦五、西村、宮口兩三段にて諏訪、長岡、新潟、佐渡、會津と修業旅行をなし、至る所にて大歓迎を受く、特に新潟の先輩齋藤藤四郎氏の御好意は感銘に不堪。

十一月五日、第廿五回本部大會を舉行し、數多の來賓、劍士を迎へ盛會なりき、終りて神樂坂千門亭にて高段者九名の豫餞會を開く。十二月三日、本年度納會を兼ねて部員の昇段進級仕合を行ふ多數の昇格者あり。

十二月四日、新進の三段にて、中堅として、大いに將來を望望されたる、西村惣一郎君腸チブスにて癩、澤病院にて逝去す。翌五日部員一同及び關係者と共に若松町金谷山にて告別式を行ふ。

一月十五日より向ふ一ヶ月間、霜雪を踏みて寒稽古をなす參加者百五十餘名、五十三名の皆勤者七十名の精勤者あり。二月十一日、寒稽古納會及び昇段進級仕合を行ふ。

野 球 部

大正十年九月九日日本大學の招聘に應じて北米シヤトルのワシントン大學野球團來る本大學野球團は東京大阪及び福岡縣八幡に於て合計九回の仕合をなし四勝五敗の成績を得たりワシントン大學以外には布哇より日本人野球團二、外人野球團一、加奈陀より日本人野球團一、外人野球團一、其他北米土人野球團二シヤトル旭俱樂部野球團來朝す本大學野球團は一二を除くの外此等の野球團と仕合をなし布哇の外人野球團に敗れたる外何れも好成績を得たり。

庭 球 部

我部硬球を探りて茲に未だ三年の星霜を重ねざのものと雖も其多年軟球に於て與へられし光榮ある血と汗の歴史は遂に再び硬球の吾にも來らざるべからざるのもの見よ今や日に月に擡頭し行く吾部の精銳を吾人は茲に敢て數年の内とは云ふまじ、否寧ろ實に今後一年を出でずして必ずや我國庭球界に再び光榮ある吾部の歴史の再現を期せしめんことを斷言して憚らざるものなり。

今更に過去七ヶ月間に於ける而も其季節の己むを得ざる所半ば所謂冬眠のシーズンに於ける出來事につきて左に摘記せんとするものなり。

大正拾年九月一日より秋季練習開始三神記念コート人地常に和すカレッジオーブントーナメントにはシングル八名ダブル四組出場せしむ。

十一月五日 庭球協會主催清水氏歡迎試合帝大コートに於て開かれ選手一名出場せしむ
同月七日 東京日日新聞主催清水氏歡迎試合舉行さる。

同廿日 秋季大會及部員大會舉行。
十二月十七日 清水氏庭球賽覽試合あり吾部よりも選手一名出場せしむ。
大正十一年一月 豫餞會及委員改選あり委員三名推選せらる。

三月二十五日 春季練習開始しトーナメントに備ふ。

弓 術 部

夏季練習八月二十七日より九月まで十一六日

日間相州鎌倉に於て夏季練習を行ふ十月の關西遠征のため猛練習を行ひ朝は九時より十二時まで正式練習を行ひ午後は又三時より五時まで行ふ宿所は大町の教恩寺を借りて十三名合宿す。

九月六日に鎌倉を引上げ同日夕刻東京驛にて解散す。
九月八日より十月二日まで毎日正午より道場に於て猛烈なる練習を行ふ。
關西遠征自十月四日
吾が部は十月四日監督一名選手拾一名關西遠征の途に付く。

六日雨天なれば早朝京阪電車にて大阪に行き大阪高商と試合す、其の結果選手八名づつ二十時にて源平戦を行ひ吾が軍八十七中大阪高商方六十中にて二十七本の差にて大勝す。其れより直ちに神戸に向ふ。

七日、晴天、正午より對關西學院試合を行ふ出場選手八名づつにて二十時源平戦本校九十一中學院方八十七中にて四本の差にて勝つ。

八日晴天午後一時より對神戸高商試合を行ふ出場選手六名づつ源平戦本校方六十三中、高商方三十九中にて二十四本の差にて大勝す。試合後京都に歸る。

九日、晴天、午前十一時より對三高試合を行ふ出場選手各拾名源平戦に於て本校方百十五中、三高方六十六中にて四十九本の大差にて本校大勝す此の大差は試合の差のレコードなるべし。

十日、終日休養す。
十一日、晴天午後一時より京都帝大と試合す出場選手各七名源平戦本校方八十八中京大六方十六中にて二十二の大差にて本校大勝す

四日に東京を立つてより戦ふ事五度何れも大勝し此の度も亦前年先輩が關西遠征せし時と同様連戦連勝の榮を得た事は吾々一行の最も愉快とする所である。此の日試合後京都帝大弓術部の主催の晩餐會に連なり其夜急行にて京都を出發して翌十二日午後一時四十分東京驛に凱旋す。

十一月四日より六日まで三日間關西遠征全勝記念秋季大會を催す
十一月四日午後一時より内部の大會を催す源平戦を行ふ
十一月五日、午前九時より十一時まで對部競射を行ひ

正午より都下專門學校選手の競射を行ふ
十一月六日、午前十時より十一時までは校友の競射を行ひ
午前十二時より來賓名士の競射を行ふ
尚ほ浦上師範北村教士の禮射ありたり

十一月十日、午後一時より本校道場に於て本校對農業大學の練習試合を行ふ。出場選手各拾名、二十射、源平戦に於ては本校方百二十六中、農大方百十七中にて又紅白戦は不戦八人を殘して大勝す

十一月十二日、晴天、午前十時より駒澤明大道場に於て年中行事の一である明治大學と本學との對校試合を行ふ。
出場選手各拾名
源平戦に於ては本校方百二十三中、明大方百十二中にて又紅白戦に於ては不戦四人を殘して大勝す

十一月廿六日晴天、午前十時より本校道場に於て本年春季試合を繰越し明治大學と對校試合を行ふ

出場選手各拾名
源平戦に於ては本校方百三十七中明大方百十五中

(本校方の百三十七中は本校の試合中のレコードを破る事三本なり)
紅白戦に於ては二人の不戦を残し此れ亦大勝せり

十二月十日、本學期納會を行ふ、
以上の如く本年の秋季は全勝の榮を擔へ此處に再度の黄金時代を現出す。

因に本學年に於ける委員は田中郡二樓田信雄浦井靖の三氏とす

角力部

一月十日、吾々の生涯忘る可からざる日、大隈總長の赤ガウンを残して永遠に逝れし日：
仔て

十六日、夜は部員一同市ヶ谷加賀町常敬等に御通夜をなす。

十七日、御葬儀につきては當日午前四時部員一同故總長邸に参邸校旗手を拜命し、靈柩に感従せり。

二月五日、第三回關東學生角力大會國技館に舉行せられたれ共故總長喪中につき出場せず選手一同大會委員として働く。

十五日、午後十時上野驛發の列車にて北海道遠征の壯途に上る、一行十二名、
二十七日、至る所盛大なる歓迎を受け午前七時歸京。

六月十日、道場落成式を兼ね角力大會を舉行す、折悪く雨天の爲め來賓學校の少きを遺憾とせり。東京角力協會より三重役角道獎勵會より木戸氏及び本部顧問玉橋、二子山兩氏來

場午前九時内ヶ崎部長以下着席、壯嚴裡に落成式、七儀祭を行ふ。尙當日道場新築功勞者として菊込豊君、植秀雄君、黒木幸英君表彰さる。午後一時より角力大會を雨天の爲め道場内に舉行五時終了し、夜は道場に膳を布き大席間として祝賀會を催せり。

水泳部

大正十年十一月卅日部長中村進午博士辭任につき五來教授就任せられたり尙本學年度の報告期間大正十年九月より大正十一年三月迄は水に縁薄き時期として別に特に報告すべき事項之無し

蹴球部

十年九月十日 練習開始。
九月拾三日 前キャプテンにして當部創立者たる井上氏上京に付歡迎茶話會を開く。

十一月十九日、横濱Y.C.A.C外人俱樂部と第一回練習試合を行ひ、十一月廿七日、同第二回戦を行ふ。

十二月三日 第二回蹴球大會を開き此の日卒業生對、次年度、選手の試合及び競争部對司衛部。庭球部對端艇部の對部試合を行ひ後茶話會あり。同日卒業生の爲に豫饌會を開く。

十二月二十三日より小田原、松の湯旅館に合宿翌年一月十日迄小峯公園にて練習す。

十一年二月八日第五回全國蹴球大會參加の爲下阪寶塚松樂館に投宿、十一日 大阪毎日新聞社主催の大會へ出場す。
二月十五日より三月九日迄練習休止し、三月

十日より再び開始す。
三月廿六日 全關東軍と第一戦を行ふ尙ほ四月廿三日には同第二戦を行ふ豫定なり。

吾部も近時我國一般蹴球の奨励せられ又發達し來るにつれて宿年の希望漸く其發路に就き研究に奨励に而して練習に苦辛を累ね今や將に一大勇躍の端を切らんとしつ、あり斯して吾人は今や英米諸大學競技の華而して又運動精神修養の極技とせらる該技の宣傳に貢獻する所あらん、私かに期待しつ、あるものなり。

山岳スキー部

本年度に於ける山岳部及スキー部の報告左の如し尙ほ詳細は大正十一年六月本部刊行の年報(一九二〇—一九二二)リユツクサツクに掲載せり。

第一班金峯山と甲武信岳、
リーダー十二名案内一名
十月十五日 甲府驛を發し和田峠—天神森—天鼓林—昇仙橋—御岳松田屋泊 十六日

御岳—猫坂—下黒平—木賊峠—増富嶺泉津金樓泊 十七日 増富—金山—金峯山—樵夫小屋泊 十八日 小屋—梓山白木屋泊 十九日

梓山—十文字峠分岐點—澤を離る—三寶岳—甲武信岳—眞ノ澤河原露營 廿日 露營地—栃本—影森—上野、

附記、甲武信岳頂上にて二班に分れ前者六名は眞ノ澤下り後者六名は梓山泊翌日十文字峠越え、二名は栃本より雁坂峠を経て歸京、

第二班日光白根山より片品川溪谷へ
リーダー十一名
十月十五日 上野驛、日光驛 荒澤—停留場—瀨野野營地 十月十六日 野營地—志津小

屋—大眞各子山—志津小屋 十月十七日 小屋—光徳沼—湯本 十月十八日 湯本—前白根山—奥白根山—湯本 十九日 湯本—金勢峠—丸沼干明養魚場—白根温泉 廿日 白根温泉—小追貝 廿一日 追貝—沼田町—澁川驛—伊香保木暮旅館 廿二日 歸京、

第二回スキー練習
時日 大正十年十二月二十五日より翌一月九日まで、場所 磐梯山麓中之澤温泉、
參加者 神尾部長を首め外に先生七名其他立大、立中、上智大會中等の有志五名をも加へ總勢八十名

全國スキー選手權大會二月十二日、
體育會加入(大正十年九月)

井上壽三、會田次郎、土屋由郎、田中郡二の四君に依つて創立せられたる早大山岳會は急速の發展を遂げ、スキー部開設せらる、や、樺太、北海道、北越の猛者相次いで

で入會せられ翌年二月高田市に於ける全國スキー大會に優勝せり。本會の山に、スキーに於ける活躍は體育會の認むる處となり

大正十年度は名稱のみ加入を許されしが十一年度より山岳スキー部として名實共に加入せり。本年度の委員次の如し。

代表委員 山田 廣
委員 小笠原勇八、中島泰一郎、土屋由郎、會田次郎、中川新、東條義人、

蒔田庄太郎
尙ほ競技に關するものとして特に報告すべきは前記スキー部の練習及對外優勝にして今其概報を舉ぐれば左の如し。

大正十一年一月六日早朝部員の一部七名は東京日々會津支局の穴澤氏の聘により若松市へ

スキー宣傳の爲下山した、七日早朝より見學
將校の前にて禿山で滑走を試みた。午後川桁
へ歸つた。川桁には神尾部長が部員三名と共に
軌道の出るのを待つて居られた、昨日よりの
吹雪の爲軌道不通との由加ふるに大隈總長
危篤の趣を聞き愕然とした。九日に開催する
スキー大會も此爲遠慮した方がい、だらうと
の事にて部長を残して五里の雪路をスキー穿
つて合宿に歸る。

九日の大會は只納會を名として部員のみの
競技を行ふた、
積雪少量と大隈總長薨去の爲警梯登山も五色
への新路をも作ることに出来なかつたことは
返す返すも残念であつた。

大正十一年二月八日スキー部選手十名は先輩
霧島氏監督の下に二月十二日田口驛附近赤倉
山に舉行さる、東京スキー倶樂部主催萬朝報
社後援の全國スキー選手權大會に出場する爲
に出費す大會第一の呼物たるリレーレースに
入るや早軍の三番高橋先頭を切りつ、コース
を見失ひ法軍又これを追ひ、現れざること一
時間餘、遂に新進新潟高校に名を成さしむる
に到つた。

○専門學校長距離(三千五百米)一着新高、二
着早大、三着早大
○専門學校(二千五百米リレー)一着新潟高校
二着早大

○専門學校(短距離千五百米)一着早大、二着
早大、三着早大、四着早大、此レースは實に
早大獨舞臺の觀があつた。

○クリスチャニア、スラローム一着早大、二
着法政、三着早大
かく不幸リレーには敗れたりとも雖も他のレ
スには悉く優勝し再び覇權は我早大の手に歸
した。

第十一 附早稻田工手學校

第一施設經過

(大正十年八月より同十一年七月に至る)

- 一、大正十年八月中校舎移築工事未了の爲八
月二十一日規定の通授業を開始する能はず
九月九日迄臨時休校す
- 一、右臨時休校の補講をなさんが爲十月中の
秋季休業を全廢し十二月及一月の授業日數
を延長すること、せり
- 一、九月十日始業式舉行十二日授業を開始す
- 一、十月十五日電工建築土木の各科生徒は日
光方面へ機械科生徒は日立筑波方面へ見學
旅行の爲出發十六日歸京
- 一、十一月十九日贊助會主事片山利久氏臨時
人事係主事兼任に轉じ高等豫科主事兼高等
學院第二部事務主任土屋詮教氏本校主事と
なり十二月兼任を解き本校専任に轉す
- 一、十一月二十日第二回同友會大會秋季大
會を中央校庭に開催す
- 一、十二月二十三日校長徳永博士十ヶ月間の
歐米視察をなし無事歸朝
- 一、大正十一年一月十日總長大隈侯爵薨去せ
られたるに付始業を見合せ一月十九日迄休
校す
- 一、右に付學期末の授業を二月十日迄延長し
補講す
- 一、二月一日本校編纂の教科書を早稻田大學
出版部より發行の契約をなす
- 一、二月十二日講堂に於て第十九回卒業式を
舉行す各科卒業生數左の如し

- 機械科生百二十二名
- 電工科生九十一名
- 探礦冶金科生十八名
- 建築科生六十三名
- 土木科生四十五名
- 一、二月十五日始業式を舉行す
- 一、二月十四日授業開始本學期より製圖室を
増設し土木科講師室兼實習器具室を新設し
本校專屬の理化學教室並に備品室を設く
- 一、三月十八日機械科生徒百二十名所澤航空
學校見學に出發即日歸京
- 一、三月二十日本校改正學則を東京府に申請
す
- 改正の要點は從來の五期制を豫科三期本科
二期高等科一期の六學期三ヶ年卒業とし修
學上實驗實習に重きを置き各科の内容を充
實するにあり
- 一、四月十五日電工科生箱根方面に水力電氣
見學の爲出發翌十六日歸京同十六日機械科
生箱根方面に瓦斯紡績機關庫水力電氣見學
十七日歸京
- 一、四月二十三日第二十一回同友會春季大會
を中央校庭に開催す
- 一、四月二十六日附を以て本校改正學則並に
生徒定員變更の件左の通り 可ありたり
戊學甲二六九一號

大正十一年三月二十日附申請早稻田大學
附屬早稻田工手學校學則並生徒定員變更
の件認可す
大正十一年四月二十六日

東京府知事 宇佐美勝夫

- 一、五月二十四日豫て編成の生徒心得十章五
十三項を印刷に附し在學生及新入生一同に
頒布すること、せり
- 一、本校生徒の故總長大隈侯爵記念事業に關
し六月一日より二十八日に至る數回に互り
講師會及生徒委員會を開き本校在學生一同
今後三年間毎月一人二十錢づゝの積立金を
なし金二萬圓を同事業に寄附することに決
議し八月より實行すること、せり
- 一、六月十日同友會幹事會を開き規則改正を
附議し役員増加の件會費の件雜誌年四回發
行の件等に付決議す
- 一、本校生徒取締は從來巡視と稱せしも理事
會の決議により七月より生徒監督と改稱し
其任に當ること、せり
- 一、七月十六日大學講堂に於て第二十回卒業
證書授與式を舉行す各科の卒業生左の如し

第二 教職員(大正十一年)

- 校長 理學博士 徳永 重康
- 主事 土屋 詮教
- 商議員(イロハ順)
- 服部 金太郎

講

大橋新太郎 太田黑重五郎 吉村鐵之助 竹内明太郎 高松豐吉 村井吉兵衛 淺野應輔 師イロハ順 伊原貞敏 岩崎篤太郎 岩崎富久 岩野城生 伊藤直和 今井兼次 石井定 井上邦治 坂駒雄 原田長松 萩本文海 星野富太郎 堀江貞治郎 德永重康 德永庸 鳥山邦彦 大隅菊次郎 緒方一三 織田隆 沖田常正 岡村千曳

工學士 渡邊寅次郎 工學士 渡部善一 早大工學士 川原田以太郎 工學士 片山勝藏 農學士 片岡孟夫 工學士 加藤觀三 工學士 吉原重威 早大工學士 吉田謙二 法學博士 田中穗積 武田修三郎 高澤雅雄 高野雄平 高田勇雄 高橋勇 高橋末治郎 竹林磯次郎 坪内信 土屋詮教 内藤多仲 長岡乙次郎 中島啓藏 奈良久助 村田榮太郎 梅若誠太郎 浮田和民 上原静夫 上井磯吉 氏家謙曹 能村千別

早大工學士 野村堅 早大工學士 野村松三 早大工學士 桑田福太郎 久松廉吾 楠本幹夫 山本忠興 山内弘 山口義勝 山田隆介 真隅隆吉 松本容綱 增田綱 牧野鑑造 益子充 間野次郎 藤井鹿三郎 藤井隣次 藤本慶祐 今和二郎 後藤量介 河野通彌太 小泉素彦 寺澤信計 有元岩鶴 阿部新作 秋田重季 淺井郁太郎 足利於菟丸 栗谷鶴二 荒井惟俊 青木精一

英	國語	修身	學科		
			第一學期	第二學期	第三學期
七	四	一	豫	豫	豫
四	二	一	英	英	英
四	二	一	法	法	法

第三 (大正十一年四月) (月改正認可)

豫科 (表中數字ハ每週授業時間ヲ示ス)

青江隆二 佐藤功一 定金右源二 岸畑久吉 木村三郎 木村榮二郎 北澤武男 桐山均一 三宅常時 三浦七郎 三村宗一 水船克之 篠原喬亮 志水直彦 下村孝一 日高藤麿 平野侃介 平井喜久松 師岡秀麿 森米次郎 森田慶一 鈴木德藏

交通學	一	二	二	同	實	習	四	八
橋梁學	一	三	一	製	圖	四	四	六
工業數學	二	一	一	建築	大意	一	一	一
水利學	一	二	二	英	語	四	一	一
石工學	二	三	一	土木	機械學	一	一	一
河海工學	一	二	二	合	計	二八	三〇	二五
測量學	二	一	二					

第四 在學生徒數(大正十一年七月現在)

期別	科別	機	械	電	工	探	採	鐵	冶	金	建	築	土	木	小	計	合	計
豫科第一學期																		四六一
同第二學期																		一、〇二四
同第三學期																		六五五
本科第一學期		一四五		一六八		一三		一三一		一〇四		五六一						五六一
同第二學期		一一一		一〇八		九		八四		九九		四一一						四一一
高等科		七三		六七		一二		四七		二九		二二七						二二七
合計		三二八		三四三		三四		二六二		二三二		二九九						三、三三九

第五 卒業生數(大正十一年七月調査)

學期別	科別	機	械	電	工	探	採	鐵	冶	金	建	築	土	木	小	計	合	計
大正二年二月		一五		四八		九		一九		二八		一一九						一一九
同七月		二六		七三		七		一六		二二		一四九						一四九
大正三年二月		一一		六四		一六		二六		三七		一五四						一五四
同七月		一六		六一		一六		二四		三八		一五五						一五五
同四年二月		二七		六八		一〇		二七		二八		一六〇						一六〇
同七月		三二		八八		二二		一八		四五		二〇五						二〇五
同五年二月		二四		五六		一六		二二		三一		一四九						一四九

同七月	二四	四六	二四	二四	三六	一六	一六	三六	一四六
大正六年二月	三五	三六	一六	一六	二五	二八	二八	二八	一四六
同七月	五七	四三	三三	二〇	二〇	一九	一九	一九	一七三
同七年二月	四三	三九	二六	二〇	一九	一八	一八	一八	一四七
同七月	六二	三四	三五	二六	二三	二二	二二	二二	一八〇
同八年二月	六四	四七	三六	二〇	一一	一一	一一	一一	一七九
同七月	一〇七	四八	四五	二二	一一	一一	一一	一一	二三五
同九年二月	一〇四	七四	三七	三六	一四	一四	一四	一四	二六五
同七月	一一一	八二	四七	三五	三五	三一	三一	三一	三一一〇
同十年二月	一一一	七八	三四	二七	二四	二四	二四	二四	二七四
同十一月二月	一二四	九一	一八	六三	四五	四一	四一	四一	三四一
同七月	一一八	九五	二六	五三	四八	四八	四八	四八	三四〇
累計	一〇二	五九	八	四三	六五	二七	二七	二七	四、〇八二

第十二 校友會

大正十年十二月十二日午後五時上野公園内精養軒に於て例規中央校友會を開催す來會者百廿餘名時刻判り席定るや開會を宣し先づ平沼會長挨拶を述べ次に鈴木常任幹事より會務及び前年度決算報告をなし續いて議事に入り推選校友の件會長評議員並びに幹事の任期に關する件等の事項を議了したり

大正十年を迎へ生新なる力を以て邁進せんとして未だ僅かに一句を過ぎざる一月十日、本大學創立の大恩人たる總長大隈侯爵を喪ひ、我が校友一同は巨大なる支柱を失ひたるが如くに誠に哀痛悲傷の感に堪えざりき當日其の喪の發表と同時に、本校友會に於て

も取敢へず各地各方面の校友に悲報を發し、更に幹事會を開きて、葬送並に各地校友會に於ける遙弔式執行其他に就き懇談を重ね本會役員及び關係者を擧げて葬儀の準備に徹衷を致せり。告別式當日なる十七日には、本會の役員は固より各地校友會代表に京濱在住の校友全部これに加はりて、校葬の禮を以て葬送する本大學關係者と俱に靈柩を式場なる日比谷に送り、告別式より音羽の埋棺式に至るまで、痛哭の裡に哀悼の至情を捧げたり。また、各地校友會に於ては、告別式當日夫れぞれ遙弔式を擧げて遙かに敬弔の至誠を致したり。(別項参照)

更に、早稻田學報第三二五號及び三二六號を併せて、故總長大隈侯爵追悼號を編纂し故長の事蹟、發病より薨去までの經過、葬儀の模様、及び本大學關係者の感想等を録して追悼の情を表すると共に、永く記念すること、せり。

本校友會の會員は、本大學の發展と俱に年を追ふて其數を増加しつゝ、あり、本會もまたこれに隨つて形質共に漸く重きを爲さんとす今、本年度中に於ける新加入者及び會員總數を擧ぐれば次の如し。(大正十一年三月三十一日現在)

新推薦校友 十名
新得業者 九百十名

累總計 一萬八千二百六十一名
此他各地方に於て早稻田大學校友會の名を以て開かれたる會合中判明せるものを列擧すれば概ね左の如し
大正十年八月一日

- 八月五日 尾道校友會 平沼學長 五來教授
- 八月七日 會津校友會 鹽澤博士
- 八月九日 萩校友會
- 八月十三日 廣島縣校友會 平沼學長
- 八月十七日 日光校友會 平沼學長 鹽澤博士 内ヶ崎教授
- 八月十八日 早大鞍手會 青柳教授
- 八月廿一日 熊本校友會 青柳教授
- 八月廿三日 秋田縣橫手校友會 中村(進)博士 杉山教授
- 八月廿七日 筑後校友會 青柳教授
- 八月廿九日 佐賀縣校友會 青柳教授
- 八月卅一日 三池校友會 青柳教授
- 八月卅一日 新潟市校友會 平沼博士

- 九月十三日 神戸市校友會
- 十一月十九日 同
- 十二月十一日 同 平沼博士
- 九月十九日 名古屋校友會
- 大正十年三月廿五日

大正十年十一月廿四日

- 大阪校友會 鹽澤學長 波(餐)幹事
- 十一月廿六日 早稻田春秋會 (宇都宮(在住者))
- 十一月廿七日 茨城縣校友會
- 十二月三日 華盛頓校友會
- 十二月八日 長野縣校友會
- 大正十一年一月廿一日

京城校友會
二月二日 長岡校友會
二月十日 旭川校友會
二月廿八日 小樽校友會
又故大隈總長薨去につき遙弔式又は追悼式を行ひたる校友會の中判明せるものは概ね左の如し

- 早大横濱會 元山校友會
- 青森縣校友會 沖繩校友會
- 新潟縣新發田校友會 シヤートル校友會
- 宇都宮早稻田春秋會 釧路校友會
- 足尾稻門會 室蘭校友會
- 山梨校友會 北海道華震市街校友會
- 滋賀縣校友會 宮城縣校友會
- 姫路校友會 長岡校友會
- 廣島縣土生校友會 名古屋校友會
- 鳥取縣校友會 和歌山校友會
- 香川縣校友會 京都校友會
- 高知縣校友會 大阪校友會

- 廣島縣校友會 宇佐校友會
- 吳校友會 福岡縣嘉穂校友會
- 但馬校友會 南滿洲四平街校友會
- 島根縣校友會 京城校友會

第十三 出版部

本大學設立の本旨を貫徹するの一方便として明治十九年十月始めて出版部(當時は東京專門學校出版局と稱す)を置き政學講義を創刊して本邦に於ける講義錄發行の端を開きしは實に三十有六年從來主として男子の教育を目的として刊行し來りし五種講義錄の外本年新に高等女學講義錄を創刊し以て女子教育の普及發達に裨補すべく企圖せり既往に於て講義錄に依り各種の學科を講修せしもの無慮壹百餘萬(明治二十二年以前の記録現存せざるを以て之を省く)に及びり明治二十八年早稻田叢書を創刊して書籍發行の端を開きしより大小の書籍を發行すること五百四册今期間の發行七册之が爲に本邦の文化を裨補せしことの尠からざるは多言を要せず今現に發行しつつある講義錄の種類を擧ぐれば左の如し

政治經濟科(修業年限一年半)	每月二回	編輯顧問	文學博士	坪内 雄藏
法律科(同上)	每月二回	編輯長	青柳 篤恒	
文學科(同上)	每月二回			
中學科(修業年限二年)	每月二回			
商業科(修業年限一年半)	每月二回			
高等女學科(同上)	每月二回			

出版部は大正七年十二月十日の本大學維持員會の決議により其組織を變更して株式會社と爲したれども元の如く早稻田大學出版部と稱し本大學々長及び理事一名其相談役となり本

- 小倉校友會 撫順校友會
- 福岡縣校友會 大連校友會
- 奉天校友會 長春校友會
- 上海校友會 佐賀縣校友會

大學校外生の養成機關たること舊の如し現任の役員相談役編輯顧問編輯長左の如し

取締役部長	法學博士	高田 早苗
取締役主幹	市島 謙吉	
取締役主事	種村 宗八	
取締役主事	高田 俊雄	
監査役	前島 彌	
監査役	小久江成一	
相談役	侯爵 大隈 信常	
相談役	法學博士 鹽澤 昌貞	
相談役	法學博士 平沼 淑郎	
相談役	法學博士 田中 總積	
編輯顧問	文學博士 坪内 雄藏	
編輯長	青柳 篤恒	

○出版部創立以降校外生年別表

年 度	政治經濟							法律科		行政科		文學科		歷史地理		商業科		中學校		高等國民教育科		計		
	政治經濟	法律科	行政科	文學科	歷史地理	商業科	中學校	高等國民教育科	政治經濟	法律科	行政科	文學科	歷史地理	商業科	中學校	高等國民教育科	政治經濟	法律科	行政科	文學科	歷史地理		商業科	中學校
二十三年	八九〇	七〇	四〇																					一、九三
二十四年	四五三	四二	五五																					一、二五
二十五年	五七五	四三	三三																					一、二八
二十六年	七六五	七六	二九																					一、七〇
二十七年	八九四	八五	三六																					二、〇五
二十八年	八九九	七六	三三	九五																				二、九一
二十九年	一、〇〇三	一、九七	七九	八九																				四、五九〇
三十年	一、五五五	二、一五	一、〇〇	一、五七																				六、二六〇
三十一年	一、九五	二、三三	二、一三	一、三五																				七、八四
三十二年	二、六九	三、一九	二、九一	一、三五																				一〇、二五
三十三年	二、五〇	四、〇六	三、一九	二、七九																				一三、五五六
三十四年	二、七九	三、四三	二、四三	三、八一																				一六、四四
三十五年	二、六七	三、〇六	三、七四	五、〇九	一、六二																			一三、〇〇
三十六年	三、六二	三、七八	三、二四	三、三三	二、六五																			一六、四四
三十七年	三、七四	三、七九	三、〇五	三、七四	三、〇〇																			一七、三七
三十八年	四、一七	三、二七	二、一八	三、五九	三、〇三	五、四一																		二二、〇九
三十九年	三、五二	三、二九	一、七六	三、五九	二、四五	八、〇七	六、二九																	二六、六六
四十年	三、〇四	三、五四	廢刊	三、〇〇	廢刊	八、八〇	七、九三																	二六、〇七
四十一年	二、八四	三、一九		二、四八		八、六三	二、八七																	三三、五九
四十二年	三、〇三	三、五七		二、五三		七、九二	三、〇六																	三三、九〇
四十三年	二、九八	三、五九		二、六九		五、四九	二、五八																	二六、七六
四十四年	三、四四	三、五九		二、八四		六、〇九	一、五〇																	三二、四三
四十五年	三、六五	三、七九		三、一四		八、一〇	一、四八																	三三、四六
大正二年	三、六六	三、七三		三、三五		四、〇六	一、七二																	三二、九七

年 度	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
大正三年	四、〇八	四、三六	三、九二	六、〇八	一三、〇四	四〇、七〇																			
大正四年	三、七九	四、〇四	三、九五	五、九一	一三、六〇	四九、六二																			
大正五年	四、三三	四、九三	四、八四	七、〇七	一五、三九	五五、六四																			
大正六年	三、四八	三、六〇	三、五〇	七、六〇	一三、〇七	四九、三三																			
大正七年	三、五七	三、三六	三、〇九	一、二〇	三五、三二	五五、九八																			
大正八年	七、八四	六、九〇	五、九六	三、八〇	四五、三〇	八八、八〇																			
大正九年	二、〇六	九、三五	七、四七	三、八三	四八、〇四	一〇〇、五九																			
大正十年	二、六八	一〇、一五	九、六五	二、四八	五三、九九	一〇九、一七																			
大正十一年	二、七五	一三、〇一	一三、〇三	一、九〇	六二、六三	一八八、七七																			
計	二九、五五	一三、〇八	二六、四八	一〇、七三	三三、七五	一九、〇四	四三、三九	一〇、五五	一〇八、七七																

大正十一年度本大學報告右之通候也

大正十一年十二月

早稻田大學

學長 鹽澤昌貞

追テ從來前年九月ヨリ八月ニ至ル一ケ年間ノ報告ニ有之候
 處大正十年以後四月ヲ年度ノ開始期ト改メ候結果本年度分
 二限リ大正十年九月ヨリ大正十一年三月ニ至ル八ケ月間ノ
 報告ニ候



御歳暮の御贈答品

は三越の品に限りません、御贈答品は
 どなたの方にも喜ばれる便利な品が一
 番良いのであります、が三越にはそ



- ◆ 歳暮格安反物大賣出し (十二月一日より)
- ◆ 獅子板陳列 ()
- ◆ 仕立衣裳座蒲團陳列 ()
- ◆ 新年用盆裁陳列 ()
- ◆ 三越歳市の ()

の種類の品物が澤山取揃へて御座い
 ます。又何人も便利で重寶かられ本
 店支店に共通で文化的な御贈答品は
三越の商品券です

三越呉服店

東京市

豊河町

.....みの日一十は日休定の月二十.....
んせまみ休め爲の利便御は日五廿.....

偉人故大隈侯が發起人となられた唯一の社會

- ◇ 家政の改善 || お互に節約をいたしませう
- ◇ 文化的生活 || それで保険に加入りませう
- ◇ 堅實で安全 || 會社は日清生命を擇ひませう

日清生命保険會株式

東京丸の内